Rider Series

爆睡中

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｒｉｄｅｒ　Ｓｅｒｉｅｓ

【Ｎコード】
Ｎ９９７９Ｓ

【作者名】
爆睡中

【あらすじ】
ＩＳが世界を変えてから数年。Ｒｉｄｅｒと呼ばれるパワードスーツが生まれた。開発者の名前は、織斑一夏。彼は五代雄介という名でＩＳ学園に在籍することになる。存在することのない『仮面ライダー』の物語が始まる。＊ＩＳの世界を舞台にした平成ライダーとの設定クロス物。

始動（前書き）

以下、改訂版ですが内容はほとんど変わっておりません

始動

突如、一人の天才の気まぐれによりＩＳという起爆剤が誕生した。名を白騎士。発表されてから一ヵ月誰も気にかけることなく忘れ去られたころ、『白騎士事件』と後の世で広く知られるそれは起きた。世界中に存在するあらゆる戦闘兵器が一つのパワードスーツに無残にも敗れたという事実はさながら爆風の如く広まっていき、目まぐるしい変化の波が世界中に振りまかれた。あらゆる戦略兵器及び軍人は徐々に戦場から姿を消していき、女性優位の女尊男卑の世界にぬり潰されていく。

そして一人の少年の世界も大きく歪み塗り潰されていく。世界を変えた少女と旧知の仲であったから。世界最強になった姉の家族だったから。それは確かに少年を変えた切欠だ。世界を変えるという偉業を為した天才を羨み、間近に見る最強の座を見て強さへの焦燥を感じた。だけど原因は単純。そんな状態に置かれた彼が独りで置かれていたという状況が彼を歪ませた。

政府によって重要人物保護の名目として姉と幼馴染から引き離される。世界最強である少女が持つ肉親である少年は唯一最大の弱点、裏切りをさせない枷として利用されたのだ。親しい人間が出来ないように各地を転々とされ、その扱いは後に同じく各地を転々とした幼馴染の少女より酷いものであった。

嫉妬、憎悪、侮蔑、憤怒。そんな負の感情を成人男性から向けられ、連日拷問じみた虐待を受ける。彼が人を信用できなくするために。孤独になるように。枷となる人形に意志はいらない。

いつしか日常に浸透していき、いるだけであらゆる嫌がらせが始

まりさらなる地獄が始まる。朝、登校すると知らない誰かに少年は罵倒される。石やゴミを投げられる。まだそれは良い方で学校へ行けばさらに悪くなる。転校初日からは男子生徒からはいじめのターゲットに選ばれる。モノが消えた。ボロボロの私物がゴミ箱にあった。殴られた。蹴られた。唾を、残飯をかけられる。嘲笑と侮蔑の視線だけがあり、少年の味方は一人もいない。帰りには知らない人達に拉致されそうになった。殺されそうになった。ただ孤独で無意味な日常だけが過ぎていく。

少年が唯一心安らぐひと時は家という名前の檻の中だけ。皮肉なことに劣悪な環境の原因となった人間達が用意したその檻だけが安全が保障されていた。孤独ということが彼にとっての安らぎであり幸せなのだ。監獄に篭る少年は画面の向こう側にいるヒーローのように誰かが自分を助けてくれるのを夢見る。

そんな日々が続いたある日。少年は海外へ亡命することを決意する。監視され味方の一人もいない少年には限りなく不可能に近いことであったがそれはあまりにも簡単に成功した。まるで誰かが手引きしたかのように。そうして少年は地獄の日々からあっけないほど簡単に開放された。しかし、もう遅かった。壊れてしまった少年は憑かれたように一つの研究を行っていた。それはＩＳを超えるパワードスーツの作成。ＩＳより優れていて、男でも白騎士のような強さを手に入れることが出来る最強の兵器を造りだすことを少年は誓う。

――――――――ヒーローがこの世界にいないのなら自分で最強の存在を造ろう。

実験台は常に自分を少年は使った。他人が怖かったから、他人が信用できなかったから。壊れた自分ならどうなっても構わないと思えたから。世界を転々としながら独りで実験を続けていく少年。人から外れていく自分自身に気付きながらも何の感慨も待たず、誰もがヒーローになれる夢の機体を模索し続ける。そんな純真な子供が持つ無垢な願いを抱いたまま成長した少年は相反するように大人びていき感情は欠如していった。壊れた少年は空想にしか存在しない英雄に囚われ深い深い闇の底に沈んでいく。

彼にとって最も不幸だったのは優れていたことである。誰もが憧れいずれ現実という壁に阻まれ色褪せる夢を実現できる才能があったこと。最強に至れる技術を造り出し得る頭脳があったからこそ堕ちた。結果、人を外れかけた少年は完全に人では無くなった。

そして時は流れ第2回モンド・グロッソ決勝戦当日。謎のパワードスーツが会場の注目を集めていた。名を『Ｒｉｄｅｒ』。全身を黒い装甲で身を包み隠し、金で彩られたラインと両の角、赤い瞳、まるでクワガタを彷彿とさせるような姿だった。

通常ＩＳの防御はほとんどがシールドエネルギーが占めている。つまりＩＳにとって物理的な装甲はほぼ意味を為さない装飾に等しい。それなのに全身装甲をしているこの機体。仮にＩＳだったとしても珍妙な部類に入るだろう。よって、推測されるのはこの機体にはシールドエネルギーが装填されていない事実。

人型の甲冑に覆われているだけでＩＳのような派手な装備はなく、シンプルな面立ちであったがそれが逆に目立っていた。

そして何より会場を沸かせたのがこの機体の搭乗者は同じく決勝

戦に出場した白騎士の搭乗者、織斑　千冬の弟であるということ。姉弟対決というのも一つの話題ではあるが、男である彼があの場にいるということが最も関心を占めている。

白く高潔な女戦士（ヴァルキリー）と赤い眼をした黒の怪物（モンスター）。正反対の外見を持った姉弟は動き出す。白と黒の共演。姉と弟の円舞。それまでに行われた試合は全て前座と化し、この戦いの前では児戯も当然だった。一種の戦争が小さな戦場で繰り広がれる。間違いなく頂上決戦に相応しい次元を超えた争いが始まった。

壮絶を極めた死闘の結果は、引き分け。

しかし、男が世界最強と渡り合ったという希望は世界に発信され、彼が造りだしたパワードスーツ『Ｒｉｄｅｒ』はＩＳ以上の知名度を持つようになる。『ＲｉｄｅｒＳｅｒｉｅｓ』と呼ばれるこのパワードスーツは『ＩＳ』が出現したときの再現をするかのように世界を瞬く間に塗り替えていった。

――――――――――――――――――――そして物語が始まるのはこの数年後である。

EPISODE1　A New Wind. A New Story.

「全員揃ってますねー。それではSHR始めますよー」

そう言うのは教壇に立つ童顔の女性。生徒と変わらない背丈。身体に合わないぶかぶかの服にずれた眼鏡という未成年にしか見えない彼女の名前は山田真耶。驚くことにこのクラスの副担任をしている。

ただ一つ、彼女が育てた豊かに実っている二つの果実だけは大人である。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

教室内は先ほどの式で出てきたある人物達の話題で占められていて、誰も反応しない。その様子に真耶は仕方ないと思いつつも彼女は自己紹介をするように促す。うろたえる副担任を特に気にしないまま生徒達の自己紹介は終了した。

余った時間でなんとも言えない雰囲気が流れる中、教室の扉が勢いよく開かれる音がした。そこにいるのは先ほど彼女達の話題となった人物達だ。

それを見て女生徒達の黄色い声援が響く中、副担任である彼女の顔はみるみる青くなっていく。

「お、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな。そんなことより一つ質問があるんだがいいだろうか？」

山田真耶が話しかけた女性の名前は織斑千冬。このクラスの担任であり最強の女性である。彼女が放つその一言に冷や汗が止まらない副担任。

「私は山田君に彼と一緒に教室に行くように頼んだのが何故その彼が私と一緒に来たと思う？」

「そ、それはっ……」

「聞いた所によると、彼はここに来る途中、資料を取りに行くのでここで待ってくれと言われ待っていたが一向に帰ってくる気配がなく私が来るまでずっと待ちぼうけていたそうだ」

それを聞いて千冬の後ろに立つ青年に涙目になりながら必死で謝りだす。

「あっ、あの、本当にゴメンなさい。お、怒ってる？　怒ってますよね？　でもね、あのね、男性と話すの久しぶりで緊張しちゃって逃げちゃった…んじゃなくてすっかり忘れちゃったんですよ。だから、そのゴメンね！　本当にゴメンなさい！」

「いえ、大丈夫ですよ。自分も少し考えが足りませんでしたし。ですから、山田先生落ち着いて下さい」

泣きながら謝る山田先生を宥めるもう一人の人物。彼こそもう一人の話題に上がった人物。この女性しかいない華の園、ＩＳ学園に唯一在籍することになった男性である。

彼も実年齢はとても若そうに見え、生徒達と歳が変わらなそうに見える。が、その大人びた雰囲気、スーツ姿から少なくとも副担任よりは大人に見える。

図的には泣き出した中学生の妹を慰める大学生の兄と言った方が当てはまる感じだ。ある程度落ち着いた所で担任の彼女が教壇に立ち、挨拶をする。

「諸君、私が織斑千冬だ。君達新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言う事はよく聴き、良く理解しろ。出来ないものには出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五才を十六才までに鍛えぬくことだ。逆らってもいいが、私の言う事は聞け。いいな。」

女帝と呼ぶにふさわしい台詞を堂々と告げる担任。それに返ってきたのは困惑による沈黙ではなく、さらなる声援（ラブコール）だった。アイドルのコンサート会場に来たかのような錯覚を覚えるほど熱気のこもった「お姉さまコール」を当てられた当の本人はかなりうっとうしそうにしているようで若干頬が引きつっている。

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。とにかく黙れ。授業を始める前に五代の紹介が出来なくなるからな」

「ありがとうございます。織斑先生」

「早くしろ。授業に支障が出る」

そう言って出席簿で頭を叩かれる青年。聞こえる音から間違いなく痛いじゃすまないレベルだ。はっきり言って理不尽としか言いようが無い攻撃だがお姉さまフィルターがかかった生徒達にはフレンドリーに接している様子を見て非常に羨ましそうに見ている。

まいったなあと言って、頭をかきながら教壇に立った青年は口を開いた。

「えー先の入学式でしましたが改めて自己紹介を。本日からこの学園の特殊戦闘訓練の講師をすることになった『Ｒｉｄｅｒ』の五代雄介です。よろしくお願いします」

『ＩＳ』と肩を並べる『Ｒｉｄｅｒ』と呼ばれるパワードスーツ。正式名称を『ＲｉｄｅｒＳｅｒｉｅｓ』と言う。ＩＳが現れた当初、女性しか使えないということから女尊男卑という風潮があった。そうなる程ＩＳという兵器は強かった。その世論を覆したのが『Ｒｉｄｅｒ』と呼ばれるパワードスーツである。世界最強と呼ばれた白騎士と試合とはいえ引き分けた。

そして『Ｒｉｄｅｒ』は男でも乗れる。あっという間に軍事関係者中心に男性の支持を受け、いまやＩＳ以上のシェアを誇っている。

「知っている人もいると思いますが先の協定により日本にも『Ｒｉｄｅｒ』を配置、養成することが決定しました。その第一号として呼ばれたのが五代さんです。今度作られる養成機関はＩＳとの合同訓練も視野に入れてあるためそのテストとしてここに彼は特別に研修生として滞在。学園でＩＳについての知識の習得兼特殊戦闘訓練の講師として三年間在籍することになりました」

補足をするのは泣き止んだ副担任。

今まで『Ｒｉｄｅｒ』は日本人が開発したにも関わらず日本には一機も所属していない。理由は大きく分けて２つ。まず、日本のＩＳ技術の独占。開発者の束博士しか造れないコアが原因である。

それによりこの二つの技術独占は危険であると国連から圧力をかけられたのだ。そのため開発者は国連直属の技術者として自由国籍権を現在所持している。

二つ目は開発者自身がアメリカに亡命していたからである。ＩＳ開発者の知人であり世界最強の唯一の肉親ということで身の安全を護るために亡命したと公的な場で本人は告げているが事実かどうかは不明だ。

「じゃあ、五代さんの持つＲｉｄｅｒが織斑博士の最新型ってことですか？」

「おー、よく知ってるね。うん、ＤＥＣＡＤＥって奴でね。試作品なんだけど」

協定の一つに日本に配置するＲｉｄｅｒは他とは違うモノを用意すること、つまり新型を出せという内容があったのだ。これは他国より遅れている日本が少しでも追いつくためだろう。よって新たな量

産型Ｒｉｄｅｒの提供と専用機の配置。その専用機こそが彼の持つＲｉｄｅｒ『ＤＥＣＡＤＥ』。

「盛り上がってるところ悪いがＳＨＲは終わりだ。諸君らにはこれからＩＳの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませろ。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ。私の言葉には返事をしろ」

女生徒と話をしていた五代の会話ををぶった切り学生にとって極悪非道な宣言をする担任。だが、誰も逆らえない。ここにいるアレは人でありながら人を超える化物。公式戦無敗の第一世代ＩＳ操縦者の元日本代表なのだから。

そうして授業が始まる中、一人の少女の強い眼差しが五代に向けられていた。初恋の人間に再会したような懐かしむ想いと激しい怒りを乗せて。

実力

一時限目のＩＳ基礎理論授業を五代雄介も窓際の最後尾の席で聞いていた。彼は講師として招かれたがあくまでもＲｉｄｅｒでありＩＳは専門外である。

ＩＳの知識に乏しいであろう彼にはこの三年は生徒と共に過ごし基本的知識を吸収した後晴れて正式な講師となるというのが表の理由だが予備知識も充分持っているのでどちらかというと彼が授業を受けているのは日本というお国柄が原因だろう。今年入学した生徒達と同じ歳の人間を教卓に就けるわけにはいかない、せめて１８を超えてからにするべきだと。

というわけで休み時間。廊下には唯一この学園にいる男を見るために女子が詰めかけていた。見渡す限り女子、女子、女子。おまけに将来期待できそうな美少女揃いだ。残念ながら五代の状況は正に見世物小屋の珍獣と同じである。男子に免疫のない彼女達は喋りかけるのを躊躇っているようだがそれがさらなる人を呼び出しますます言いづらくなるという悪循環を生み出していた。

対する五代が視線を向けても皆すぐ顔を背けてしまい、会話をするタイミングすらもらえないので自然と飽きるまで放置することにしていた。

「……ちょっといいか」

「ん？」

そんな中黒髪ポニーテールの少女が人ごみをかき分けて五代に話しかける。話しかけた目の前の少女に妙な既視感を五代は覚え、記

憶の海を辿るが解らない。仕方なく彼女の次の言葉に耳を傾けることにした。

「ついてこい」

聞き耳を立てる人達が周囲にいるからだろうか。そのままざわめくギャラリーを差し置いて少女は彼の腕を引っ張り、駆ける。周りの少女達は先を越されたとか、告白！？　と様々な言葉が飛び交っていたが気にせず人のいない屋上付近まで連れていく。足をようやく止めたかというと五代に食い入るような視線を向けて尋ねた。

「…一夏だろ？　お前」

その言葉に終始表情を崩さなかった五代の目が見開く。ありえないものをみるような顔だったがすぐに平静になり問いに答える。

「織斑博士の知り合いか？　あの人の知り合いがここにいると思わなかったけど」

「とぼけるなっ！」

初対面の他人のような五代の答えにものすごい剣幕を立てる少女。

「私が幼馴染の顔を忘れると思っているのか・・・？」

そう、これが彼女の理由。篠ノ之箒はあのＩＳ開発者篠ノ之束の妹であり、Ｒｉｄｅｒ開発者織斑一夏の幼馴染である。姉が開発したＩＳのせいで行方不明になった幼馴染。後に彼女自身も家族とバラバラになり各地を転々とした。

ある日、ニュースに流れる彼の名前を見たときは驚きようを彼女は言い表せないであろう。

憎むべき姉が造り上げたＩＳ学園に入学したのも織斑一夏がいる舞台に近づく口実を作るただそれだけのため。
別れたのは本当に幼いころだ。だが、どんなに見た目が変わっても、成長していても一目で入学式の壇上で挨拶をする青年が、目の前の彼が初恋の相手だと少女は直感的に確信したのだ。

「……その顔だと説明は無駄みたいだな。オーケー、わかった。じゃあ、こうしよう。放課後オレの部屋に来てくれ。納得してないならそこでじっくり話そう」
「待て、まだ話は」

終わっていない、という言葉は二時限目の開始を告げるチャイムに遮られた。近くで聞き耳を必死でしていた女子達も蜘蛛の子を散らすように教室へ戻っていく。もっとも、距離からして篠ノ之箒の怒鳴り声しか聞こえておらず会話の内容は全く聞こえていなかったが。

「時間切れだ。はやく戻るぞ」
「くっ、わかってる」

さっさと教室に戻る二人。その際、顔をそらした少女。理由は羞恥心ではなく、煮え切らない感情が沸騰しないように抑えるため。教室に着くと二つの小気味よい音が響き彼女の心が沈静化されたのは余談である。

◇

「――であるからして、ＩＳの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、またＲｉｄｅｒも同様にＩＳの運用規定を基準とした枠内による使用を――」

事前学習が必修であるため恐ろしい速度で授業が進んでいくが誰一人として理解出来ないという生徒はおらず順調に進んでいく。ちなみにここにいる人間は文武両道優れた超エリート集団なので例え予習を疎かにしていても充分着いていける能力がある。

あっという間に2時限目が終了すると最初の休み時間のような集団に囲まれる前に鮮やかな金髪にロールがかった髪をした、いかにも良家の子女といった白人の少女が話しかけてきた。

「ちょっと、よろしくて？」

「どんなご用件でしょうか？」

その高圧的雰囲気はＩＳによって生まれた主義を持つ女性達によく符号した。『女尊男卑』というＲｉｄｅｒの開発による男性の進出がなければ世界の常識になっていたかもしれない考え方。今でこそ男女平等の世の中であるが、ＩＳが一世を風靡した当時はそういういき過ぎた風潮があったのだ。

一度根付いてしまった考えというのは中々払拭されない。人類が永い時をかけて造り上げてきた男女平等のという社会構造はまた振り出しに戻り、男性の立場というのはＲｉｄｅｒが普及した今でも

女性より弱いものになっている。
　その典型的な例が目の前のような男をモノのように扱い見る彼女のような女性だ。
　こういった相手が面倒だと知っていた五代は波風が立ちにくい対応をする。余計なトラブルを作るのは御免だったために彼はこのようなことをよく行うのだ。優越感を与えれば問題は起こさないし、そういう思考を持たない人間でも好印象を与えられてメリットが大きいからである。だからこそ本心を隠す五代の内面を知る人間は少ない。

「まあ、及第点ですわね。わたくしに話しかけられるだけで光栄なのですから。以後も敬意をもって接しなさい、執事（バトラー）」
「…それでどういう用なのかな？」
　彼女は前者（めんどうなあいて）に当てはまる存在だと早々に判断し、早く用件を聞いて会話を打ち切ろうと考えた五代は怒らせないように注意しながら催促をした。

「知っていると思いますがわたくしはイギリスの代表候補生セシリア・オルコットですわ。この学園の入試では当然の結果ですが主席をとりましたの」
「ああ、ブルー・ティアーズの操縦者か。確かＢＴ兵器のデータサンプリングするための試作機だよね」
「よ、よく知ってますわね」
「一応この学校にいる代表候補生と国家代表の情報は一通り叩き込んでいてね。君達が持つＩＳのような補助は無いからな。戦闘能力以外は基本的に劣るから大変なんだよ」
　セシリア・オルコットは目の前の人物はここで学習をするほどＩＳに関する知識の乏しい人間だと勘違いをしていた。そう思い無知

な子羊に自分という道標を印象づけようしたのだが逆に彼のスペックの高さを披露させるという結果になり見事に計画は破綻した。逆恨みにしかならないが恥をかかされたと思った彼女は余計な一言を言ってしまう。

「戦闘能力以外？　それが一番劣るのがＲｉｄｅｒでしょう？　所詮は専用機に敵わないＩＳの劣化版ですわ！」

確かに公式試合で唯一あの最強と引き分けはしたもののその後発表された機体の初期状態では精々量産型と引き分ける程度のレベルなのは事実である。

それでも支持されるのはＩＳと違い数に限りが無く男性も扱えるという点が評価されたことと一般に知られてはいないあるシステムにより専用機とも戦闘可能であることを証明されたことが原因であるのだがセシリアはあいにく後者については知らなかった。

「なるほどね。じゃあその価値観を変えてやるよ」

「ふっ、量産型にすら敵わないっていう価値観に、ですか？　精々頑張ってください。」

五代の発言を鼻で一笑して小莫迦にすると気を良くしたのかそのまま席に着いた。

３時限目が始まり担任である千冬が教壇に立っているのに五代の目に映る。

「授業を始めたいところだが、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める」

よく見ると傍に立つ副担任もかなりのノートや資料を持っていることからかなりこの代表者の選出が重要なのかが分かる。そのまま

担任の彼女の口から続けて説明された。

「クラス代表者とはそのままの意味だが、対抗戦や会議や委員会に参加するクラスの長だ。クラス対抗戦は入学時の各クラスの実力推移を測るものとなっている。競争による向上心を生み切磋琢磨するのが目的だ。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

この発言から波紋のように生徒達のざわめきが伝わっていく。数人の少女が五代に顔を向けるといなやいきなり手を上げた。五代はいやな予感しかしなかったがそれは現実となり襲い掛かる。

「はいっ。　五代さんを推薦します」

「私もそれがいいと思います」

一人が言うと次々と推薦の声が上がる。期待と好奇の眼差しで包囲され絶体絶命と思われた五代だったがおもわぬ援護射撃が彼を助けた。

「却下だ。五代は講師であり研修のために授業を受けているが生徒ではない。そもそもＩＳに乗ってすらいないんだ。当たり前だろう」

反論しようとする女生徒が数人いたが千冬の正論の前に口をつぐむ。

ここはＩＳ学園。それなのにＩＳ操縦者でない人間が代表など滑稽でしかない。それを分かったからこそ誰も反論できないのだ。

「……他にはいないか？　自薦他薦は問わないぞ？」

「仕方ありませんわね。ここはわたくしが――――」

「織斑先生。提案があるのですがいいでしょうか？」

セシリアの声に被せるように発言したのは五代。邪魔をされて顔を赤くして怒鳴るセシリアだったがあえなく担任による無慈悲な出席簿の一撃をくらいおとなしくなる。

「なんだ、五代。代表になりたかったのか？」
「いえ。そうではなくて」
「だろうな。で？」
「代表の選定を自分に一任してくれないでしょうか？」

冗談を交えた問いを一蹴して、千冬に代表を選抜する権限をくれるよに頼む。

それを聞き、千冬の目が細まる。幾人かは殴りかかるのかと顔をこわばらせるが彼女の口元が笑っているため、五代の提案に少し興味が湧いたようだ。

「このままだと順当にクラス代表は候補生であるセシリア・オルコットさんに決まるでしょう」
「ふふ、当然ですわ」

五代の言葉こそ気に入らなかったが暗にこのクラスでトップの実力者であると言われているので気分を良くするセシリア。

「でもフェアじゃない。そこで、このクラス全員と自分が戦い、その後最も優秀、もしくは大成するであろう人物を判断して代表に選出しようと思います」

その言葉に静まる教室。彼は今、ここにいる中で自分が一番であり比べるまでもない、とみなされても等しい宣言をしたのだ。

「たかがＲｉｄｅｒが１対１でわたくしに勝てると思ってますの！

？　わたくしは第3世代の専用機持ちですわよ！」
「侮らないで下さいお嬢様。わたくしめははこの場にいる全員を一度にエスコートすると言ったのですよ」

うやうやしく礼をする五代。どう見ても馬鹿にしているとしか思えないぐらい丁寧に完璧な礼はとても見事な出来である。それにますます顔を赤くするセシリア。五代という男は本来であればにセシリアのような人間は上辺だけの対応をする。
だが、彼女は地雷を踏んだ。Ｒｉｄｅｒの侮辱。織斑一夏という人間が自身の人生を賭けた結晶を汚したことだけは許せない。ゆえに彼はもっとも彼女が屈辱的な方法で代表を選出することにしたのだ。
この場にいる全員を相手にしても敵ではないと証明することで。

「あっ、あっ、あなたねぇ！　勝てると思ってるんですの！　いいですわ。その自信粉々に打ち砕いてあげますわ！」
「ご、五代さん。それ本気じゃないでしょ？」
「私達ＩＳ使うんだよ？」
「Ｒｉｄｅｒが使えると言っても言いすぎだよ、千冬先生もそう思いますよね？」

セシリアの罵倒からクラス中から憐れみの視線と同情の言葉が送られる五代。ＩＳに乗る彼女達にとって男性は脆弱な生き物という認識でしかない。そう過信したとしても仕方が無い。ＩＳが世界で最も優れた兵器なのは決して間違いではない。
Ｒｉｄｅｒが優れているのはその量産性でそれ以外はＩＳにはるかに劣るというのが一般の認識であるのだから。

「そうだな。認識を改めるべきだ」
「ほら、織斑先生もこう言っていますし、今なら謝るだけで――――」

「お前達がＲｉｄｅｒの認識を、だ。試験は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行うので各自用意をしておくように。次に授業だが、内容を変更して第一アリーナで模擬戦の観戦を行う。全員着いて来い」

そう言い残し、教室を出る千冬。いきなりの事態にきょとんとする生徒達だったが慌てて先導する副担任と共に第一アリーナへ向かった。

第一アリーナに集まる一組の面々。千冬の言葉から五代が模擬戦をするのは間違いないが問題は呼び出した本人がこの第一アリーナにいないことである。しばらくその場にいると反対側のアリーナから待ち人は登場した。ＩＳ用の武器である近接ブレードを二つ持って。

「五代！　下に降りろ」

そう言われ観客席から飛び降りる五代に歓声が上がるがそれはすぐに悲鳴に変わる。千冬が持っていた内の一つを彼に投げたのだ。

生身でその武器を持ち、正確に五代へ投擲した彼女の技量に驚くべきなのだが今はそれどころではない。当たる、と観客席の生徒達は思い目を背けるがその予想は外れる。

「危ないですよ。織斑先生」

「お前なら問題ない」

「買いかぶりすぎですって」

なんてことも無いように声が聞こえる。再び五代を少女達は見るが彼は普通に近接ブレードを持ち会話をしている。

繰り返し述べるが彼らが手に持っている武器はＩＳ用に作られたもので人が扱うには過ぎたものである。それを持ち平然としてる二

人が異常なのだ。非常識な光景に言葉を失うがこれはまだ前座にしか過ぎないことを思い知ることになる。

「これより模擬戦を始める。生身での試合だが諸君らにはこの程度の試合でも充分勉強になるだろう。いつまでも固定概念に囚われず世界の広さをお前達は知るべきだ。では、行くぞ五代」

「いつでもどうぞ」

そこからは凄まじいの一言に尽きる。まず千冬が仕掛け、大剣を持って動いている人間のスピードとは思えない程速く洗練された動きで斬りかかった。ＩＳに乗っていても負けてしまうかもしれないと感じさせるに値する一撃。

なんなくそれは五代に防がれてしまうが猛攻は終わらない。容赦なく剣戟の嵐が五代に降りかかる。

剣戟に耐えるばかりで客観的に見るならば押されている五代。が、どちらかというと彼の場合は慣れない武器で戦ってぎこちないというのが正しい。剣での戦いは不利になると判断した五代は近接ブレードを迷いなく嵐の中心に投擲。すぐ弾かれるもののそこからできた死角にまぎれ、両手を地面につけて遠心力を利用した強烈な蹴りを放ち、最強を吹きとばす。

だが、彼女も負けてはいない。同時に剣を足元へとっさに刺すとそれを軸にしたカウンターを一撃お見舞いしていた。その両者の攻撃の威力は常人なら気絶してしまうほどのものであるがすぐに立ち上がり、先手を打つための行動を開始する。

最初の攻防から十数分。生身の戦闘だとは思えない程会場は傷付けられていた。それこそＩＳが争った後のように。本来ならありえない現象、事態なのだが超人じみた二人がそれを可能にした。

荒い息をするだけで互いに最初に交わした短い会話以降、終始無言

だった二人にようやく会話が再開される。

「いやはや、さすがブリュンヒルデ。世界最強は伊達じゃない。是非ＩＳに搭乗した最強と戦いたいね」

「そちらも戦闘訓練講師に選ばれただけである。生身とはいえここまで追い詰められるとは予想外だ」

「そいつは、どう、もっ！」

賞賛しあう二人。でもそれ以上の言葉がでることはない。わずかに出現した間は仕切りなおしを表す。いわば現状突破のチャンスであり、五代の掌底を皮切りに第２ラウンドの幕が上がる。

床に突き刺さった剣を引き抜く余裕はない。武器はもはや己の身体のみ。殴る。蹴る。そんな単純な攻撃にも様々な戦略が込められていて、下手に隙を見せれば刹那で勝負は決してしまう。まだ闘争は始まったばかり。攻防は苛烈を窮めていった。

目で追うのが精一杯であるスピードで動く両者。攻撃が当たればゆうに数メートルどちらかが飛ぶ。クロスカウンターをすれば壁際まで転がされる二人。本当に生身の人間同士が戦っているのかと疑いたくなるような光景がいつまでも続いた。

人外じみた化物達の模擬戦。これで生身の生物である。床が軋む音がする。空気が震えているのが分かる。実戦を知らない平和な凡人では理解出来ない領域。実戦を知る戦士が踏み込めない空間。才を持つ人間にしか入り込めない世界がそこにあった。

結局、この勝敗はつかなかった。時間切れによる引き分け。２時限も使い戦ったのだがまだ二人は余力が残っており副担任の彼女が泣きながら止めたのだ。驚異的なのは全く怪我をしていない二人である。あれほどの戦闘を繰り広げてほぼ無傷なのだ。生徒の一人がポツリと出したその疑問に千冬が答える。

「馬鹿者。ただの模擬戦で大怪我をする訳にはいかないだろ。」
「うーん。怪我は少し打ち身があるのと口を切ったぐらいかな」
と、総合格闘技のチャンピオンが観戦したら引退勧告しそうな模擬戦をしておいてピンピンとしてる二人の感想を聞いてこいつら人間じゃねえとクラスの心が一つになったのが正しいことであるのは間違いないだろう。

一人の少女は遠い世界へ足を踏み入れた青年に思いを馳せ、一人の少女は自分とは違う次元、世界を見て己が見てきた世界がどれほど矮小であったのかを把握する。
だが、彼女達は理解した。生身の状態であるあの二人ですら今の自分達では勝てる気がしなかった。ならＩＳに、Ｒｉｄｅｒに搭乗した彼らはどれほど強いのだろうか。ＩＳが強いという彼女らの常識は砕かれ、山田先生に泣きつかれ宥めている二人を見ながら畏怖の感情を植えつけられたのだった。

「よく分かっただろ。どれほど優れた武器を持っていたとしても使い手の実力が低ければ全く意味がない。ＩＳによる実戦経験が全くない生徒である諸君らに仮にも戦闘訓練のために呼ばれた彼に勝つのは現時点では不可能だ。まあ、だからこそあれ程大きな口を叩けたのだろうがな」

訓練では、練習では優れていても実戦、つまり本番で同等の成果を果たせるとは限らない。世界を掌握することが可能な兵器であっても所詮人が使うモノ。使い手も優秀であって初めてその真価を発揮するのだ。
以上、解散！と大きく声を上げて午前の授業は終了した。

この授業は千冬がこのままでは本当に酷い試合内容を危惧したた

め急遽行うことにしたのである。力を今まで持たなかった人間に過剰な兵器を持たせると自身を能力以上に過信する。無意識的に学園にいる生徒達もそのような傾向を持つ。強力な装備＝強いという誤った解釈をしてしまい、それが破られると最悪、心が折れてしまう。

つまり、最強である自身が引き分けたという事実を造り彼女らのハードルを下げることにより、万が一完全敗北しても心が折れるのを防ぐという予防線的役割もあったのだ。単純にこれを見せて向上心を上げるという意味合いもあったのだが。

どちらにしろ、最強に拮抗した相手と勝負しなければならないという事実は変わらない。

正体

五代雄介が生身とはいえ、あのブリュンヒルデと拮抗したというニュースは学園中でひっきりなしで話題となる。彼女はＩＳあっての最強だが生身でも充分人の域を越した人外であるのは周知の事実である。突如この学園に現れた男性が最強と同等の高みにいる。おまけに若く、顔もいい。ここにいる生徒達にとっての理想の体現者といっても過言ではない。

ということで彼は珍獣から一気に理想の相手へとランクアップすることになり、好奇の視線は減ったが代わりに熱っぽい視線が多数送られることになった。

ちなみに今現在その視線が送られているのは食堂。食事を食べるための場所である。肝心の五代の周りの席に人はいない。別に恥ずかしいとか近づきづらいという理由で人がいない訳ではない。単純にあの周りでは食事が出来ないのだ。大量に置いてある食べ物が邪魔で。和洋中。あらゆる世界の料理があり、それ以上にデザートの山がある、まさにブラックホール。単純にテーブルに食事が置けない。また、食事制限をしている者にとって目の毒でしかない光景だ。それも大分減り、今はデザートだけ残ってるが積み重なった皿の山がピサの斜塔のようになっている。

「はいは～い、新聞部でーす。話題のＲｉｄｅｒ、五代雄介さんにインタビューに来ましたー」

そんな色んな意味で近づけない五代へ近寄る猛者がいた。

生粋のジャーナリスト魂を持つ彼女の登場に心でガッツポーズを上げる皆。誰も詳しいことを聞けなかったので図太い精神を持つ救世主にガッツポーズを握る生徒が何人かいた。

「あ、私は二年の黛薫子。よろしくね。副部長やってまーす。はいこれ名刺」

その説明の間に食べ終えたのか、すっかり彼の前にあった食べ物は消えていた。あの質量が人間の体内に収まるのだから人類とは不思議である。ただ単に彼がおかしいだけかもしれないが。

名刺を受け取り、どうもと五代が言った後素早くメモ帳を取り出し、右手のペンを弄びながら質問（マシンガントーク）を薫子は開始した。

「では今回は皆気になる簡単なプロフィールから、名前、年齢、職業、趣味、恋人の有無をどうぞ！」

「ああ、そう言えば簡単な説明しかしてなかったような。うーん、名前は五代雄介。歳は今年で１６に」

『えぇえええええええぇえええっ！？』

年齢の部分に皆反応して叫ぶ。確かに若いとは思った。しかし、山田真耶という例外も存在したため気にしなかったがまさか本当に生徒と同じ歳だとは思わなかったのだ。辺りから、同い年なら…！、年下もアリね、という呟きが漏れるが割愛する。

「…続けておーけー？」

「え、ええ」

動揺して口調が丁寧になる薫子であったが五代の言葉で我に返りインタビューを続行する。

「職業はＲｉｄｅｒ兼研究者で趣味は実験、開発かな」
「その歳で研究者かー。まるで束博士みたいだね」

この年齢で研究者というのは日本で有名なのは束くらいしかいないからこそでた例えであろう。

「日本だとそういう解釈になるけど海外ではそんなに珍しくないよ。小学生くらいの年齢で博士号をとるなんてのもあるし」
「成程ねぇ、勉強になるわ。で、最後の質問だけど恋人は？　いるの？」

この質問が最も気になるのは間違いない。海外の研究者である早熟の青年。顔、実力も良い有料物件。
むしろいない方が不自然であり、いなかったらいなかったで熱烈なアプローチが増えるだけである。

「恋人はいないけど、募集はしてないよ」

最後の質問で喜色に満ちていた場が通夜の会場へ早変わりする。意中の相手がいることを仄めかすような発言をされたのだから。
若干一名がそれを聞いて歓喜に満ちてトリップ状態になっているサムライガールがいたのだが誰一人として気付くことは無かった。

「募集していないというのは？」
「んー、今が充実してるからね。そういうことはあまり考えられないんだ。」

目を輝かせて追求する薫子だったがよどみなく返された面白みのない答えに口を尖らせる。代わりに呪詛のように私が彼の生きがいに・・・、自分色に染めてみせるという肉食系女子のお言葉が囁か

れる中、夢から覚めたサムライガールの沈み具合はすごく目立っていた。

「じゃあ次の取材もよろしくね。五代君！」

「分かりました」

肩を叩きながらフレンドリーに接しながら次の取材の予約をする薫子。

何気に五代とこの学園で一番初めに親しくなっていたりするのであった。

「最後に広報用の写真いい？」

「全然、構いませんよ」

そう言って笑顔のサムズアップを何故か要求された五代であったがなんとなく世界の意志的にやった方がいいとという電波的思考をキャッチしたので抵抗なくした。パシャという音と光が連続して起きた。薫子のカメラは連射式のようで撮った後は食堂からまたね、と言って出て行った。

予鈴が鳴り、各自教室に戻って特に何事も起こることなくその日の授業は終わり放課後になった、

その後、海外の研究者、１５歳、恋人がいないという内容が一人歩きして海外からパートナーを探すために同世代の女性がいるＩＳ学園にやってきたという非常に歪曲された噂が流れることになってしまうのだがそれを本人が知るのは少し未来の話。

◇

本来であれば生徒でも教師でもない五代雄介は寮に住めない。しかし海外にいた彼が日本に住居を持っている訳もなく、そういった事情や複雑な思惑が重なりこの学園に住むということになった。男性であるので勿論個室であり、監視、制圧に最も適した部屋となっている。

「ふ、ふむ。ここが一夏の……」

放課後、その五代雄介が住む寮の部屋の前に篠ノ之箒は立っていた。

彼女にとってもはや五代＝一夏という方程式は確定事項である。先の人外同士の模擬戦も恋する少女にとっては強くなって帰ってきた愛しの王子様の晴れ舞台と化すのだから恐ろしい。そうなると今の彼女にとってこの部屋の先はまさに楽園（エデン）。天国（パラダイス）。初恋の彼が住み、待っている場所なのだから。

深呼吸を数回行い、部屋がここであるか最後の確認を終えるとインターホンのボタンを押す。機械的な電子音が鳴り、扉が開くのを胸の鼓動を高めながら待つ。鍵を開ける音がして至福の空間への扉（ゲート）が開く。

出てきたのは上半身裸のバスタオル一枚しか身につけていない想い人。髪を濡らし、服を着ていたら分からない鍛え抜かれた上半身の筋肉美を見せる彼はさながらモデルの被写体のようだ。

「な……っ！？」
「早かったな。もう少し後だと思ってシャワーを先に浴びていたんだけどな」
「この不埒者おおぉおっ！！」

その言葉と目の前の映像で妄想を膨らました乙女は違う方向（ベクトル）への想像をしてしまい顔を赤くする。羞恥心が臨界点を越えた少女の返事は木刀による強烈な斬撃であった。

それは千冬のように安全が保障された一撃ではなく、危険と判断し間一髪で避ける。この状況で気絶させられたり目撃されたら性犯罪者の現行犯としてブタ箱行きになるのは自明の理である。だからこそ避けた後木刀を奪い室内に放り投げた後、箒を掴み、扉の内側へ引き寄せる。少女を無理やり自室へ連れ込み押し倒す男の図が生まれた。これを見た人はこう思うだろう。どう見てもブタ箱行きです、本当にありがとうございます。

「目閉じてろ」

押し倒した状態で五代は箒に囁く。情事を行う前の男女のような妖しい雰囲気が醸し出ている。一方篠ノ之は攻撃が避けられた後押し倒されるという事態に思考がショートしていた。どのくらいかというとこのままされてもいいかもしれないという危ない考えが即決採用される程完全に破壊されている。目を瞑りそうされるのを待つが一向に何かをされる気配はない。

「もういいぞ」

そう言われ目を閉じる箒の視界にはラフな格好の服装をした五代雄介の姿であった。それに落胆するもすぐに自身が先ほど考えてい

たことを思い出して恥ずかしくなり俯く。
五代はそんな箒の様子に特に関心を示すことなく、淡々と話す。
「どうしたんだ。早くこい」
そういわれ居間へ案内される箒。室内は学生が住む部屋に比べると少し広く、備品も質の良いものだと解る。奥にはパソコンを置くためのスペースと等身大の大きさの鏡が置いてあるのが目立つ。また、来て日が浅いことからダンボールに詰められた荷物がまだいくつか置いてあった。
テーブルの脇に敷かれた座布団に座るようにジェスチャーで促され座る箒。そのまま正座すると、キッチンの冷蔵庫から取り出した麦茶を注いだコップを二つ持ち座ると五代から切り出した。
「それじゃあ今朝の続きをしようか？　何を聞きたい？」
そう言って麦茶を箒の方に手渡す。
「何故、五代雄介と名乗っている？」
「はあ、無駄みたいだから言うけど確かにオレは君の幼馴染、織斑一夏さ。だが同時にＲｉｄｅｒ五代雄介であることも事実だ」
あっさりと自分が一夏であると白状する五代。今朝の雰囲気から完全否定すると思った箒は肩透かしをくらった。それよりも今は彼の言葉の真意を知ることが先決である。
「織斑一夏が世界的規模で重要人物と化しているのは分かるよな？」
それは箒も調べたため知っている。確かにＩＳに比べればＲｉｄｅｒの開示情報量は多いものの、開発者本人しか知らない仕組みも

かなり多く、彼がいなければＲｉｄｅｒＳｅｒｉｅｓというシステムは成り立たないというのが現状である。彼がいなくなればＲｉｄｅｒは使えなくなる。確かに重要な存在と言える。

「便宜上、織斑一夏をこの学園に置くことは出来ない。だが、日本はそうするしかなかった」

Ｒｉｄｅｒ開発者である一夏を各国のＩＳ試作機、最新機が集まる実験場であるこの学園に置くのは言語道断。しかし、現実として一夏は五代雄介としてＩＳ学園にいる。

「どういうことだ？」

「条件を出したのさ」

その問いが来るのが分かっていたかのように答える五代。

「日本には先進国でありながら、開発者が日本人でありながらＲｉｄｅｒが配置されていないだろ？　それは束博士がＩＳのコアを造り出す技術を独占しているからだ。よってＲｉｄｅｒという世界的シェアを誇るパワードスーツの提供を国連から拒否された技術大国日本は世界から完全に置いていかれてしまった。そんな状況でオレをＩＳ学園に入れさせれば新型Ｒｉｄｅｒの配置、及びその養成機関建設を承諾するなんて言われたのなら当然国としては要求を呑むという選択しかない。・・・・・・まあ、それ以外にも理由があるんだが今は関係ないな」

「！！」

それなら辻褄が合う、突然のＲｉｄｅｒの赴任。それと同時進行される日本でのＲｉｄｅｒ養成機関の配置。

この突然の事例は日本が無理を通したから起きたのではなく、世

界という後ろ盾を得た一人の我侭により実現したということだ。

「国連側にはＩＳ兵器の技術を参考に新たなＲｉｄｅｒの基礎理論を模索するってことにしてあるからな。そうすればほら、ＩＳ、Ｒｉｄｅｒの上層部関係者はほとんど知ってる公然の秘密、ＩＳ学園特殊訓練講師のＲｉｄｅｒ五代雄介の完成って訳だ」

「何故そこまでここに来ることに拘ったんだ、お前は」

彼が五代雄介という偽名を使い現れた経緯については各国の事情が原因であるということでその謎は紐解けた。しかし、疑問点は残る。そこまでしてこの学園、いやＩＳに執着する理由が分からない。

そもそもＲｉｄｅｒが発表される以前の彼の足取りも不明だ。あの公式戦の後も名前だけが飛び交い徹底して身元が秘匿されていたというのに簡単に偽名を使ったとはいえ公衆の面前に現れたのだ。全く持って理解出来ないというのが箒の心情だった。

「・・・・・・人形劇の役者じゃなくて自分の意志で動いて物語を変えるため、かな？　アドリブで引っ掻き回して脚本家を困らせたい。ただそれだけだよ」

難解な言い回しをして内容は暈しているがそれが織斑一夏の目的なのだろう。きっとこれは当事者達しか分からない答え。考えた所で真実が浮かび上がることがないだろうと箒は思考を打ち切る。

ただ一つ、わかったのは織斑一夏は変わってしまったという事実。時は人を変える。でも、幼い頃に出会った織斑一夏と目の前の人物はもはや同じ肉体を持った別人。それでも彼女は織斑一夏への想いが薄れることはない。別人へ変わったぐらいで彼が好きという感情が消える程度の愛ではないのだから。

「最後の質問、いいか？」

「本当に聞かなくてもいいのか？　もう質問は受け付けないぞ」

本当は沢山聞きたいのが箒の本音。

いなくなってから一夏がどう過ごしたか知りたかった。

なぜ姉が作ったＩＳに対抗するように軍事用パワードスーツを造ろうと思ったのか知りたかった。

あそこまで強くなった訳を知りたかった。

彼を変えた切欠を知りたかった。

積もりに積もった想いを全部ぶちまけたかった。

今すぐ目の前の彼の唇を塞いで告白をしたかった。

一つ出浮かべれば止まらないほど出てくる。でも、出来ない。

彼とは絶望的に心が離れているから。このやり取りで箒は気付く。機械的に対応する五代の冷たさを。再会した幼馴染を他人のように接している事実を。自分が知りえない闇の存在に。近いけど遠い、そんな表現がピッタリ当てはまった。

言えば全部話してくれるだろう。この場で言えば恋人にしてくれるかもしれない。でもそれだけ。篠ノ之箒のそれは一方通行で返ってくることはない。心が分からない。姉とは違う形で彼の心が箒には解らない。だから彼が心を開いてくれるまでは聞かないし、伝えない。

「ああ、それはお前が話せる時が来たら話してくれ」

「じゃあ、何を最後に聞きたいんだ？」

これは確認。篠ノ之箒の心の中にいる彼が残っているか。それだけを知るための無価値な質問。

「お前の夢はなんだ？」

五代雄介は突然方向性が変わった質問が持つ真意を汲み取れなかった。それでも彼は答える。彼が誓い、己という人間性を確立させた根幹であるアイデンティティ。世界に唾をかけられたとして追いかけ続ける夢。答えないという選択肢はなかった。

――――――オレの夢(んーゆめ)か。平和な世界を護る無敵(だれもかなしまないせかいをつくるヒーロー)の存在を造ることかな(だ)。

それは篠ノ之箒が持つ過去の光景(おもいで)の中にいる織斑一夏と重なり、全く同じであった。篠ノ之箒は安堵する。この純粋で尊い願いを語る一夏だけは今も五代雄介の中に、想い人の姿は息づいている。だからこそ目の前の人物は打倒しなければならない。借り物の仮面を外し志顔をさらけ出して見せよう、そう少女はここに宣誓する。織斑一夏と五代雄介に。

「一週間後を楽しみにしていろ。お前に必ず一撃を加えて見せるぞ、五代雄介」

「そうか、楽しみにしているよ、篠ノ之箒」

その問答を最後に箒は部屋を出た。そして自分の部屋に戻る。彼女の知っている織斑一夏が息づいていることに安堵したこの夜。彼女の頬には水が流れるのが止むことは無かった。ただ彼女の寝息は穏やかでその寝顔の笑みも絶えることは無かった。

◇

篠ノ之箒が宣戦布告ともよべる誓いを立てて部屋を出た後、五代雄介こと織斑一夏は不思議な感覚をもて余していた。気分転換に今日一日を振り返る。

（思えば色んなことがあったな。騒がしい一日だった）

念願のＩＳ学園に彼が在籍した今日。自分がいるクラスの担任が姉というのは半ば予測出来ていた。しかし彼女がいたことは一夏にとって最大の誤算だっただろう。動揺して感情が高ぶって柄にも合わず安い挑発を買って自身より弱いと知っている相手に大人気ない行動をした。いくら侮辱されたとはいえ彼のあの行動はまず有り得ない。

「篠ノ之、箒か」

彼女がその後何をしてどう過ごしていたかは一夏は知らない。天才の妹。遠い昔の幼馴染。彼が思いつくのはこれだけである。それでも彼女が気付いてくれたとき胸が熱くなった。彼は知っている。これが好きという感覚であることを。少なくとも彼女、篠ノ之箒は一夏にとっては初恋だったのであろう。でもそれだけ。過去に人は戻れない。織斑一夏がこの想いを彼女に伝えることは、ない。

（俺に……そんな資格がそもそもあるわけないか）

そんな感傷に浸った自己を現実に呼び戻す。ふと。ダンボールの山のどこかに埋もれている唯一所持している写真、過去の欠片の存在が脳裏を掠める。そこに写るのは織斑一夏と彼を変えた人物達の写真である。もし、彼らと出会わなければ本物の化物に心身ともに堕ちたであろう。

そして彼は思い出す。自分が化物であると自覚する感覚を久しぶりに。

――失くしてはいけない。原初の想いを。

――忘れてはいけない。彼らへの誓いを。

――それが消えれば二度と這い上がれない地の底で畜生に成り下がる。それだけは許されない。

――力は手段に過ぎない。この理不尽な世界を変えるために必要なカード。

――努々間違えるな。お前のその身が化物であることを。

――心だけが唯一自身が人であることを示す証だということを。

「しっかりしろ。織斑一夏。まだお前の夢は見えてすらいないだろ」

自分に向かって語りかける。そうして己を安定させるために声を出す。別に彼の心は健常であり問題はない。だが、取り囲む環境が問題なのだ。正常な精神を持つが故に闇に苛まれる。異常であるからこそ自身を貶める。彼は心身ともに強い。だからこそ怖いのだ。化物である自分が。

この学園での眩しい平和な日常を過ごした一夏は夜、夢を見る。過去の思い出が回想され、未来自らが化物と化し地獄を生みだすIfの悪夢を。常闇の世界に灯る唯一の松明を手に進む青年の安息地はまだ見つからない。

二人の幼馴染は対称的な夜を過ごす。

それは二人が歩んできた道の違いを表すのか。二人を裂く溝の深さを示すのか。

夜空に輝く星は答えることなく朝が来るのを待ち続けるのみ。

せめて、彼の悪夢が現実とならんことを月に祈ろう。

講義

朝。暗い夜の終わりを大きく光輝く太陽が一日の始まりを告げる時間。夢から現実へ呼び戻される瞬間。今日という日に期待を膨らませるる者もいれば憂鬱に目を覚ます者もいる。そして対称的な夜を虚構の世界で過ごした二人も元の世界へ帰ってきた。

織斑一夏の目覚めは夜が明ける前。寝汗がひどく、口の中がとても乾燥していた。若干喉が痛んだが、よく冷えたスポーツドリンクを冷蔵庫から取り出して一気に飲み干す。２?あった液体は体内に吸収され空になったボトルを乱暴に投げ捨てた。

汗で濡れてしまった服を脱ぎ終え、カゴに入れてシャワーを浴びる。冷水は昨夜の悪夢という穢れを落としていくように一夏の中にある胸糞悪い感情を薄れさせていく。

浴室から出て体を拭いた後、黒いトレーニングウェアに着替える。事前に使用許可を得ていた剣道場へ向かう一夏。部屋を出た瞬間、織斑一夏ではなく五代雄介としての一日が始まる。

剣道場に着くと黙想をして明鏡止水の心を保つ。自身のメンテナンス、調整をするために客観的に見つめた仮想の敵をシュミレートするシャドートレーニングを行う。ルールは簡単。敵から一撃を受ける、触れられたら終わり。実戦ではなく日常で襲われた時のための演習。いくら肉体の性能が優れていても、強力な兵器を所持していても不意を討たれ殺されてしまったら意味が無い。

（状況は己と全く同じ思考を持ちながら肉体性能が総合的に勝る相手が出現。敵勢力は未知数。Ｒｉｄｅｒ『ＤＥＣＡＤＥ』使用不可。鏡は周囲になく、他に使用できる武器は無し。思考状態はオー

ルクリーン。状況は最悪。周囲は公衆の面前であるため、アレの発動は持っての他。）

設定が完了すると戦闘開始。正面ではなく、相手の攻撃は背後からの奇襲。生身ですら化物の相手に正面から突っ込むなど試合はともかく実戦で行うのは相当な実力者か愚か者。そしてこれは奇襲であり命を奪い合う殺し合い。手段を選ぶ訳がない。

ナイフ、拳銃、グレネード弾。Ｒｉｄｅｒ、ＩＳ操縦者、●●●●。あらゆる装備をしていることを想定。表れる死角、隙は誘い出すためのフェイク。選択を間違えれば死ぬ。

結果、逃げ延びられたのは八分十七秒。相打ちを狙った捨て身の行動に撃沈する。

タイムとしては上々。全身を使い絶え間なく全力で動いていたため呼吸が乱れるがすぐに落ち着く。自身の調整が済んだため部屋に戻ろうとする一夏だったが突然呼び止められる。声の方向にいるのは五代雄介ではない彼を知っているある人物であった。

◆

「……い…ち……か……っ」

篠ノ之箒は彼の名を呼び目蓋が開いた。空が薄暗いことからまだ夜が明けてから時間が経っていないことが分かる。哀しいような嬉しいようなにかを見ていた気がするが思い出すことは出来ない。

覚醒しきっていない意識を取り戻すのと汗でべたついている体を洗うためにシャワー室へ歩く。布が擦れる音が無くなると生まれたままの状態の彼女の姿が露になった。水を浴び徐々にはっきりしていく意識の中、夢の内容について考察するが、最後に呟いた一言で彼に関する夢を見たのだろうと自己完結する。

夢の中まで一夏について考えていることに気付き途端に恥ずかしさが噴き出てくる。邪念を振り払うためにシャワーを浴びた後、剣道着に着替え道場で火照った心を鎮めに向かう箒であった。

そこに着く直前、窓の間に目を向けると既に室内で動いている人影があった。練習熱心な部員かと箒は思ったが違う。織斑一夏である。逸る気持ちを抑えきれずそのまま入ろうとするが足を止める。先客がもう一人いたのだ。姉の数少ない友人であり、幼馴染の姉である女性、織斑千冬。箒は彼女の姿を見てその場から動かなくなっていた。

◆

「久しぶりの再会だというのにつれないな、一夏。世界に一人しかいない肉親との再会による感動のシーンだぞ？」

やれやれ、といいながら両手を振りながら織斑一夏に話しかける千冬。ＩＳ発展当初から関わっている彼女の耳にも彼の正体について当然伝わっていた。だからこそ、邪魔をされず会話をする場所を用意するのにここを借りたいという五代の申請を承認したのだ。

「織斑先生。そんなモノに涙を流すのはフィクションの中だけですよ。実際、生き別れた姉弟の片割れであるオレの態度を見れば分かるでしょう？」

「全くだ。捻くれた性格に育ったもんだな。姉としては悲しい限りだ」

一夏の態度は箒といた昨日と比べればひどく落ち着いていた。別に感動もしない。彼女は一夏にとって最強という頂に立っていた目標の一つであった。遠くにいても近くにいても変わらない。道を示す松明の光の一つとしてあった存在だから。

「それで何の用ですか？　ここまで回りくどいことをしておいて世間話だけ、という訳じゃないですよね？」

「ああ、その通りだ。」

彼女がこの程度の雑談のために場を設けるような性質（たち）じゃないことは百も承知である。つまり、聞かれては拙い話をするということを五代は察した。

「ここに来た目的はなんだ。五代雄介」

それは幼馴染の少女がした問いと同じモノ。あえて五代雄介という所が彼女らしいと彼は内心苦笑する。

「……大体察しはついているんだろ？　千冬姉」

少し童心に戻り昔のような口調に戻す。彼女はあえて織斑一夏に答えさせようとしている。別に彼自身がなにかを企んでいるわけではない。彼を利用して企んでいる者がいるというだけ。

「……自分を餌に呼び寄せる気なのか？」

「その辺は想像に任せるよ」

飄々として煙に巻く一夏。それを見て千冬は一人の天才とダブらせるが彼と彼女は違うと考えを振り払う。

「これ以上話す気はないようだな。……無茶はするなよ」

「善処しますよ。まだ時間もあることだし一試合しませんか織斑先生？」

「遠慮しとこう。これでも忙しい身なのでな。ここを壊したら部員もかわいそうだろうし」

「あはは。それもそうですね。ではお仕事頑張ってください」

後半、物騒な会話があったが、彼らの良識によって道場の壊滅という剣道部の危機は去った。両者は剣道場を去り、コレを偶然聞いていた少女の姿も無くなっている。まだ、夜が明けてから時は経っていない。一日はまだ、始まったばかり。

学園生活二日目。ただの学生なら二時限で根を上げてグロッキーになる授業が今日もハイスピードで進んでいく。ＩＳ操縦者ではない五代雄介にはより理解するのが難しいのだがあいにく凡庸な頭脳の持ち主ではないため普通に授業へ参加出来ている。教える側であ

る山田副担任が時々言葉に詰まるのを除けばスムーズに授業が進んでいると言えた。ちなみに現在の授業内容はＩＳの基本知識についてである。

「――ＩＳは宇宙での作業を想定して作られてるので、――――特殊なエネルギーバリア――――包み、――生体機能の補助、――――――――――――など――――て――――――」

教科書に書かれた基礎知識の要約を一生懸命読む副担任の様子はどこか微笑ましいと思うのは一夏だけではないだろう。そう思っていた矢先一人のクラスメイトが不安げな面持ちをして手を挙げ質問をしようとする。

「先生、それって大丈夫なんですか？　なんか、体の中をいじられているようでちょっと怖いんですけども……」

ＩＳを乗った者だけが理解出来る独特な一体感。知識としては知っているが搭乗者ではない彼には分からないその感覚は人によっては不安を生み出す恐怖ともなるだろう。

「そんなに難しく考えることはありませんよ。そうですね、例えばみなさんはブラジャーをしていますよね。あれはサポートこそすれ、それで人体に悪影響が出ると言うことはないわけです。もちろん、自分にあったサイズのものを選ばないと、型崩れしてしまいますが――――――」

女子校でその例えは非常に分かりやいだろう。生徒達の身近にあるもので尚且つ共感できる話題（ガールズトーク）である。彼女が犯した間違いは一つ。

この場に男子がいたことを失念していたこと。解説中に五代雄介を見つけ、数秒動きが止まる。呆けた顔の副担任は顔を赤くして恥らう乙女に変わった。

「え、えっと、いや、その、ご、五代君はしていませんよね。分からないですよね。あは、は。あはははは……」

動揺しながらも乾いた笑いで場をうやむやにしようとするがその乾いた笑いが教室中に微妙で気まずい雰囲気を拡散させていた。一夏自体は特に気にしていないのだが女子は強く意識しているようで腕組みをする振りをして胸を隠す者、むしろより胸を強調する者などがいて、箒は前者であるがその行動が返って胸を強調していることになっているのに思い至ることは無かった。

「んんっ！　山田先生、授業の続きを」
「は、はいっ。あ、五代君。Ｒｉｄｅｒの基礎知識についてみなさんに説明して下さい」

女帝の咳払いで換気された微妙な空気は山田副担任が放った一言で外に締め出された。

「分かりました。教卓を少し使わせてもらっていいですか？　織斑先生、山田先生」
「別に構わん」
「どうぞ」

二人の教師の了承を得るとスタスタと教卓へ向かい、クラスメイトと向かい合う一夏。Ｒｉｄｅｒ開発者による講義が開始される。

「ＲｉｄｅｒはＩＳと違いハイパーセンサーといった感覚、情報補助装置がほとんど配備されていない、軍事目的を主に織斑一夏博士が造りあげたパワードスーツとなっています。ＩＳ同様反重力等を用いて空を飛ぶことも出来、宇宙空間、深海という過酷な環境でも可能だけど、総合的性能はＩＳに劣っている兵器というのは皆知ってるよね？」

ＩＳに劣るが間違いなくこのシステムを造り上げた織斑一夏は非才ではなく、篠ノ之束に並ぶ天才だろう。

「これが世界的シェアを誇るのは男性が扱えることと量産が可能であるという点。それにより支持を集めたことで有名ってことだけど実は他にもいくつか理由があるんだ」

そう言うと一夏は右手を前に出してひと指し指を立てる。中指を続けて立てると説明を再開する。

「二つ目は個人識別プログラムと制限段階（リミットフェイズ）。全てのＲｉｄｅｒの情報は管理されておいて、ライダーベルト、機体換装による装着は所持者以外は不可能になっている」

「不可能ってどういうこと？」

一人の生徒が尋ねる。不可能と言っても抜け道はいくらでもあるのが世の常である。そのように断言する彼に違和感を覚えたのだ。

「Ｒｉｄｅｒの機体は全てとある場所に保管されてあり、ライダーベルトはそれを独自に開発されたネットワークを通して電子換装された機体を受信するだけの携帯端末だという公式発表が為されているんだよ。また、装着者に機体が換装される際に何らかの手段を用いて個人識別をして本人確認が完了されて初めて変身出来る。さら

に、ネットワーク、個人識別の詳細は一切不明でどこの国にあるのかすら分からない。ライダーベルトへの細工も国家的規模の研究所でなければ不可能であり、万が一細工をされそうになってもその前に電子レベルまでにまで分解されるように設定になっていて今のところ解析に成功した国はいないそうだよ」

おまけにライダーベルトを調べることが仮に出来てもＲｉｄｅｒＳｅｒｉｅｓが持つ秘密の氷山の一角に過ぎず、真実には辿り着けないという徹底した情報秘匿である。まだＩＳに対してしか知らない彼女達は開発者の悪用を防ぐための姿勢、執念に驚いた。

しかし、ここまでしなければいけない理由も存在するのだ。

世界の何処かにいる天才にシステムを解明される訳にはいかない理由が。

「そして個人識別という点を利用したのが制限段階（リミットフェイズ）。まあＩＳで例えるなら自己進化に似ているかな。装着者が一定の力量に達するとその人物の戦い方（スタイル）に合わせた真の意味でのＲｉｄｅｒになれる」

真の意味でのＲｉｄｅｒ。この言葉の真意はすぐに明かされる。

「現在発表されている機体はＧ３システム等の一部のシリーズを除き最も装着者がいる『ブランク』と呼ばれる機体はね、実力のある人間を選別するためだけのいわばポンコツなんだ」

『！？』

その言葉に驚く生徒達。ここから先の話は軍事関係者やＲｉｄｅｒ操縦者しか知りえない情報である。まあ、遅かれ早かれこの学園に在籍する生徒は知ることになるので一夏は話せているのだ。

「高い実力を持ち、完全に不完全な機体を使いこなすという基準を

満たした装着者に初めてその真価を発揮出来る機体が渡されるという仕組みになっているんだよ。誰でも扱えるといっても全員がその高みへ辿り着ける訳じゃないってこと。実際その戦闘力はＩＳ専用機にも劣らない。実例で上げればあの有名な第二回の決勝戦が証明になるかな」

彼が言っているのは既にＩＳを超える兵器を織斑一夏が開発していて、多数所持しているという解釈と同義だ。

例に挙げた世界が初めて認識したＲｉｄｅｒ、黒いパワードスーツは他のものとは一線を画す別物であるのだが、それは世界では指で数える程度しかいない事実なので特にそれについては言及しない。

「最も開発者の厳しい選定で選ばれたのはそんなに多くいないし、それらは第３世代相手では少々荷が重いっていうのが現状だけどね」

そんな言葉を一夏が告げると授業終了のチャイムが学校に鳴り響いた。次の授業内容を副担任が告げると職員室へ行くために教室を出る。休み時間になりＲｉｄｅｒについて聞くという名目で五代に近づこうとする女子の人だかりが出来る中、セシリア・オルコットと篠ノ之箒の顔は優れなかった。

「ねえねえ。五代君さあ！」

「はいはーい、質問しつもーん」

「今日のお昼ヒマ？　放課後ヒマ？　夜ヒマ？」

切欠さえ出来てしまえば彼女達に遠慮や躊躇いはなく、半数以上のクラスメイトは少しでも仲良くなるために接触を図る。レッドカーペットでスターを待つファン…いやタイムセールスで残り一品となった特売品を取り合うような女のプライドを賭けた泥試合が繰り

広がれている。

「いや、一度に訊かれても…」

そんな風に戸惑っていると、遠くから殺気を二つ送られていることに一夏は気付く。セシリア・オルコットと篠ノ之箒の二人だ。

セシリアの方は最初に馬鹿にしただけであれ以降これといって音沙汰がない。ときおり、視線が合っても目を逸らすばかりで一夏は入学初日で気が立っていただけなのかもしれないなと候補生という重圧を持つ少女にちょっぴり同情したのだが、顔を背ける理由が全く見当違いの憶測であるのを指摘出来る者は残念ながらいない。

自分が好意を持つ男性に沢山の女子が群がっている。それが彼女達の殺気の理由。結局、騒々しくなるだけで碌な質問が出来ないまま担任が登場してお開きとなった。

「ところで篠ノ之、お前に今週中に開発者直々に専用機が贈られるそうになった」

「な！？」

「せ、専用機！？　一年の、しかもこの時期に！？」

「おまけに開発者直々って……」

「ああ～。いいなぁー。私も早く専用機欲しいなぁ」

気まぐれな現在絶賛行方不明中から突如きた天才の贈物。この時期に送るならなぜ初めから彼女に渡さなかったのだろうかというしこりが五代に残る。

（単純な贈物だけが目的じゃないだろうな）

「あの、先生。篠ノ之さんってもしかして篠ノ之博士の関係者なのでしょうか・・・・・・？」

「そうだ。篠ノ之はあいつの妹だ」

おずおずと質問する女子。篠ノ之という苗字で直接専用機をプレゼントされたのだ。簡単に解けるパズルだ。むしろこれで無関係というほうが不自然だろう。

「えええええーっ！　す、すごい！　このクラス凄い人が三人もいる！」

「ねえねえっ、篠ノ之博士ってどんな人！？　やっぱり天才なの！？」

「篠ノ之さんも天才だったりする！？　今度ＩＳの操縦教えてよっ」

授業中であるのだが初日五代雄介が嫌という程浴びた好奇の視線と言葉が箒に集中している。だけど、織斑一夏は不快になる。周りからそういったものを向けられるのは時に苦痛になる。かつて悪意の矛先になった一夏だからこそ咄嗟に声に出したのかもしれない。

「その辺にしときなよ。篠ノ之さんが困ってるだろ」

箒が声を張り上げる直前にそんな一夏の声が届く。盛り上げに水を差す行為だったが、彼が五代雄介であったがために少し不満そうではあったが大人しく席に着いていく面々。

「恐らく五代の試験が始まる日までには届くだろうからそれまでは訓練機を代用しておけ。さて授業を始めるぞ。山田先生、号令」

「はいっ！」

特に何も起きず教科書が開く音から普通に授業は始まり、特に何も起きず授業は進んでいった。

「それで、どうする？」

休み時間、篠ノ之箒は織斑千冬に呼び出されていた。理由は簡単。専用機について今後の方針である。

「私はいり」

「専用機を受け取らないという選択肢はない」

断ろうとする箒であったがそれはバッサリ塞がれる。

「いいか。どんな理由でもお前は専用機持ちになった。それはもう覆らない。これからどうするかを決めるんだ。勘違いするんじゃない」

千冬の言葉は強く、絶対の意志が宿っている。箒は遠い先へ、姉や目の前の女性と同じ場所に走り去った彼を追いかけるためにここに来た。折角のチャンスを棒に振るわけにはいかないと自分自身を叱咤する。

「お前の適正値はC。他の専用機持ちに比べれば格段に劣る弱者だ。ならば少しでもISによる戦闘経験を積む必要がある」

辛烈な言葉を述べられ思わず奥歯をかみ締める箒だったが各国のエリートである専用機持ちに比べれば事実その通りだから仕方がない。だからこそ、彼女の言葉に耳を傾ける。

自分が彼に追いつくために最強からの叱咤（じょげん）に。

「私か五代好きな方を選べ」

「……は？」

その言葉に目が点となる箒。

「戦闘訓練の相手だ。五代はほぼ生徒と変わらんからな。はっきり言ってお前の相手をする時間は作れるだろう。私は原因の一つだからな。どうしてもというなら受けてやってもいい」

破格の申し出であった。ブリュンヒルデの個人授業とそれと渡り合った相手のどちらかの個人授業を受けられる。彼女が選ぶべきは千冬だろう。ＩＳが生まれ、それに乗ってきた姉の親友。でも、彼女の答えは決まっていた。

「ごめんなさい。織斑先生。私は……一夏に訓練の相手を頼みます」

「……そうか、知っていたか。まあ、当然か。あの捻くれ者め」

その言葉を聞くと千冬はどこか楽しそうに愚痴をこぼす。そう言って手を振りながら千冬は去っていった。

変身

あっという間に時は過ぎて放課後。五代との戦いの舞台となる第三アリーナに個別訓練をするためにその中心で彼と相対していた。この訓練を嗅ぎ付けてきた生徒達がちらほら見学しにきていており公開授業のようになっていた。生身である一夏に対して彼女はＩＳに搭乗しており、その機体の名前は打鉄。日本製の第２世代型の訓練機であり、黒光りする鎧を彷彿させる姿はよく彼女に映えている。

「それじゃあ、始めようか」

そう言って一夏は左手に持ったバックルを腰に当てる。するとその両脇からベルトが出現。そのまま装着されると右手でホルダーからカードを取り出して一言。

「変身」

≪ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ・ＢＬＡＮＫ！≫

挿入口にカードが勢い良く装填。合成音声がバックルから流れそのまま半回転すると呼び出されるＲｉｄｅｒの名が高らかに叫ばれる。複数のエンブレムと人の形をした残像が収束する中心にＲｉｄｅｒが現れる。黒と銀の装甲を上半身、肱、膝に纏った藍色を基調とした戦士。右手にはバイザーが嵌められていて赤い複眼は鉄の仮面で覆われている。名を『ブランク』。

世界にいるＲｉｄｅｒが変身する機体の中で最も多い姿。戦闘力も機能もＩＳには届かない機体。

男達の希望になった機体。

「試験まではオレの機体を見せるわけにはいかないからね。これで我慢してくれ。ただ、どうしても見たいというなら――――」

――――――――俺を実力で追い詰めろ。

「いくぞ！　五代！　その余裕崩してやろう」

「来い、篠ノ之！」

そうして二人の戦闘訓練が幕を上げる。

「……どういうことだ」

「いや、どういうことって言われても……ねえ？」

エネルギー残量も気力も尽き果てた箒と訓練前と全く変わらない様子の一夏がいた。一撃も攻撃を彼女は当てることは出来ず、あまつさえ攻撃もされることなかった彼女は激昂した。感情に振り回され、ＩＳの稼動にほとんどのエネルギーを使い、自爆によるエネルギー切れで負けるというなんともお粗末な結果だが、今はただアリーナで力なく座るだけ。

「率直にいえば駄目駄目。赤点だよ。篠ノ之」

「ぐ、具体的に言え！」

「んー？　じゃあ言うぞ？　確かにこのＩＳは近接戦に適してると思うよ。正面からの馬鹿正直な一撃もまあ剣道をしている点からそれも一種の戦い方だと認める。だけど、単調なその場限りの攻めの繰り返し。バレバレのフェイントには簡単に引っかかる。最終的には逆切れして感情のままに動くだけなんだもんさー。格闘センスは昔から武道をしていただけあっていいけど思いもしない動きをする素人の方が善戦したと思うよ」

織斑一夏の評価は酷かったがそう言われるに値する戦いをした箒も充分悪い。多少はＩＳもあるのだからと慢心があったのも原因である。最初嫉妬を抱いていたアリーナの生徒達も五代の辛口にあの場にいなくて良かったという安堵と憐憫の視線を向けている。

「五代君ってさあ」

「案外怖い？」

この戦闘訓練から五代雄介を怒らせたらブリュンヒルデより恐ろしいという噂がまこと密やかに囁かれる。

「国家代表の専用機持ちは化物揃いだからなー。うん。部活が終わってから最低三時間はＩＳを動かそう」

そう簡単に言ってのける織斑一夏の後ろに般若と悪魔の幻覚が箒は見えた。

◇

久々に味わう敗北の苦い味。思えば幼い頃にも織斑一夏には勝てなかったなと自嘲する箒。誰もいない更衣室で一人着替える箒は先ほどの戦闘訓練を振り返る。再開した幼馴染を倒すには最強という

の名の壁を壊すのと同じ。彼は恐ろしく強い。対する己はどうだ、と自問する。

（手も足も出ず、無様な負け方をした……はあ）

過去のことをいつまでも女々しく考えてはいけないとは思うがあそこまで完膚なきまでやられたのだ。へこまないのが可笑しい。でも、そんな強く余裕で佇む織斑一夏は本当に格好良かった。

（ま、まあ。やはり男は強くなければな。か、格好良かったし）

一足先に大人になってしまったような雰囲気を持った一夏。そんな彼を想って惚気る彼女にはもう陰鬱とした気分は吹き飛んでいた。そこからはもう少し優しく教えるべきとか、でも妥協されるのは嫌だとか愚痴のようななにかをぶつぶつ鏡の前で喋っている。仕舞いには鏡に映る自分へ声を荒げる箒。他の誰かが今の彼女を目撃すればさぞかし不気味に見えるだろう。

こうして初日の訓練が終わるが、結局一夏に試験の前日まで一撃を与えることは叶わなかった

彼女に足りないモノ。技術。実戦経験。そしてなにより足らないものがある。それはテクニックでもパワーでも速さでもない。心である、

武道、格闘技に最も必要なのは心技体である。まず丈夫で強靭な『体』を持つこと。次にその肉体を十全に扱うのに必要な『技』を修めること。最後にそれを正しく使うことが出来る『心』であること。どれが欠けても一流にはなれない。その中で最も重要な『心』が未熟なままである篠ノ之では織斑一夏に届くことはない。

◇

そして代表を決める五代雄介による試験当日の月曜。一騎のＲｉｄｅｒ対一クラスのＩＳによる戦争が始まる。

そして放課後、篠ノ之箒は第三アリーナで例の物が届いていないことに憤っていた。束博士からのプレゼント、すなわち専用機である。

（なにがこの日まで届く、だ。一向に来る気配すらないではないかっ！）

「篠ノ之さんしののさんしののさんっ！」

そんな怒鳴り散らしてものれんに腕押ししかならないであろう姉の姿を思い浮かべる箒の元に駆け足で三度名前を呼ぶ副担任、山田副担任がやってきた。最後に「の」を一つ多く付けて転んだ彼女はさすがと言わざるを得ない。

「いったいぃ！　うう、あ、織斑先生！」

「何をしてるのだ。山田先生」

そこに呆れ顔をした織斑千冬が登場。もちろん箒の顔も呆れているのだが。それに気付いた彼女は慌てて自分がきた理由を話し始める。

「そ、そ、それでですねっ！　来ました！　篠ノ之さんの専用ＩＳ！」
「篠ノ之、すぐに準備をしろ。アリーナではお前の登場を待っている。ぶっつけ本番でものにしろ」

――――――え？

「この程度の障害を乗り越えなければアイツは手に入れられないぞ」
そんな言葉に思わず顔を真っ赤にする箒であったが事態は急を要していて、彼女の心情を察する余裕は二人には無かった

「「早く！」」

重なる二人の教師の声にせかされるのと同時にピット搬入口が開く。鈍い音を立てて防御壁は仕掛けを動かし、隠された兵器の姿を晒していく。

――――そこに、いたのは『白』であった。

空白（ブランク）の色。搭乗者が持つ色に染まるような淡い白で、想いが詰め込めるように厚い装甲が現前にある。彼女が乗り込むのを待つかのようにじっと静かに待機していた。

「これが……」
「はい！　篠ノ之さん専用ＩＳ『白式―椿―』です」

歴史は変わる。舞台の役者は差し替えられ、新たな脚本が誕生した。一人の男性を待ち続けた機体は生まれ変わり、少女のための鎧へ。ストーリーテラーは静かに暗躍している。未来は誰にも分からない白い空白で満ちていた。

「体を動かせ。すぐに装着しろ。時間が無いからフォーマットとフィッティングは実戦でやれ。できなければ負けるだけだ。わかったな」

千冬に早口で理不尽な命令を受けてそっと純白のＩＳに触れる。

「あれ……？」

この専用機は訓練機と違うことがすぐに箒は分かった。これが何なのか。何を行うべきなのか。これが自分の一部であるという感覚を解る。

「背中を預けるように、ああそうだ。座る感じでいい。後はシステムが最適化をする」

彼女の言葉通り、箒を待つ目の前にそびえるＩＳ『白式－椿－』へ体を任せる。まるで失った自分を取り戻したような気分を味わうと、すぐに彼女の身体に合わせて装甲が閉じる。機械的に空気を抜く音が終えると、これが本来の姿ではないかという一体感。適合し、融和し、装着が完了していく。

――――彼女は『繋がった』

狭かった視界は広がり、状態はオールクリーン。新たな相棒がアリーナに存在するモノを告げている。

＞戦闘待機状態ＩＳを複数感知。ＩＳネーム『打鉄』。近距離接近型。数、二十。ＩＳネーム『ラファール・リヴァイヴ』数、七。ＩＳネーム『ブルー・ティアーズ』。中距離射撃型。特殊装備有り――。＜

「ＩＳのハイパーセンサーは問題なく動いているな。篠ノ之、気分は悪くないか？」

「問題ありません。……いけます」

「ふっ、あの馬鹿に一撃喰らわせてやれ」

「…はい！」

千冬との問答が済んだ箒はピット・ゲートへ進む。そうして進む中でこのＩＳが膨大な情報量を処理している。現在、最適化を行うための初期化。篠ノ之箒という絵を描くためのまっさらなキャンパスになろうとしているのだ。ゲート開放まであと、三・〇〇八六一九二秒となった。『五代雄介』を打ち倒すために闘技場へ歩む。

「全員これで揃ったな」

『五代雄介』は眼前に立つＩＳの集団を見て悠然と語る。

「それじゃあ、オレが持つ機体『ＤＥＣＡＤＥ』のお披露目だ。……変身」

≪ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ・ＤＥＣＡＤＥ≫

ブランクに変身したときと全く同じ動作でバックルを取り出して腰に当て装着するとカードを装填する。そうしてエンブレムと人型の残像の中心から誰も知らないＲｉｄｅｒが現れた。

「あ…あれは……『Ｒｉｄｅｒ』！？」

誰かの声が漏れるのが聞こえる。

Ｒｉｄｅｒを示すのは三つある。一つは全ＲｉｄｅｒＳｅｒｉｅｓ。二つ目はその装着者。最後に全ての原典である白騎士と引き分けた『黒いパワードスーツ』。

驚くことは仕方ないだろう。一夏が持つＲｉｄｅｒはそれと全く同じ形をしていたのだから。違うのは装甲の色とその模様だけ。白い装甲に金のエンブレムが要所ごとに刻まれている黒くシンプルな面立ちのＲｉｄｅｒと真逆の姿であった。選ばれた人間しか辿り着けない高みに至った存在がそこに、いた。

「そう警戒しなくていいよ。これはあくまでアレの外見を模しただけの全く違うモノさ。こいつはＤＥＣＡＤＥ。オレの現在（いま）の相棒だよ」

単純に一夏の言葉を聞けば彼の前の相棒はブランクだと思うだろう。しかし、彼の正体を知っている者は違う。新しく織斑一夏が造り出した相棒。黒いパワードスーツより脅威に感じるのは至極当然だ。

「一つ、戦う前にいいことを教えてあげるよ」

「……なんだと？」

「……なんですって？」
「そう怒るなよ。ちょっとしたリップサービスをね」
戦の直前に馴れ合う気はないと言わんばかりの怒気を飛ばす箒と余裕の表情である一夏に殺気を飛ばすセシリア。彼は気にした風もなく話を続ける。
「制限段階（リミットフェイズ）を超えたＲｉｄｅｒはそれぞれ特化した機能を有しているんだ。単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）ならぬ固有技能（ワン・スキル）だな。当然このＤＥＣＡＤＥも持っている。君達にこいつの本気を出せるかな？」
この場面で彼が行ったのはさらなる挑発。はっきりいって自殺行為でしかない。この言葉で一組の生徒達から僅かにあった油断、慢心が消える。彼女達がこの一週間何もしていない訳が無く、皆一生懸命特訓をしていたのだ。つまり、状況は一夏が圧倒的不利。
「――ふふ、それなら」
動いたのはセシリア。というより切れて考えるより先に行動したのが一番早かっただけ。箒も一夏と訓練していなければセシリアより早く突っ込んであえなくリタイアしたであろう。
「本気を出す前に倒してさしあげますわ！」
空気を震わせ、耳に不快な音が周囲に響く。六七口径特殊レーザーライフル『スターライトｍｋＩＩＩ』から放たれる一筋の閃光が一夏を撃ち抜く、という未来は外れる。既に照準から場所を移しクラウチング・スタートのような体勢で一夏はセシリアを見据えていた。

≪ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ・ＤＥ・ＤＥ・ＤＥ・ＤＥ　ＣＡＤＥ！≫

五代のライダーベルトから合成音が鳴り響くと同時に１０枚のエンブレムが刻まれた人間大の大きさのカード型エネルギー体が一夏とセシリアの間に道のように現れる。この攻撃の名をディメンションキック。エネルギー体を通過する際に足先に集約させ相手にぶつける一撃必殺の大技である。本来ならこれは切り札であり、初撃にするものではない。なら、一夏が使ったのは何故か？　という答えは彼女が候補生であるから。優秀だからこそ真っ先に潰す。それが彼の選択。

地面を蹴り上げ足先をセシリアに向け斜め上に飛び蹴りを放つ。物理法則を無視した動きだが、一枚、また一枚とカードを通過するたびに確実にスピードを上げていきそのパワーは足先へ集約していく。ハイパーセンサーによる超感覚で回避は不可能と判断。迷わずブルー・ティアーズで迎撃する。そして激突音が鳴り響く。

最初の攻防は無傷の一夏とエネルギーを大幅に減らしたセシリアという結果に終わった。

彼女の行動は正しくもあり失敗でもあった。最初の一撃。これは一夏を倒す最も大きなチャンスであった。全力を出す前に倒す。それは戦術的には正しい。しかし、わざわざ攻撃を放つのを教えてしまえばその攻撃に意味はない。さらに大型兵器使用により生まれた隙は反撃のチャンスを与えてしまった。それでも負傷を覚悟で迎撃によるエネルギー体の破壊でディメンションキックの中断を成功させた彼女は優秀だろう。下手に迷えば間違いなくこの一撃で序盤で沈んでいただろうから。

この段階でセシリアを残しておくのは得策ではないと考えている

一夏は先に彼女から潰そうとさらなる追撃をしようとする。油断してしまえば簡単に足をすくわれるのは戦う者なら常識。

≪ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ・ＳＬＡＳＨ≫

剣を取り出し確実に止めを刺そうとするところで援護が入る。『白式ー椿ー』、箒である。近接ブレードで五代の剣戟を防ぐとすぐに『打鉄』がフォーメーションを組み一夏を取り囲んだ。

「忘れてもらっては困るな。相手はオルコットだけではない！」

「私だって必死で練習したのよ！」

「ふふ～、だいだい。わたしもいるよ～」

箒の言葉に続くように次々と五代に話すクラスメイト達。そう、相手は一人ではないのだ。１対２９の戦争の開戦。

◇

「――――二十七分。意外に残ったな。八機もまだ戦闘可能とはねー」

「くっ…化物めっ……！」

「あれだけ倒しておいてまだ余裕ですの？　信じられませんわ…」

もう三分の一も残っていない。当初、連携をして追い詰められると思ったが所詮は急造のチームワーク。その穴をつかれ。一機、また一機と地に落ちていった。武器も攻撃もいたってシンプル。剣と小型銃を使うか蹴りを放つという三種類だけ。それなのに勝てない。決して追えないスピードではない。性能も専用機に劣る。なのに彼らは勝てない。圧倒された。

「では最後に葬送曲(レクイエム)でもどうですか？　お嬢さん方」

「いいですわよ。ただし貴方の敗北で、ねっ！」

一撃を与えればいい。誰から見ても明らかな決定的な一撃を。そんな想いを抱き、再び始まる少女達の連携(ダンス)。セシリアは一夏と踊る（たたかう）ためのアシストをする。数人と剣を、拳を交える五代。華麗に捌いていく一夏は少女達との空中舞踏会に戯れる。

一人がそんな状況に焦れたのかなんの捻りもない捨て身の特攻(きゅうあい)に挑む。

「甘い！」

そんな攻撃では届かないとばかりに無慈悲な一撃(せんこく)は致命傷。エネルギー残量が切れて舞踏の輪から消えていく一機。彼女が落ちたのと同時に5機がディケイドを全方位取り囲み頭上から襲う。奇襲。これが最後の彼女達の作戦(アプローチ)。そんな愛の囁きは一蹴。切り込み一機を倒して輪から抜けた瞬間気付く。

（箒が……いないっ！）

抜けた先の死角、盲点となった場所に彼女は、白式はいた。

一振り。さながら剣客の居合いの如く。気配を悟らせずに近づく

彼女の一閃に肝を冷やす一夏。間一髪、剣を捨て去ることでその一撃を避けることに成功。そうして、本当に僅かだが安堵してしまう五代。　そこにレーザーとミサイルの雨（シャワー）が降り注いだ。

この仕掛けはＩＳで情報共有している彼女達だからこそ出来た作戦である。今の彼女達にとって出せる全て。この爆発の中心に間違いなく五代はいる。確実に攻撃は当たったはずだ。勝利を彼女達は確信した。　これで終了（チェック）。

≪グオォオオオオォオオオオオオッ≫

瞬間、獣のような咆哮が木霊する。それは絶望の知らせ。晴れた煙の中から現れたのは機械で出来た赤い東洋龍がいた。謎の龍はなにかを護るように包まっている。

「ま…まさか……っ！」

「いやーあせった。マジで危なかったよ。ドラグレッターを爆風から護る壁に出来なきゃオレの負けだったね」

赤い戦士が龍の渦巻く籠の中から現れる。その姿は彼が箒と対戦した時のＲｉｄｅｒ『ブランク』によく似ていた。

「な、なんですのっ！　その姿は！　それにあのドラゴンは一体――」

想定外の事態に動揺を隠し切れないセシリア。そしてそれはこの場で戦う者、観客も同じ。それを分かっているのだろう。一夏は解説する。

「こいつは『龍騎』。ＩＳの補助システムに対抗して造られた自律神経型補助兵器『ＭｉｒｒｏｒＭｏｎｓｔｅｒ』を搭載したＲｉｄ

ｅｒだ」
「その機体の名はディケイドでは無かったのか！？」
「いや、ＤＥＣＡＤＥさ」

その問答は不可解である。彼は龍騎だと言った。しかし同時にＤＥＣＡＤＥであると認めた。言葉足らずな回答は彼女達に無用な混乱を与えた。

「ああ、分かりづらかったな。ＤＥＣＡＤＥの固有技術（ワン・スキル）は要するに織斑一夏が開発したあらゆる機体になれるっていうだけのＲｉｄｅｒ（バグキャラ）だよ。まあ、正直出す気はさらさら無かったんだけど。その辺は予想外だった」

五代雄介の答えは想像を絶していた。あらゆるＲｉｄｅｒになれる。接近戦に特化した機体。射撃に特化した機体。援護に特化した機体。場面、戦況に応じて臨機応変にそれらに変身することで瞬時に対応可能ということ。ある意味白騎士と引き分けたあのＲｉｄｅｒとは違った意味で最強に相応しい機体だ。

「これにて終了。それじゃあ、閉幕（フィナーレ）だ」

一夏の言葉と共に龍から火炎が放たれショックを受けた彼女達を襲う。

結果は敗北。黒煙に包まれた少女達は墜落していった。

◇

黒煙に包まれる少女達を見る千冬。それを見て間に合わなかったのか、と落胆するが晴れていく煙の中に映る白を見て鼻をならした。

「――ふん。あとはお前だけだぞ。篠ノ之」

漂う煙は徐々に拡散され鮮明となる。その中心には純白の機体があった。

真の姿に『変身』して――

◇

＜フォーマットとフィッティングが終了しました。確認ボタンを押してください。＞

（な、なんだ・・・・・・？）

箒の頭にデータが直接浮かぶ。困惑する間もなく「確認」と書かれたボタンがあるウインドウが目の前に出現。なんとなく、それを押す。瞬間、気が遠くなりそうな情報がなだれ込む。そして、変革が起きる。

「なるほど…一次移行（ファースト・シフト）ね。そのタイミングの良さ、まるで主人公（ヒーロー）じゃねえか」

そう。残ったのはもう彼女一人。正真正銘の一騎打ちの場面での一次移行（ファースト・シフト）。神がかったタイミングで彼女は覚醒を成した。用意されたシナリオが既にあったかのように。

新たに形成された装甲はより洗練された形に変化している。この機体は今を持って篠ノ之箒専用の兵器となった。どこか機械的な雰囲気だった鎧は滑らかとなりより人間が身に付けるものらしいデザインと化していた。

唯一の武器で何の能力もないただの剣は名刀へ生まれ変わっている。

―――近接特化ブレード・『雪片弐型』

剣を扱う彼女にとってあおつらえ向きの武器。日本刀のような、太刀のような機械的な剣。それがＩＳ装備であることを物語っている。そしてこの剣の原型を彼女は知っている。最強が振るっていたあの剣。姉のプレゼントの割りに気が利いているなと少し驚く箒。

そして一夏も気付く。あの剣はかつて自分を苦しめたあの武器であると。だから全力を出す。次の激突でこの勝負は決まるだろう。

彼はアリーナにゆっくり着地すると右手のバイザーにカードを差し込む。合成音声がアリーナ中に反響した。

≪ＦＩＮＡＬ　ＶＥＮＴ≫

集中し構える一夏の周りに龍が渦巻く。箒は右手を握りしめ機械音が鳴り続ける『雪片』を持ち構える。

そして動く。

飛翔し目標へ向かい蹴りを放つ五代の後ろからブーストとなる炎を吐くドラグレッダー。

同時に彼へ向かって跳ぶ箒。その刀身は光を帯びていて単一仕様能力が無意識的に発動されている。

「「おおおおおおおおおっ！！！」」

二人は唸り声を出しながら激突。単一仕様能力『零落白夜（れいらくびゃくや）』の効果によって龍騎のエネルギーが全て消滅する。だが、止まらない。いまさらエネルギーが消えた所でその推進力は止まらない。

一夏は倒さなければいけないが箒は違う。明確な一撃を放てばいい。箒は一夏の全ての圧力がかかった雪片を捨てて、相打ち覚悟で全ての意識を左手に持っていく。そこで強い衝撃を腹部に受けて吹き飛んでいき意識は篠ノ之箒の意識はそこで途切れた。

勝敗は決した。勝者は明らか。戦場の中心で立つＲｉｄｅｒが変身を緩やかに解く。

――――試合終了の決着を告げるブザーが鳴る。

『試合終了。全ＩＳ戦闘続行不可能。勝者――――五代雄介』

辺りは静まり、アナウンスの声以外、音が聞こえない。ただ、アリーナを呆然と見つめる観客と少し嬉しそうな表情を見せる千冬が言葉を発さずその場から動かないだけ。

アリーナの中心に立つ勝者、『織斑一夏』の心中ではもう代表者の名は決まっていた。

代表

五代雄介による試験という名の一方的な殲滅戦が終了後、ＩＳ学園にある保健室のベッドの上ではうら若い少女二人が肌をベッドの上で晒していた。

こう描写をされれば世の男性諸君は百合が咲き乱れる桃源郷のように思えるかもしれないが当の本人達は死屍累々としている。

打ち身、擦り傷といった肉体的損傷は勿論、手も足も出ず精神的に落ち込んでいる金髪の少女。自身の無様な幕引きを自己嫌悪して暗黒空間を表出させる黒髪の少女。

両者が共鳴して下手な心霊スポットより恐ろしい異界への入り口が現界していた。

そこへ一人の教師がやってくる。黒く短い髪を靡かせた凛々しい女性は負の感情渦巻く異界へ足を踏み入れた。

「調子はどうだ？　篠ノ之、オルコット」

「大丈夫です、織斑先生」

「大丈夫ですわ、Ｍｓ．オリムラ」

頭を抑えながら素早く返事をする二人。千冬の登場に全く気付かなかった二人は出席簿ではなく拳を脳天に喰らい正気になった。つまり、この問いは二度目である。

「大丈夫そうだな」

彼女が放った一撃が最も重傷であることを言いたかったがそんな

恐れ知らずな行動を千冬（さいきょう）にすることなど出来るはずがなく言葉を飲み込む。

「何故お前達が負けたのか分かるか？　いや、分かるわけがないか。分かっていたら勝者だったのだから」

普通の教師なら激励や慰める所をわざわざ弱っている場所を的確に穿り返す鬼がそこにいた。片方は暗黒空間を再び具現化させ、もう片方は両肩を震わせ涙目になっている。どうみても彼女が悪役にしか見えなかった。

「戦力は上。性能も正直あのＲｉｄｅｒは専用機より優れているとは言えないだろう。五代の戦術眼もそうだが、なによりも戦う前から術中に嵌っていたことが最大の敗因だな」

「言ってる意味が分からないのですが・・・」

自己完結する謎かけのような分かりづらいヒントを出す千冬。セシリアがその回答に難色を示す言葉をそれを聞いてか、それとも元から話すつもりだったのかより理解できるように詳しく話し始めた。

「普通はあの戦力差で勝つことは不可能だ。だが、様々な条件をクリアすることで五代は勝利を？ぎ取ったんだよ」

「ＩＳは万能な兵器ではあるがそれ故に十数人による集団戦のセオリーを操縦者は熟知していない。おまけに狭いアリーナという場所は行動範囲も制限する。五代はそこで大胆にも全員と勝負という無謀を行うことで相手側の行動をさらに縛った。よって接近戦を得意とするＲｉｄｅｒの独壇場になり開始前から不平等な戦場と化し実戦経験もほとんどない温室育ちの羊（せいと）の拙いチームワークの穴をただ突いていくだけで勝手に崩れていくという図式が完成する。実際、

五代を追い詰められたのはラストの奇襲だけだろう？」

それを肯定する意の頷きを返す。終盤、確かに五代を本気にさせるほどに追い詰めた。

「少数になったために五代の仕掛けた術の効力が薄まったのとお前達が実戦の空気を体感し始めたというのが要因だが結果からすれば五代の作戦勝ちだ。今日の教訓を生かして明日から訓練に励め。いいな」

「……わかりました」

「……わかりましたわ」

彼女なりの励ましだったのか、傷口にに塩を塗った後、厳しい言葉を二人に送る。

「何にしても今日はこれでおしまいだ。ゆっくり休め。……それと五代、入るのなら早くしろ。私はもう帰るのでな」

どこか疲れた顔をしている二人を見て労いの言葉をかける。そのまま帰ろうとすると見えない壁の向こうにいる人間へ透視でもしたかのように当たり前に話しかける千冬。呼ばれたと同時に本人が登場したのだから超人を通り越して地球外生命体ではないだろうかという考えが彼女達の脳内で検討されたり、されなかったり。

千冬が保健室を出て行き、入れ替わるようにして五代雄介が入室する。その際に苦笑していたのは自分のせいで怪我をした彼女達の姿を見たことと千冬の超能力じみた第６感にビックリしていたからである。

「調子はどうだ？」

やはり遠くで過ごしていたとはいえ血が繋がった姉弟だからであろう。二人の問いは全く同じ内容だった。そこに嬉しくもあり見えない絆に嫉妬してしまう箒であったがおくびにも表情に出すことなく平気だ、と返事する。セシリアは少し顔を赤くしてえ、ええ…としどろもどろになりながら返す。そうか、と一夏は二人の返事を聞くと喉を鳴らして二人の前に改めて立った。

「本当は明日言うんだが事前に伝えておこうと思ってな。クラス代表を決定した。織斑先生にも山田先生にも既に許可をもらっている」

その言葉に緊張を高める二人。

「おめでとう……代表は篠ノ之箒だ」

「「……っ！」」

天国行きと地獄行きの判定を聞いた両方の反応が目の前の光景に映った。声にならない両者の驚きと嬉しさと悔しさが入り混じっている。

「篠ノ之は気付かなかったのかもしれないけどさ。一騎打ちのとき、オレ一撃喰らったんだよ。」

その言葉に自分の最後の一撃を思い出す箒。がむしゃらに目の前の相手に放った拳。彼女はそれしか覚えていないがその一撃こそ。

「どてっ腹に一撃。まあ、ほとんどダメージは無かったんだけどね。確実に喰らったからオレの負け。勝負に勝って試合で負けたってやつ？　だから篠ノ之。オレに一撃を与えたお前が代表になったって訳」

嬉しさが有頂天で今にも天に召されそうな気分で亜あったが残念ながら次の言葉でその気分は逆転することになってしまう。

「明日から代表の名に恥じぬようにオレと織斑先生のマンツーマンの訓練をするから。この一週間の訓練が児戯に思えるような内容になるが覚悟しておけ」

天国という名前の無間地獄へ落とされた箒。無罪を信じて疑わなかった被告が死刑判決を受けた衝撃と絶望にその顔はよく似ていた。セシリアは訓練内容をよく知っているのでご愁傷様と心で思っていたが彼女にも災厄は降りかかる。

「オルコットは副代表だ。当然、篠ノ之と同じ訓練を受けてもらう。良かったな」

そう肩を叩かれて嬉しいのだが顔色はどんどん悪くなっていく。はっきり言ってあの訓練が児戯に思える訓練など生死を賭けた命がけの闘争か、拷問に等しい内容でしかない。想い人と共にいられる代償としてはあまりにも重すぎた。

「「ハハ……」」

乾いた笑いが重なる。

「安心しろ。毎日生かさず殺さず加減してこの一年みっちり鍛えてやるから」

その言葉を素直に喜べない二人は想い人と結ばれるのを夢見ながら、明日以降一年間続いていく訓練(ごうもん)に耐えられるかどうか、我が身

を案じながら戦々恐々としていた。

◇

「では、一組代表は篠ノ之箒さん、副代表はセシリア・オルコットさんに決定しました！　あと、この二人は放課後五代君と織斑先生との特別戦闘訓練が確定しました。頑張ってください・・・・・・そして死なないで下さい」

翌日、朝のＳＨＲで篠ノ之箒が代表、セシリア・オルコットが副代表になったことを一組の生徒は通告された。ついでに訓練のことも伝えられ、羨望の言葉もあったが副担任の最後のか細い声による願いによって教室中は戦場へ向かう兵士達を祝うような盛大で侘しい拍手が響いていた。その眼差しには生きて帰ってこいという強い意志がどれにも込められており、感極まる二人とクラスメイトによる茶番劇が繰り広がれたが出席簿による鉄槌で終幕したのは誰もが予想できたことであろう。

「訓練で死ぬわけ無いだろう」

という現実味の無い反論にに皆不満タラタラだったが威圧により

全員蛇に睨まれた蛙となりＳＨＲはそこで終わった。
早くも名物と化した織斑千冬（ちょうじん）ｖｓ（じんがい）五代雄介の死闘じみた模擬戦や授業を消化して放課後。第３アリーナにて訓練という名の拷問、地獄を体験しなければならない薄幸の美少女二人がいた。

「あら、ＩＳランクＣの篠ノ之さん。緊張してるのかしら？」
「ふん。そういうお前こそ声が上ずっているのではないか？」

互いを詰るということで現実逃避を図る二人。それでも使者がここへの歩みを止めることはない。不毛な争いでしかない醜いものだ。それがさらに自身の首を絞めることになるというのに。

「お前達のランクなどゴミだ。私からしたらどれも平等にひよっ子だ。どうやら昨日の経験を全く生かせていないようで残念だ。仕方がない。二度と忘れぬように魂に刻み込まれるくらい凄まじい訓練をしよう。今日五代はいないが安心しろ。みっちりきっかり丁寧に私が教えてやる」

その言葉に首をゆっくりと動かす二人。ゴテゴテのブリキ人形のようにギギギッという擬音がしそうなくらい不自然に首を振り向けると素晴らしい言葉の発信者。織斑千冬がそこにいた。

「い、いえ。そこまでしなくても……」
「先生の手を煩わせるわけにはいきませんわ…」
「なに、遠慮するな。生徒というものに迷惑をかけられるのは教師として本懐だ。ちゃんと指導してやる」

二人の懇願空しく背中を引きずられアリーナに引っ張られる二人。数時間後ボロボロになった代表と副代表が発見された。狂ったようになにか意味の解らないうわ言を続ける二人の姿を確認されてそれ

から間もなく第3アリーナは放課後になると誰も近づかない立ち入り禁止エリアとなる。時折、少女の悲鳴と爆発音が聞こえるが我関せずを通す学園の人間達であった。
今日も学園は一部を除いて平和である。

◇

『白式ー椿ー』に関する考察—

第3世代型ではあるがこれにかけられた技術は第4世代に相当する可能性アリ—
白騎士の装備を所持していたことからISのコアは行方不明となっていた白騎士のモノであると推測出来る—
しろきし、しろしき、白式？　言葉遊びなのか、意味がなにかあるのか現時点では不明—
目的、製造理由目下不明—

今後の方針について報告—

亡国機業（ファントム・タスク）となんらかの繋がりがあると思われる束博士との接触は危険と思われる―
近年出現が報告されている無人ＩＳ及び●●●●との関係性があることは間違いない―
意図的な情報操作の確認―
都市伝説として民間に知れ渡っているが一定レベルの情報取得不可―
制限段階（リミット・フェイズ）を超えたＲｉｄｅｒの増強が最優先事項―
盗聴、盗撮、ハッキングの痕跡は無し―
現状、ＩＳ学園にて待機。情報があまりにも少ない―
新しい情報を確認次第、随時報告する―

以上、全要項報告完了―

――織斑一夏による推測及び報告書から抜粋

そこでメールをあるアドレスへ送信してキーボードの叩く音が止む。織斑一夏は放課後自室にて報告書のようなテキストを作成していた。光る液晶をぼうっと見つめた後、天井を仰ぐ。深いため息が漏れた。そのまま床に倒れ、腕を枕にして寝転がる。
圧倒的に今の彼には情報が不足していた。彼の持つもう一つの目的であり義務をを達成するには情報が足りない。その障害に、全ての元凶を破壊するための手段に届かない。倒す方法どころか何処にいてどんな目的を持っているのかも分からないのだから。

日常、幼馴染、別れ、罵声、逃亡、人形劇、元凶、亡命、五代雄介、実験、開発、出会い、再会、亡国機業、ＩＳ、Ｒｉｄｅｒ。単

語と断片的な絵が思い浮かぶ。走馬灯のように人生が脳内で羅列されていく。

――――――この世界の『破壊者』にはまだ届かない。

思考はオールクリーン。一夏の感情は氷のように冷めていく。無機質な瞳は焦点（ピント）の合わないどこかを見つめる。届かない夢を、無謀な夢を見据えて。

織斑一夏の一日はＯＳが閉じる電子音と共に終了した。

◆

『相棒、アイツは今ＩＳ学園にいるんだよな』

「うん。そうだよ」

テレビゲームをしながら会話する二人の男。

しているのはいわゆる格ゲーであり、日本純正の先月発売したばかりの新品。

『チッ、ハーレムだね～。羨ましいぜ』

「そうやって話を逸らしても残念ながら手元は狂わないよ」
『うおっ！？　クッ、機関からの邪魔がまたしても……！』

一人はアジア系であることが分かるがもう一人はＲｉｄｅｒの格好をして判別がつかない。
ただ流暢に日本語を話しているのが分かるだけ。

「フフ、我が機関はイチカを支える秘密結社だ。この程度の妨害工作なんて造作もないのさ」

中二的発言をするＲｉｄｅｒに乗っかる片割れの男。
とても楽しそうに演技をしていてＲｉｄｅｒの方もまんざらでない様子だ。

『ハッ、いいぜ。お前は最高だ。次こそは勝ああああつ！』

第二ラウンドを告げる声が液晶画面からしたと同時にコントローラーを動かす音がまた聞こえ出す。

この二人が今いる場所は研究所。
誰も知らない秘密基地。
ここで開発する男の名は織斑一夏。
Ｒｉｄｅｒという希望の兵器が生まれる場所。

彼等が役者として加わるのは少し、先。

来訪

「ではこれよりＩＳの基本的操縦を復習してもらう。篠ノ之、オルコット。とりあえず見本をしろ」

時は四月下旬となり、学園の生活にも生徒達が慣れたこの頃。ＩＳ訓練の授業を人を超えると書いて超人こと織斑先生により軍事施設のような雰囲気の中真面目に受けている。

「早くしろ。熟練したＩＳ操縦者は一秒とかからないぞ」

そんな圧力をかけて急かす鬼教官の言葉に背筋を寒くした箒は、意識を集中させる。ちなみに箒のＩＳの待機形状は白のガントレットに二本の赤いラインが走ったものである。案外、箒はこのガントレットを思いのほか気に入っている。

（来い、白式―椿―）

心の中で呟き、体勢は剣を持っているかのように構える状態。試行錯誤の末に辿り着いた自身の終着点。イメージするのは戦いと剣。それが彼女の半身であるＩＳを展開するのに必要な過程だ。

右手首から全身を優しく包み込むように薄い膜で覆われていった。約０．６秒の展開時間が経過すると光の粒子にが溢れ、箒の元へ集結しながら白式が形成されていく。

完了。繋がり一つとなった彼女は搭乗者へ変わる。世界がガラリと一変し、体は羽のように軽く感じた。同じくセシリアも装備が完

了して浮かんでいる。

「よし、飛べ」

その言葉から二人の行動は目を見張るものであった。急上昇し、遥か宙(ソラ)の向こうへ飛んでいく。ＩＳの補助が無ければ点にしか見えない距離まで進むと両者はそこで停止する。まるで躾けられた犬のように思えるが彼女と一夏の訓練はトラウマ確定の地獄であることがよく分かるワンシーンであった。

「篠ノ之、オルコット、そこから急下降と完全停止をやれ。目標は地表から十センチだ」

「了解です。では篠ノ之さんお先に」

通信回線からそんな命令文が流れてすぐさま、急下降していくセシリア。特に問題が起きることなく綺麗に成功させた。それを見た箒は負けられないと意気込み第二陣として降りていく。意識を集中し弾丸のように落ちていくのをイメージする。そして隕石のように地面へ墜落していった。土ぼこりが舞い、くすくすという笑い声で彼女の心は死んだ（ハートブレイク）。

「馬鹿者。誰が落ちてこいと言った。グラウンドにクレーターを造ってどうする」

「……すみません」

空から落ちてきた少女(ヒロイン)はゆっくり地面から上昇してその場を離れる。ＩＳのエネルギーシールドのおかげで怪我や損傷はゼロ、土汚れ一つもなかった。

「いやーＩＳも結構大変だな」

空を跳ぶＲｉｄｅｒ『ＤＥＣＡＤＥ』がまるで大地を踏みしめるかのように空を歩きながら箒とその他生徒に話しかける。

「それは飛んでいるんですか？」

「んー？　空を飛ぶんじゃなくて見えない足地へ跳んで歩くって感覚かな？　そもそもＩＳとは全く異なる仕組みで動いているしなー。多少の違いは当たり前だろう」

片手で逆立ちしながら応答する一夏はそのまま上体を起こし半回転すると地面に着地した。

「本当、こういう授業は暇だなー。教えられないし教わることも特にないし」

変身を解いて欠伸をする一夏。ピリピリとしたこの場で誰もいない自室にいるかのように伸び伸びと非常にリラックスしていた。当然、鬼の眼にもそのだらけた態度が入り、目にも止まらぬ制裁の一打が放たれるがヒョイと簡単に避ける。

「おい、士気が下がる。おとなしく見学していろ」

「分かりました～。織斑先生ー」

そう手をひらひらさせてグラウンドの隅に行く。この学園の誰もがすることが出来ない行動を平然とやってのけるその姿に痺れて憧れる女生徒もいたが構わず授業は続けられた。

「さて、次は武装展開だ。篠ノ之それくらいは自由自在に出来るだろう」

「は、はいっ」

「よし。では始めろ」

手を叩き意識をこちらに千冬が戻すと集中していない箒に武装を展開するように促す。指名された方は失態で落ち込み周りが見えなかったのがようやく回復して慌てて返事をする。そして構え、最強の姿を想像して剣を召喚する。

その集中力がゼロから一へ、一から十、限界を超えたとき光が放出され想い（イメージ）は像を成し、現出する。光が力を失った刹那、その手には最強を冠した武装が握られていた。このイメージは彼女にとって易しいものだった。手の中に剣が現れると想像するのではなく、構えてそこに剣があるのだと幻想すればよいのだから。

「一秒弱か。まあまあだな。さらに早く出せるように修練しろ」

ＩＳに乗って日も浅くランクの低い箒にしては上出来だが生憎彼女はそんな思いやりの精神はない。実戦で使えるか、使えないか。この二極論による判断だけ。

「セシリア、武装を展開しろ」

「はい」

左手を真横に向けて突き出すポーズをとる。一瞬強い閃光が迸るとその手には狙撃銃が装着されていた。銃弾を放つための工程は終了しており、あとは引き金を引くだけの状態となっている。

「さすがだな、代表候補生。――ただし、そのポーズは止めろ。横に向かって銃身を展開させて誰を撃つ気だ。」

「で、ですがこれはわたくしのイメージをまとめ――――」

「直せ。いいな」

「……はい」

その後、セシリアは叱咤を受け、初心者用の手段での武装展開をするという代表候補生にとって屈辱的な行為をすることになった。壁を背もたれにして空を眺めている五代は三人の女の殺気を代わる代わる浴びて授業は終わる。

「時間だな。今日の授業はここまでだ。篠ノ之、グラウンドを片付けておけよ」

クレーターを指差して告げると千冬は職員室に帰って行く。途方にくれる箒が一夏がいた方角へ顔を動かすと誰もいなく、生死を共に分かち合う訓練仲間セシリア・オルコットもその間に消えていた。一人寂しく、穴を埋め終えた後にあの訓練があると思うと気分が滅入るのであった。

◇

「ふうん、ここがそうなんだ……」

日が暮れ太陽に代わり月が支配する静寂な夜。ボストンバッグを

持ったツインテールの少女がＩＳ学園正面にいた。生ぬるい春の夜風はその髪や服を靡かせ、薄明かりを金色の留め金と艶やかな黒髪が反射する。

「えーと、受付ってどこにあるんだっけ」

服を探りしわくちゃになったメモだったものを取り出す。ただポケットに入れただけゴミクズ同然にどのようにしてなったか果てしなく疑問であるが少女は気にも止めないだろう。

「本校舎一階総合事務受付……ってだからそれがどこにあんのよ」

紙に怒鳴ると余計にイライラしたのか手に持つ紙切れを握りつぶしてポケットに乱暴に突っ込む。

「自分で探すわよ、探せばいいんでしょー」

なんて言いながらメモに書かれた目的地を求め足を動かす。特に深い考えもなくただ漠然と歩く。これから通う学園を事前に見て周るのもいいかも、なんて思いながらいると目的と手段の優先順位が入れ替わってしまい今はＩＳ訓練施設へ向かっていた。

（これだけ歩いて誰にも会わないなんてある意味奇跡よね。結構規則が厳しいのかな）

そう彼女は思っていたが、実際は彼女の歩く区域は第一級危険生物とその生贄が出没するため学園の人間は放課後近寄らないことになっているのが真相である。

（あーもー、面倒くさいなー。空飛んで雄介に見つけてもらおうか

なー）

それはとても素晴らしい案に思えたがすぐに棄却する。転入手続きの終えていない形式上まだ外部の人間である彼女がＩＳを起動したら大問題である。それで強制帰国なんてことになったら水の泡だ。政府高官が情けない顔をして必死で頭を下げていた光景も思い出して行動をなんとか思い留まった。

（ふっふーん。私は重要人物だしねー。自重しないとねー）

『歳をとっているだけで偉そうにしている大人』『男っていうだけで偉そうにしている人間』を彼女は大嫌いな子供であった。だから両親や日本で友達になった幼馴染を除いて男は蔑視していた。そんな昔の自分の価値観を壊した一人の日本人の男子の顔が思い浮かぶ。

（――でも、アイツは違ったなぁ）

ほんの少しの出会いであった。同じ歳の癖して妙に大人びて飄々としていた強い男。彼女の初恋の相手。

（――元気かな、雄介）

まあ、そんな簡単に死ぬような人間には見えない。なにが起こってもきっとしぶとく生き残ってるだろう。

「だから……でだな……」

この学園で聞こえるはずの無い男の声が聞こえた。その声の主は知っている。彼に会うために少女はここにやってきた。だから間違

えるはずがない。

（ちょっぴり再会が早くなったけどここで最初に出会ったのが雄介ってなんかロマンチックかも）

予定とは異なる再会に心臓の鼓動がより早くなり、より大きく脈打つ。だが足早に駆けたその歩みはすぐに止まってしまった。

「次こそは一撃を与える！」

体がびくんと震える。知らない女の子の声が聞こえたから。

（大丈夫。大丈夫！　講師なんだから生徒や教師といるのは当然よ。男友達なんか出来るわけないんだし）

そう自分に言い聞かせ思考をポジティブに持ちあげた。揺らぐ心を抑えて声を少女はかけようとする。

「ゆう――――」

「とりあえずそうなるまでマンツーマンの特別訓練は継続だな、弱い代表なんて困るからな」

「そ、そうだな……」

「ちょっと私を忘れないでくださる！」

「忘れるわけないだろ、心配するなよ。みっちり鍛えてやるから」

「あ、ありがとうございます……」

両手に華を行っている想い人が楽しそうに談笑している様子を覗いてしまい、さっきまであったときめきは沈黙し、ひどく暗くて冷たい醜い想いが苛立ちと怒りのブレンドで流し込まれていく。一夏に声をかけることなく再び総合事務受付を探す。すぐにそれは見つ

かり事務員へ手続きの書類を渡す。

「ええと、手続きは以上で終わりです。ＩＳ学園へようこそ、凰鈴音さん」

朗らかな笑顔で愛想の良い人柄だと分かる事務員の全てが意識の外で胸中に一欠けらも残らない。不機嫌を隠そうともしない少女は底冷えする声音で事務員に質問する。

「五代雄介って、何組ですか？」

「ああ、噂の子？　一組よ。凰さんは二組だからお隣ね。そうそう、一組代表の篠ノ之さんは放課後毎日つきっきりで個人訓練してもらってのよ。なんか甘酸っぱいシチュエーションで青春って感じがするわよねぇ。……実態は色んな意味で凄まじいけどね」

その言葉で頭が真っ白になり後半の言葉を聞き取ることが出来なかった。個人訓練。毎日。篠ノ之。そんなワードが何度も、何度も、何度も脳内を巡りに巡る。

「二組のクラス代表って、もう決まってますか」

「決まってるわよ」

「名前は？」

「え？　ええと……聞いてどうするの？」

ようやく鈴音の様子が可笑しいことを感じた事務員は少し戸惑いながら聞き返す。

「あるお願いをしようかと思いまして」

受付を去ると血管が浮き上がった歪な笑顔の少女は自室に向かう。

「ふふ、篠ノ之。覚えたわ。誰が雄介に相応しいか教えてあげようじゃない」

寮の扉前に到着する。とりあえず標的（ターゲット）の名前が判明したため次回へこの感情を持ち越すことにした。少女はまだ知らない。同居人の名前が篠ノ之箒、最大のライバルがいる部屋に住むことになっていることを。

◇

馬鹿騒ぎをしている少女達の黄色い声が食堂から聞こえる。篠ノ之箒クラス代表決定によるパーティーだ。五代雄介は誘われたものの、山のように処理しなければならない仕事があるため断った。自室に書類やらを持ち帰りひたすら業務をこなす姿は昼間とは別人である。

ずっと書類と格闘して息苦しさを感じた五代は夜、グラウンドへ赴き月を見ていた。手を伸ばし、空気を掴む。そんな意味の無い動作をして再度夜空を見つめる。そんなことをしていると誰かの足音が近づいてきていた。

「……楽しかったか？　パーティー」

「無駄に疲れた。でも、悪くはなかったぞ」
顔を見せず暗がりの中で一夏と箒、二人の幼馴染が会話をする。夜だけしか出会えない秘密の時間。
「よかったな。じゃあオレ眠いから寝るわ」
「待て」
織斑一夏である時間は終わりだと、去ろうとする五代雄介を止める少女。
「……少し話をしないか？　五代雄介じゃなくただの幼馴染として」
「……悪い」
「そ、そうか。それなら、いい……」

この一ヶ月の態度を見れば分かることだ。織斑一夏は浅く広い薄っぺらい人間関係しか築かない。誰とも仲良く、誰にも優しい。だけどそれ以上深く入り込むことはない。それに気付いている人間はどれほどいるのだろうか。とっくにわかりきった拒絶（こたえ）だと知っているはずなのに少女の胸は抉られ苦しくなる。自分の想いは彼に届き彼を変えるに値するものになりえるかもしれないという淡い期待は脆くも崩れ去った。
箒の目元には透明な雫が溜まっている。いつ決壊するかは分からない。そのまま去ろうとする。
「でもさ…たまにこうして他愛のない世間話をするだけなら構わないよ」
「――――っ！　わかった。で、ではなっ」
「おう。おやすみ」

去り際に言われた背後からの言葉に別の意味で少女の目元に合った雫は流れ落ちた。目も顔も赤く、心臓は高鳴る。あれはただの同情かもしれない。ただ、思いつきで言った戯言かもしれない。少し、ほんの少しだけ。遠い場所にいる幼馴染に小さな一歩を近づけることが出来た気がした。

足音が遠ざかると頭を掻き、コンクリートで出来た床に座る少年。

「……はあ。何をやってるんだ俺は」

あの場で徹底的に拒絶すればもしかしたら篠ノ之箒は織斑一夏への感情を断ち切れたかもしれない。それなのに彼は逆に希望を見出す行為を幼馴染の少女にした。どこかの小説の主人公のように優柔不断だな、と嘯く。

（罪悪感？　いや違う、ただの醜い欲望だ。俺は———）

出かかった答えを出してはいけない、と無理矢理思考をシャットアウトする。出してしまったら最期、均衡を保った心が、今までの全てが粉々に砕けてしまう。

「……寝るか」

部屋に戻りベッドへ潜るとすぐに意識が闇へと落ちていく。だからであろうか。その日の夢はなぜだか彼をを少し懐かしい気分にさせた。どんな夢だったのかを目覚めた彼が知覚することはない。頬に出来た痕だけが残照として残るだけである。

恋敵

「五代君、おはよー。ねえ、転校生の噂って本当なの？」

五代雄介が教室に着いて早々クラスメイトが話しかけてきた。彼は生徒ではないが同じ年齢のため最初はさん付けされて、余所余所しく接しられていたがいつの間にか『五代君』とフレンドリーに呼ばれるほどこの場に馴染んでいる。

「ああ、中国の代表候補生だよ」

「へー、でもなんで今の時期なの？」

「さあね。そこまではオレも知らないよ」

入学式から僅か数週間後の転入は確かに変わった話だ。時期をずらすということに何らかの思惑があったのかもしれないし、急遽ＩＳ学園に入る事情が国に出来たのかもしれない。どちらにしろ五代雄介がそんな舞台裏を知る由はないし、詳細を知る必要性も感じられなかったので適当に答えた。

「あら、わたくしの存在を今更ながら危ぶんでの転入かしら」

腰に手を当てて、金髪の艶やかな縦ロールを弄りながらセシリア・オルコットが会話に割り込んできた。どちらかというと彼女の方が新たに来る代表候補生の存在を危ぶんでいるのだろう。そうでなければここまで関心を見せることはない。

「それなら、今朝会ったぞ。私のルームメイトになったからな」

そしてこのクラスにいるもう一人の専用機持ちである篠ノ之箒も会話に参加する。彼女の場合は代表候補生ではなく女子と話している彼を見て割り込んだので転校生については微塵も興味が無かった。

「えーどんな人？」

「一言挨拶しただけで終わったからな。なにか急いでいるようだったので自己紹介しそびれてしまった」

昨夜、箒が一夏と話している間に部屋に入り寝てしまった彼女はまだ処理していない手続きがあったのを思い出して朝、急いでいたのだ。もし、時間があったら修羅場が出来ていたのは容易に想像できる。どちらにしろ今日中に修羅場は確定であろうが。

「そんなことより来月にはクラス代表戦があるし。頑張らないと…」

「そう！　そうですわ、五代さん。クラス対抗戦に向けて、より実践的な訓練をしましょう。とりあえずわたくし、セシリア・オルコットが篠ノ之さんの相手を務めさせていただきますわ。ＩＳ同士の戦闘ならわたくしの方が適任でしょうし…ですから織斑先生と五代さんは忙しいでしょうから無理して参加しなくてもよろしいですのよ」

「あ、ああ！　そうだな、ＩＳとの戦闘にも慣れておかないと！」

言葉を遮り訓練の提案をするセシリアとそれに同意する箒。素手でＩＳを無効化することが可能な化物との個人レッスンは畏怖だけが刻まれる。越えてみせると意気込んでいたのは遠い昔のこと。対抗戦前に動けなくなったら意味が無いという建前を理由になんとかあの拷問から開放されたいという思いで一杯の二人。

「ああ、それもそうだな。今度はセシリアとの模擬戦も加えてみよう。お前らの特訓に付き合う時間ぐらいはあるから気使わなくてもいいぞ？」

さらなる泥沼へ陥る片道切符として返却された言葉を聞いて沈む二人。次にいがみ合いお前のせいだと言わんばかりの火花が散る。ここまで分かりやすい人間も珍しいだろう。

「篠ノ之さんが勝てば皆幸せになれるから頑張ってー」
「こうなれば絶対優勝してもらいますわ！」
「食費が浮くのは嬉しいよな」

優勝商品の学食デザート半年フリーパスが手に入るのは約束された未来らしくクラスメイトやセシリア、一夏までもが満更でもない発言をしている。彼女のこれまでの訓練は無手の人間に敗れ去り、攻撃はまともに当たらない。自身が強いのか弱いのか相手が相手であるので全く分からず優勝できるという自信が持てなかった。

（思えばあの戦い以来、全く駄目だ…）

一夏が行った試験で感じた一体感、まるで違う自分に異なる世界を俯瞰する感覚は完全に消え去っていた。馬鹿みたいに白式を動かしたおかげで操縦は慣れてきたのだがアレには程遠いことを箒は実感している。今はがむしゃらにＩＳを動かすことだけが彼女の道標。

「篠ノ之さん、クラスのために犠牲になって（がんばって）」
「フリーパス（と私達の平和）のためにもね！」
「専用機持ちのクラス代表は一組と四組だけだしあの（拷問みたいな）二人の特訓を受けて（生きて）るんだから、余裕だよ」

激励をしているのに悲哀に満ちた瞳で箒に語りかける生徒一同。おかしなルビや重要ななにかを飛ばしているのだが理解することが出来た。「ああ」と力強い返事だけを皆に鼓舞するように投げかけた。彼女が優勝する目的が一つ出来た瞬間である。

「――――その情報、古いよ」

女同士の友情が育まれる中、教室の入り口から挑戦的な声音で一人の少女が現れた。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。簡単に優勝はさせないから」

「今朝いた、転校生か」

「あら、ルームメイトの人じゃない。今朝はゴメンね。手続きで忙しくて。改めて挨拶するわ」

彼女は気付かない。そのルームメイトが篠ノ之箒、自身の恋敵であることを。我を忘れた彼女が覚えているのは女子を侍らした五代の顔のみで相手には集中していなかったのだ。

「中国代表候補生、凰鈴音（ファン・リンイン）。今日は一組代表の篠ノ之って人に宣戦布告に来たんだけど、どれがそうなの、雄介？」

腕を組みながら小さな笑みを零す凰。

「お前のルームメイトだけど？」

「んなっ……！？　ちょっとどういうことよ！？」

思わぬ一言に素に戻る彼女。昨夜の状況が曖昧になっているがそういえば五代といた女生徒の特徴に当てはまっていると思い返す。

「おい」
「なによ！？」

会ったら言おうと決めていた台詞を口にしようとするのを後ろにいる人間にに止められる。苛立った彼女は誰か確認しないまま罵声を浴びせてしまった。直後、脳天に出席簿の角が入る。軽快な音は鳴らない。くぐもった声にならない悶絶する様子だけでアレがどれだけ痛いかを物語っていた。

「ＳＨＲの時間だ。……教室に戻れ、いいな」
「ブ、ブリュンヒルデ……」
「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、そして邪魔だ、どけ」
「す、すみません……」

現世に現れし鬼神を目の当たりにして畏怖の感情を、単純にビビっている凰。だが、あの態度を見て箒とセシリア、その場にいた生徒は共感する。あんな人外に凄まれたらどんなじゃじゃ馬でも萎縮するだろう。

「また後で来るからね！　逃げないでよ、雄介。あと、一組代表！」
「さっさと戻れ」
「は、はいっ！」

１オクターブ下がった警告を受けると韋駄天の如く二組へ駆けていく。格好つけて登場した少女はクラスの生暖かい視線を送られながら退場することになった。

「転入の理由は鈴の我侭が原因ってことか・・・・・大変だったろうなぁ」

頭の隅に残っていた小さな謎が解けてスッキリした五代。そして振り回されている外交担当の国の人達へ心の中で合掌する。

「……五代、今のは誰だ？　知り合いか？　えらく親しそうだったな？」

「ご、五代さん！？　あの子とはどういう関係ですの！？」

突如現れた転校生が想い人と旧知の仲である。ラブコメによくある展開ではあるが実際に起きると冷や汗モノだ。先のやり取りから絶対に有り得ない確信しているが万が一、ここで一夏が「いや…まあ……むかし……な」なんて言ってしまえば転校生ルート突入。彼女達は引き立て役に成り下がる。乙女達による質問の砲弾が彼へ向けて着弾した。

「いや…まあ……むかし……な」

詰め寄られる一夏は当然返答に詰まり頬を掻いた。なのだが乙女フィルターがかかった彼女達は頬を掻き照れ隠ししているように見えた。終わった…、略奪愛だって…、そんな言葉が渦巻き深遠から常闇の世界が表出しそうになるが出席簿を叩き正気に戻していく千冬。さながら除霊する霊媒師である。

そして、今日も平和にＩＳ学園の授業は始まる。

◇

涙目になりながら少し盛り上がった頭を抑える箒。朝の一件で授業に集中できずにいたところをおもいっきり出席簿という武装をした千冬に叩かれた。何処からどう考えても悪いのは五代雄介ではなく彼女自身。それなのに見当違いな怒りを噴出させていており、流れる先は視線の先にいる男。対して男はノートを凄い速さで書いている。机には二冊のノートがあり、一冊は黒板の写しと授業をまとめ、もう一冊には自身の考察を踏まえた論文に近いメモが乱暴に書き殴られている。その熱心な授業態度は生徒として極めて優秀な部類であろう。

（研究、訓練、勉強。もう少し学生らしくしたらどうだ！）

「――――――」

荒唐無稽な主張をする少女だが少なくとも授業中うわの空で話を聞いていない彼女よりは遥かにマシだ。だが、気に喰わない。彼女のシャーペンの芯が強く抑えられ、ノートに黒い窪みが出来ている。周りの音は耳に入らない。

「――の――――は――――」

（煩い）

なにかが箒の考えを邪魔する。それでも無視して思考に没頭する。間違った選択をして数秒、後頭部に強い衝撃がきてそのまま机に額を強打する。

「授業を受ける生徒に重要なのは三つだ。黒板を見ろ。教師の話を

聞け。そして集中しろ」
「は…はい……」
痛みに悶えながら篠ノ之箒は授業へ帰還した。

◇

「……」
人は失敗から学ぶ。二度叩かれ四度注意を受けた彼女はいい加減学習した。仮にも代表候補生セシリア・オルコットはエリート。ノートを取り、板書きを黙々と写していく。
（あとで五代さんにゆっくり聞けば良いだけではありませんか）
そう考えればあとは楽である。もうこれ以上出席簿の鉄槌は受けたくないのが本音であろう。優等生らしく真面目に授業へ取り組む。
（大丈夫。恋人はいないと以前おっしゃっていましたし）
それなのに何故か自身の考えをノートに書き連ねていくセシリア。もう授業に集中していない。いかにライバルと差をつけるかという

命題を必死で解いていた。

（やはり、積極的なアプローチですわね）

「オルコット、この問題の答えは？」

「……どうすれば好みの女性像に近づけるか…」

彼女は失敗から学んでもそれを生かすことは出来なかった。あえなく三度目の鉄槌が下る。

◇

食堂の人に渡されたカートに大量の食べ物を載せて運ぶ五代雄介。十人ぐらいで食べてようやく無くなるであろう量であるが食べるのは彼一人。食券には五代定食という名の専用食券なんてものまで作られている始末。専用のカート、テーブルが特別に用意されそこで食事をしているのだが隔離のような扱いを受けているのに本人はスペースが確保されて満足している。

「待ってたわよ、雄介！」

一夏が自分専用のテーブルに辿り着くと鈴が彼の前に立ちふさがっていた。鬼の首でも取ったかのようなドヤ顔をしている少女は背

伸びしている子供みたいで和やかな気分にさせた。

「まあ、とりあえずそこどいてくれ。食べ物置けないんだけど」
「相変わらず馬鹿みたいに食べるわね。一体アンタの胃袋どうなってるの？」
「ここで食うなら椅子持ってくるか？」
「い、いいわよ！　私が持ってくるからそこで待ってなさい！」

そう言って手に持っていたラーメンを置くと椅子を取りに人ごみの奥に紛れていく。変わるようにして椅子を持ったセシリアと箒がやってきた。テーブルにはラーメンの他にきつねうどん、洋食ランチが置いてある。

「「五代　（さん）、聞きたいことがあるんだが（ですが）？」」
「なんだ？」
「「中国の代表候補生と一体――――」」
「雄介ー！」

詰め寄った二人であったがその議題に上る人物により中断された。

「とりあえず飯食べようぜ」
「久しぶりの再会なんだから普通、昔話に花咲かせるもんじゃないの？」
「そうかー？　訓練ばっかしてて味気なかった気がするんだが」
「まあ、雄介にそういうことはホント駄目だから気にしてないけど」

セシリアと箒を置いて仲良く喋る鈴と五代。

「五代。少し説明してほしいのだが」
「そうですわ！　五代さん、まさかそちらの方と懇意でいらっしゃ

いますの！？」

疎外感や焦燥がもうグラス一杯になり、漏れでて棘のある追求をする。他の生徒も聞き耳を立てているのがバレバレだ。慌てて顔を真っ赤にした鈴が反論しようとする。

「べ、べべ、別に付き合ってる訳じゃ――――」

「昔、中国で似たようなことしてたとき教えてただけでなんにもないよ」

一夏が簡潔に否定したことで疑いは晴れた。代わりに隣の少女が抱く恋の相手も露呈したため皆安堵は出来ない。現状最も有利な人間であるからだ。否定されて不満そうにしている彼女は間違いなく危険な敵（ライバル）として五代を狙う女生徒達に認定された。

「似たようなこと……？」

「ああ、オレは織斑博士の代役として各国と交渉も仕事なんだよ。他にも何人かはいるんだけどさ。その一環で半年くらい中国でＩＳとＲｉｄｅｒの戦闘指導をするハメになってね。そのとき指導した一人が鈴なんだよ」

（まあ、“織斑博士”本人であるからな。多忙なのは仕方ないか）

今も何処にいるか分からない姉を持っている箒は一夏の爪の垢でも煎じてマトモになって欲しいという願いが浮かぶ。他の生徒は五代の経歴を間接的に聞いて胸をときめかせている。

「で、こっちが篠ノ之箒とセシリア・オルコット。篠ノ之が一組の代表でオルコットがイギリスの候補生」

「ふうん。そうなんだ」

三人は突き刺すような視線で体の一部分を見ていた。一人は豊満に実ったバストを持つ二人に死線を向け、一人は細い足、くびれた腰、主に自身の肉付きが気になっている部分を凝視している。

「初めまして。これからよろしくね」
「ああ。こちらこそ」
「ええ。どうも」

笑顔で挨拶を交わすが三人とも目が笑っていない。火花が散り、後ろには炎が広がっている。仁義なき女達による接触（コンタクト）。そんな重苦しい空気の中どこぞの吸引力の変わらない掃除機に負けない勢いで食事をしている一夏は大物だ。

「ところで雄介、アンタまた講師やってるんだって」
「おう、この二人を中心に一組で教えてる。まあ半分生徒みたいな微妙な立場だけどな」
「ね、ねえ。前みたいにまた戦闘訓練、私も参加させて欲しいんだけど？」

一世一代の告白（プロポーズ）を受けた恋人が恥らう表情をみせながらとんでもない発言をする鈴。死に行く特攻兵へ喜々として志願する異常者に驚く生徒達。それに最も過剰に反応したのは神風部隊所属Ｓ・Ｈさんと同部隊所属Ｓ・Ｏさん。

「別に構わ――――」
「何を考えているんだ、お前！　命が惜しくないのか！？」
「そうですわ！　二組の貴女がこの世の地獄へ再び潜ることはありませんわっ……！」

テーブルが壊れるのではないかと思える速度で机を叩き立ち上が

った。そして思い直せと二人の鬼気迫る表情が語る。
「あたしは雄介に言ってんの。いいじゃない、昔のよしみで訓練頼んだって」
不満そうにしていたが一瞬考えて合点がいったと右手を左手にポンと置いて、指を差し反論を続けた。
「もしかして嫉妬？　まあ、ライバル候補のあたしとの差をつけようって魂胆は分からなくもないけどー」
「いっとくけどお前等への訓練は鈴のときと比べればまだ軽いほうだからな？」
「…何回走馬灯見たか覚えてないけどおかげで強くなれたからね。そこは感謝してる」
すっかり蚊帳の外になっていて手が出しづらい空間に気圧されるセシリア、箒。また、アレでまだ軽いという事実にこれからが怖すぎて竦んでいた。
「放課後第三アリーナでやってるから」
「わかった。放課後すぐいくから。じゃあね、雄介！」
そう言って食べ終えたラーメンの丼と箸を持って片付けに行くと素早く食堂を出て行く。次いで五代も空になった皿をカートに積んで返しにいった。残った二人は食べかけの昼食を時間ギリギリまで粘ったがたいらげることは出来なかった。
（くっ……強力なライバル出現ですわ）
（凰鈴音か。油断は出来ないな）
（ふふ、あたしが雄介のパートナーに相応しいことを思い知らせて

あげる！）

放課後の第三アリーナ。心身限界でぜえぜえと息を吐き、魂が抜けかかった人間が若干名。最初、箒とセシリアは模擬戦をしていたが最後はコンビを組んで一夏と戦い、果てた。ここにもう一人の鬼教官がいたら生き仏として昇天する確率は飛躍的に上昇するのだが運よく、今日はいなかった。

「相変わら…ず……反則…だ」

「どん…な……肉体構造…してますの……」

「体力には自信があるけど篠ノ之達は基本的に無駄な動きが多すぎるから疲れてるんだと思うけど」

確かに箒はＩＳに乗って日が浅いために無駄な動きが多い。また、セシリアも自分の戦い方（スタイル）を確立させているが一夏のトリッキーな動きに翻弄され、演習通りの模範生は簡単にペースを乱されていることで疲労が蓄積されている。あえてそのことを伝えず自ら気付くことを彼は促しているが道のりはまだ遠い。彼女達にはまだ優れすぎた兵器を扱うには荷が重い。

「そろそろ鈴が来ると思うから今日は終わりにするかー」

「ほ、本当ですか！？」

いつもはこれからが本番と言って涼やかな声で苦行を提示する鬼畜の言葉とは思えないと耳を疑う。すると訓練軽減の要因になった少女（いけにえ）がアリーナにやってきた。

「雄介っ！　来たわよって…見事にボロボロねー」

「鈴も似たようなもんだったろ」

「まあね～」

ぐったりして放心状態の二人を見て懐かしむ鈴。瞳から一瞬生気がなくなって小さく呟いていたがソレは昔の自分と彼女等を重ねたのからかもしれない。

「…で、どっちを使うんだ？」

「さすがに敵になるかもしれない一組代表の前で本命は使わないわよ」

そう言ってカードホルダーを取り出すと腰に当てる。粒子化された物質がベルトとなり顕現する。そう、ＩＳと対を為すパワードスーツＲｉｄｅｒを換装するための道具。そして彼女は決定的な一言を叫ぶ。

「？身！」

中国語で一つの単語を少女が発すると体全身が装甲に包まれる。一夏と多少装飾が異なるが間違いなく彼女の姿はＲｉｄｅｒブランクだった。

「ＤＥＣＡＤＥじゃなくて雄介もブランクにしてよね！」

「了解。　それじゃ……変身！」

一夏も続けてＲｉｄｅｒブランクに変身して臨戦態勢となる。いざ戦おうとした両者を外野の声が止めた。当然、人の寄り付かないここで彼らを止めたのは箒とセシリアの二人である。

「おい、中国の代表候補生じゃなかったのか！？」

「なんでＲｉｄｅｒに変身してるんですの！？」

即興の割に連携の取れたツッコミに結構波長合うんだなと感心されていたのだが余裕の無い二人は追随した。それに答えたのは当事者である鈴。

「別におかしくないでしょ？　Ｒｉｄｅｒは万人を超人に変える兵器なんだからＩＳを持ったあたしが使えても全く問題ないわ。さすがに制限段階（リミット・フェイズ）は超えてないけど」

理には適っている。Ｒｉｄｅｒは搭乗者の安全を度外視すれば老若男女、全ての人類が使用することが可能。そして、彼女は紛いなりにも代表候補生。Ｒｉｄｅｒ一つ手に入れるなど容易い。

「ＩＳに乗れるのに…なんて質問は止めてよ。確かにＩＳは万能だけど戦闘においてはＲｉｄｅｒも引けはとらないわ。だから……どっちも極めたかった。中国人（チャイニーズ）は欲張りなの」

いい終えると一夏に向き直る。無言で五代もバイザーに手をかざした。

「話は終わり。じゃ、初めよっか雄介」

≪ＳＷＯＲＤ　ＶＥＮＴ≫
≪ＳＷＯＲＤ　ＶＥＮＴ≫

バイザーから音が鳴り、無から突如顕れた特徴的な剣がお互いの手に握られる。決戦の合図は剣の鍔迫り合い。不快な金属音が狼煙。出来損ないの龍の騎士（ドラゴンナイト）とまだ覚醒していない戦士の卵（エッグウォリアー）による剣の舞が二人の観客の前で公演される。

果敢に攻める未熟な剣士。龍の護りは厚く強大で破れない。空を奔り、剣を突く。宙を踏み、龍の喉元へ喰らいついた。技量は及ば

ない。それでも戦う者としての心構えがあるかないかで大きく野蛮な争いに影響は出る。
無骨で飾り気のない舞は龍の騎士の一撃で終焉する。強力な一撃を受けた戦士は地に堕ち、装甲に隠された姿を顕わにした。

「はあ、負けちゃった。やっぱ強いね雄介は」
「いや、鈴も強くなったよ。本当に制限段階（リミット・フェイズ）を超えるかもしれないな」
「当然でしょ」

談笑をする二人を歯痒い気分で見つめる箒。自分はまだ、彼女のいる位置にすら手が届いていない現実を目の当たりにする。
結果が敗北ということは同じ。だが、彼女の敗北には重みがあった。戦闘訓練は終了。それぞれはピットに戻り帰宅の途につく。
そんな三人に後ろから声がかかる。振り向くと個別にキンキンに冷えたスポーツドリンクが投げ渡された。慣れた様子でツインテールの少女は受け取り、ポニーテールの少女はなんなく手に持ち、ブロンドの髪をした少女は冷たさに驚き床に落とした。

「今日はサービスだ。冷たくて気分爽快になるぞ」
「ありがと。久々に死ぬかと思った」
「すまぬな。五代」
「五代さん。感謝しますわ」

礼を述べる。それを聞いて普段のアレに耐えている代価だからな、といって自室に五代は帰って行く。静かに少女達は見送り、手に冷たさを残しながら寮に戻った。

◇

篠ノ之箒と凰鈴音の部屋。一組代表と二組代表がいる空間であり、五代雄介を、織斑一夏に恋する少女が共同生活する場所。簡潔にこの場所を言い表すなら修羅場。無言。重苦しい空気だけが漂っている。

「・・・・・・宣戦布告よ」

静寂を破ったのは中国からの来訪者。

「あんたに雄介は渡さない！　あたしが一番雄介の傍にいるのが相応しいのよ」

高らかに宣言する少女。この場面が漫画に描かれたのならドーン！、なんて擬音で表現されるであろう。日中の狭間で揉まれる想い人を巡り乙女の争奪戦、開始。

「ど、どど、どうしていきなりそんな話になるのだ！！？」

「好きなんでしょう？　雄介のこと。見てれば分かるわよ」

「・・・違う、私は――――」

織斑一夏が好きなんだ・・・、という言葉は出ない。五代雄介は紛れもない想い人である。それでも今の彼にこの想いは伝えられな

い。例え、他の人間だとしても。

「隠さなくてもいいわよ。・・・・・・うーん、少し昔話してもいい？」

「・・・ああ」

箒の態度に拍子抜けしたのか落ち着いた態度で接する鈴。彼女の雰囲気を察して肯定を示す。

「私ね、男って嫌いだった。例外もいたけど、ＩＳに乗ってから余計にソレは強くなったわ。男ってだけで偉そうにしている人間もあたしの前じゃ媚びへつらうの。小気味良かった。そんな価値観を変えたのが雄介」

瞳を閉じて昔を懐かしむように彼女は話す。

「最初はさ、戦闘訓練を男なんかに学ぶことなんかないって威勢よく啖呵きって勝負を挑んだの。結果は見事に返り討ちよ。それから毎日懲りずに挑んだわ。何度も返り討ちにされて、地獄のような訓練もずっと耐えて頑張った。無我夢中で過ごしていたらいつの間にか代表候補生。ソレであたしは自分の想いがどんな形を象っているか分かったのよ」

慈しむようにそのときの情景を己の想いを語る。篠ノ之箒に、自分自身に優しく、激しく。

「Ｒｉｄｅｒになったのもその頃。雄介と同じ高みにいってみたい。そして辿り着いたのならこの想いを告げよう、そう思ったの」

彼女の想いも目の前の少女に負けないぐらい大きく、そして尊い。

「・・・・・・だからあたしは絶対負けない」

彼女への宣言でもあり自分への戒めの言葉にもなる言葉で締め括る。ずっと聞いていた少女は口開く。

「凰の気持ちは分かった。だが、私にも譲れないモノがある」

語ることは出来ないが箒は一言だけ告げた。鈴もその言葉から溢れる想いの片鱗を感じ取ったのだろう。口にこそ出さないが目元が笑っている。

同じ姿をした人物に好意を抱く日中の争いは激化することなく、氷点下に冷めることなく、程よい情熱を残して終わった。

一人新たに増えた恋敵（ライバル）とは遠くない未来戦うことになるだろうと予感しながら夜は更けていく。

———翌日、生徒会玄関前廊下に大きく張り出された紙があった。

表題は『クラス対抗戦（リーグマッチ）日程表』

そこの片隅に書かれた一回戦の組み合わせ一組代表、篠ノ之箒の相手は二組代表——凰鈴音。

予感はあまりにも早い現実となり立ち塞がった。

敵襲

日本にある何処か。高価な家具や意味不明な機械で埋め尽くされた薄暗い部屋の中で数人の人影があった。部屋は散乱としているようで規則性がある。

「――――――――――」

集まって会話をしている集団。話されているのは異国の言葉。いや、語弊がある。彼等が話しているのは『異種族』の言葉、人が話さない言語だ。

「――――――――――！」

「――――――――――」

一人が叫ぶがあいにく意味が分からない。赤いソファーに座るリーダーらしき人物が言葉を発するとピタリと反論が止む。これは明確な上下関係があることを示唆している。

「――――――――――。――――――――――――――――――――――――――――――――――――」

指令を下された兵のように真剣な顔つきをしてソファーに座る人物の話を聞く彼ら。言葉が途切れると、一人、また一人部屋を去っていく。

全員が去ったことを確認するとソファーに座っていた人物は端のテーブルの片隅にあるパソコンを開く。

電子音と共に画面が光る。新着メールが来ている。メールに書かれた文字の羅列は解読不能。規則性があることから先の言語を文章化したモノであろう。ソレを見て口元が薄く緩む正体不明のナニカ。

「ゲリザギバスゲゲルンザジラシザ、『クウガ』」

そう呟く。『クウガ』と呼ばれる謎の単語を強調していた。ソレがモノなのか、ヒトなのかはたまた全く別の何かを表す隠語なのかは分からない。

次にデスクトップにある『ゲリザギバスゲゲル』と書かれたフォルダのアイコンを迷わずクリックした。そこにはＨＴＭＬ数枚が保存されている。

画像をクリックしてスライドして見ていく。その画像は第２回モンド・グロッソ決勝戦の画像。五代雄介、織斑千冬、篠ノ之箒の写真。最後にＩＳ学園、及びその見取り図。全てを入念に見終えるとブラウザを閉じた。

電源を切り、部屋を出る。表面化で物語は観客に悟られぬように進んでいく。

鍵を握るのは誰か。

舞台を操るのは誰か。
増えていく役者。
謎は深まるばかり。
壊れた世界の演劇（シアター）まで、あと少し。

◆

旧暦の皐月となり桜の木は桃色の花弁から緑の葉に衣替えしてこれから訪れる梅雨と夏への準備をする。来週から始まるクラス対抗戦によりアリーナがしばらく使えなくなるためいつも以上に厳しい訓練が為されていたが今日から一時の間だが開放されるため箒とセシリアは喜びをかみ締めていた。

最初、疎らだった客席もある程度時が経つと好奇心がだんだん増さっていったのか最終的にはチケットとして売り出されるまでになった。好奇心でやってくる人間が大半だが、代表候補生、クラス代表といった一部の生徒はその光景を見て自身の戦術（タクティス）の参考にしたり、他代表の戦力分析、五代の実力を測りに来たりもしている。

ちなみにチケットの販売や訓練内容を当てる擬似的な賭博を主催していた二年生がいたのだが千冬、一夏の二人からキツイお灸を据

えられた。首謀者グループは数日寮に篭った後、品行方正な別人になった。何をされたのか気になり尋ねた生徒もいたが、程強力な指導(せんのう)だったらしく完全に記憶から抹消されていて詳細は不明。さわらぬ神に祟りなし。新たな噂が後に尾びれがつき誕生するのもそう遠くない。

放課後、朱色から黒に蝕まれ、月の残照がない夜空の下、クラス対抗戦が終わるまで行われない拷問(くんれん)は終了した。

「ISの操縦も慣れてきたみたいだし、後は本番を待つだけか」

「そうだな。……ますます凰には負けられないな」

「でも、射撃装備が一切ないっていうのは不安ですわね」

篠ノ之箒が持つ手札は雪片弐型一枚。おまけに後付装備(イコライザ)に必要な拡張領域(パスロット)がゼロのため手札の補充や変えることすら出来ない。現状では機体の持つ性能と操縦者の技量で敵を圧倒するしかない。

「だから篠ノ之が鈴に勝つには短期決戦しかない。長期戦になったら所詮付け焼刃だ。ボロが出る前に倒せ」

アドバイスを箒に送る。ここで鈴の戦闘法(メソッド)や機体性能を述べないのは公平ではないから。

「って、蛇足だったな。ここから先はお前の舞台だ。頑張れ」

「激励の言葉は終わったー？」

どこからともなく二組代表がやってきた。ちなみにあの日以降、一夏とは全く喋っておらず、同じ部屋の箒とは結構五代の愚痴の言い合いとかしていて良好なライバル関係を気付いていたりする。

「タイミングいいな。ちょうど今終わったぞ」

「あたしには何かないの？」
「？？、加油！　鈴」

同じく鈴にも中国語で激励を送る。それを聞き思わず頬が緩む鈴。わざわざ自分の母国語で言われると嬉しいものがある。

「結構国際派なのだな」
「ちなみに五代さんはどのくらいの国の外国語喋れますの？」
「んー2、30くらい？」

それを聞いて乾いた笑いしか出てこない。完璧超人もいいところだ。いや、世界を動かす頭脳を持った彼だからこそかもしれない。歳の変わらない彼が遠い存在であることを改めて実感する。

「ちょっと！　私と雄介が喋ってるんだけど」

脱線し、尚且つ話の主導権すら奪われそうになった鈴が慌てて手綱を手繰りよせる。

「…不安要素は尽きないな」
「…そうですわね」

こちらはこちらで一時休戦して共同戦線を結んだ恋する乙女による作戦会議が絶賛開催中であり、ナチュナルに彼女を無視してしまっている。さらに騒ぎ立てる鈴。ひっそりと喋り黒いオーラが出始める箒とセシリア。それを見て呆れる一夏。

（大丈夫かな…）

勝敗がどうあれ、彼女達の試合の行く末が不安な一夏であった。

◇

試合当日、第二アリーナ第一試合。組み合わせは勿論例の二人。日本代表のサムライガールと中国代表のツインテール。噂の新入生、稀代の天才の妹と突如転入した少女であり、五代の新旧教え子同士の対決ということから非常に注目度の高く、会場入りできなかった生徒は生中継のモニターから観戦するほどである。

そしてアリーナに二つのＩＳが聳え立っている。凰鈴音の第三世代型ＩＳ『甲龍（シェンロン）』。セシリアの第三世代型と同様に非固定浮遊部位（アンロック・ユニット）があり、両肩のソレはこれでもかと存在感をだしていた。

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

指示された場所に　空中を移動をして見つめ合う。映っているのは闘志だけ。開放回線（オープン・チャンネル）を使った会話が五メートル弱の距離でされる。

「箒、悪いけど手加減無しでいくわよ」

「無論だ。真剣勝負で手を抜くのも抜かれるのも武士にとって恥でしかないのだから」

「そうね、あんたならそういう風に言うわよね」

確認を終えるとアナウンスが再び聞こえた。

『それでは両者、試合を開始してください』

けたたましく鳴り響くブザーが切れた瞬間、二つの刃が交錯する。ただ展開しただけの白い太刀は異形の青龍刀によって押し返され持ち主ごと吹き飛ばした。弾き返された箒は即時に三次元躍動旋回（クロス・グリッド・ターン）をして第二陣に備えるように構えなおす。

「ふうん。やっぱりこのぐらいじゃ駄目ね」

そういうともう一つ同じ武器を取り出し、双剣による剣戟が侍を襲う。攻撃手段が増えたことで反撃に転じづらくなり、ようやく攻守が反転してもたやすく防がれてしまう。攻め（オフェンス）も守り（ディフェンス）も十全に扱えないためこのまま消耗戦になればジリ貧でほぼ確実に負けるだろう。

（む。ここは一旦距離を置くべきだな）

「――――甘いっ！！」

距離を取った白式に二基の青龍刀を連結させたモノが叫びと共に投擲する鈴。その武器に集中して流すように往なすことに成功した箒だったが、直後に不可視の衝撃がプレゼントされた。意識が暗転（ブラックアウト）しそうになるのを口の中に広がる不快感からなんとか持ちこたえ相手に照準を当てる。

「もう一発！」

より強力な見えない一撃を宣言すると肩のアーマーが開き中心の球体が光った瞬間、地表にそのまま落とされ腹部にはシールドバリ

アを貫通した証として痛覚があった。凰のＩＳの扱う能力の一つ『衝撃砲』。空間に圧力をかけみえない砲身を造り、その過程で生じるエネルギーを砲弾として撃ち出す特殊兵器。
二発分のダメージによりエネルギー残量も大幅に減り苦しい展開だ。なんとかこれ以上喰らわないように必死で砲撃を避け続ける箒。
「よくかわすじゃない。衝撃砲（りゅうほう）は砲身も砲弾も見えないのが特徴なのに」
砲身、砲弾も見えずおまけに砲身斜角の制限もないのは脅威である。それを避けることが出来るのは彼女の経験則からである。下半身の動きと目線というのは相手の動きを読むのに最も注視するところである。腰を見れば相手の壱手が理解し、目線を辿れば意図を推測できる。箒は彼女の視線を頼りに砲撃の狙い、タイミングを予測して動いているのだ。それも感覚的に。
（今は大丈夫だが……賭けにでるしかないか）
実力差はかなりある。おまけに鈴は戦闘になると頭が冷え冷静になる最も厄介で警戒すべきタイプ。そこは五代雄介と通ずるモノを感じさせた。
「凰」
「何よ？」
「私はお前に負けない」
「…いいわ。返り討ちにしてあげる」
笑いあう二人。箒は両手で雪片を持ち、鈴は青龍刀を回転させて構える。先に動いたのは箒。

『瞬間加速（イグニッション・ブースト）』という新たに身につけたこの技能を使い、致命傷となる斬撃を鈴に向ける箒。最初で最後の一度きりしかない最大の勝機。この一撃が届くまで三寸といった所でアリーナ全体を揺るがすナニかが起きた。

「な、なんなのだ？　一体何が起こった……」

「箒、試合は中止よ！　すぐピットに戻って！」

混乱する箒に焦った様子でプライベートチャンネルも使わないで怒鳴りつける鈴が見えたとき、ＩＳのハイパーセンサーから緊急通告が流れ出す。

＜ステージ中央に熱源反応二つ。所属不明のＩＳ及び未確認生命体と断定。ロックされています＞

「な……」

『箒、早く！』

アリーナの遮断シールドを容易く突破可能な兵器を搭載した機体がこちらを狙っているということで考えられるのは三つ。篠ノ之束が設計した『白式』を狙っているのか、その肉親である『篠ノ之箒』を狙っているのか、もしくはその両方。恐らく最後の答えが正しいだろうと箒は考える。

「凰はどうするのだ！？」

「狙われてんのは間違いなくあんたよ箒。時間を稼ぐから、その間に逃げなさいよ！」

「逃げろ……？　私にお前を見捨てろというのか！」

鈴の言葉を足手まといだから遠くにいけという風に受け取った箒は怒りながら返事をする。それに気付いた鈴はすぐに訂正の語を返

す。

「馬鹿！　ただの足止めよ、救援がきたらあたしも――――」

「少し待ってくれ、リントの戦士」

一人の男の声が聞こえる。だがそれはこの学園に唯一いる男とは全く違う男の声だった。それでＩＳからの通告の一部にあった『未確認生命体』という単語を思い返す。

「誰！？」

「どうやら言葉は通じているみたいですね。リントの言葉は膨大すぎて覚えるのに中々苦労したがそのかいがあった」

いたのは異形のＩＳと黒いコートと帽子を着た男。全身装甲（フル・スキン）というのはＲｉｄｅｒに酷似しているがどちらかというと人型ロボットというような無機質な印象を与える。このコンビを見て思うのは嫌悪感。男の方からは特に遺伝子レベルから伝達されているような錯覚を覚えた。

「こちらの質問に答えろ。お前は誰で目的は何だ？」

「それはすまないですね、リントのお嬢さん。では自己紹介を。私の今の名前はズ・ゴオマ・グです。私の目的ですがここに『クウガ』がいるという情報をいただきましてね。今回のゲゲルはクウガですので貴女達をどうこうしようとは思っていませんよ」

リント、クウガ、ゲゲル。一部理解出来ない単語があるが彼等の隠語であることは明白だ。『クウガ』という単語は男の言葉から意味するのは人、しかもかなり箒と近しい人物。束博士は最も候補に当てはまりそうだがここにいないので除外。残りは二人。そして当

てはまるのは。

「五代雄介が目的か」

「ああ、確かそんな固有名だった気がします。……早く殺してたくてすっかり忘れていました」

不気味な微笑みをしながら返事をする男。最後の言葉を聞き殺気をだす二人。

『篠ノ之さん！　凰さん！　今すぐ犯人から逃げてアリーナから脱出して下さい！　すぐに先生達がＩＳで制圧にいきます！』

山田先生の声がプライベートチャンネルから流れる。いつものようなおっちょこちょいな感じは消えて教師らしい威厳のある声音だった。

「いや、先生達が来るまで私達が食い止めます」

「奇遇ね、あたしも同じこと言おうとしてた」

『な、何を言ってるんですか！？　ダ、ダメですよ！　生徒さんにもしものことが――――』

全てを聞き取れなかった。目前のＩＳが当たれば間違いなく死に至る熱量と威力を持つレーザーをこちらに発射したからである。唐突になんの脈絡もなく命を奪う行為だったがハイパーセンサーによる行動予測より間一髪触れずに済んだ。

「ちょっと！　何が手を出さないよ！」

「ああ、言い忘れていましたがこちらのＩＳは普通に無差別に襲い掛かるので注意して下さい」

屁理屈であるが彼らは目的不明の乱入者。いちいち真実を言う必要もないし馬鹿正直にこちらに従う義理もない。

「いくぞ、凰」

「分かってる。衝撃砲で援護するから突っ込みなさいよ。武器、それだけなんでしょ？」

「ああ。ではそれで頼む」

敵同士だった二人は目の前の敵を倒すために徒党を組む。お互いの武器を軽く当てる合図をすると左右に分かれる。即席コンビと乱入者、二つのコンビは動き出す。

◇

「もしもし！？　篠ノ之さん！？　凰さん！？　聞こえてますかー！？」

垣間見えた威厳は遠い雲の向こうに消失してしまった涙目の副担任がいた。

「本人達がやるといってるのだから、やらせてみてもいいだろう」

「お、お、織斑先生！　何をのんきなことを言ってるんですか！？」

実際問題何もできないのだから慌てても仕方がないのだがそこは人の性。千冬のような合理的な考えができる人間の方が圧倒的に少ない。

「落ち着け。ほら山田先生。コーヒー」
「あ、どうも……って異常事態なんですけど……」

コーヒーをすすめられ反射的に口に含みティータイムに突入してしまう二人の教師。そこにもう一人慌しく女生徒がやってくる。

「先生！　わたくしにＩＳ使用許可を！　すぐに出撃出来ますわ！」
「そうしたいが、これを見ろ」

やってきたセシリアにブック型端末のある情報を開き見せる。第二アリーナのステータスチェック情報だ。

「遮断シールドがレベル４に設定……？　しかも、扉が全てロックされて――――あのＩＳの仕業ですの！？」
「そのようだ。これでは非難することも救援に向かうことも出来ない……はずだったのだがな」
「だった、とはどういうことですか？　織斑先生」

平時と変わらない様子で会話をする千冬。絶対に信頼できる何かがある。そんな安心感を抱かせるほど、彼女はいつも通りであった。

「五代が今向かっている。詳しい内容は伏せていたがすぐあの場へ行く手段があるそうだ」
「五代さんが！？」
「そういえば五代君いませんね」

試合を一緒に観戦していた一夏が忽然と姿を消していた。恐らく今第二アリーナへ向かう準備をしていると思われる。

「で、でしたらわたくしも……」

「駄目だ」

「…はい」

凄まれて蛇に睨まれた蛙のように縮こまるセシリア。千冬のこれ以上生徒が危険な場所にいくことを許せないという感情もあり、いつもの三割増で恐ろしい眼差しである。

「ま、気持ちはわかるがあいつに任せておけば問題ないだろ」

コーヒーを飲んで優雅に過ごす千冬を見て一人、このお茶会の参加者が増えたのであった。

これと同時刻、織斑一夏は人気のない廊下で窓を見つめていた。

「さて、誰もいないな」

誰も近くにいないことを再度確認すると鏡にカードホルダーを翳す。すると鏡の中にベルトが現れ、写った自分に装着されると現実の自分には既にベルトがあった。

「変身」

カードホルダーをベルトにはめると黒い残像が一夏を覆う。顕れたのは黒い龍の騎士。龍騎の姿であるがその色は赤ではなく黒になっている。変身すると彼は鏡に触れその奥に広がる世界、鏡の世界（ミラーワールド）へ入り、箒達の下へ向かう。

――――物語の始まりへ事態は急速に加速していった。

怪物

「くっ……！」

剣が届く範囲に入ることは出来る。それから攻撃を当てるチャンスもあった。しかし、四度目の斬撃もその切っ先は空を切るばかりで実体を裂く事は叶わない。

「箒！　ちゃんと狙いなさいよ！」

「分かっている！」

箒は対人戦においては幼少から修練している剣術で培われた技術と天性の才により大抵の相手とは勝負できる。簡単に言えば人からあらゆる意味で乖離している存在は彼女の天敵といえる。この学園でいうならば織斑千冬、五代雄介、生徒会長等の国家代表以上の怪物、猛者が当てはまる。そして、目の前の相手はなんというか生物らしくない機械的な相手であった。

行動が人のソレとナニかが決定的に違う。箒の攻撃に対して病的なほど回避を優先したり、攻撃を止めると観察しているかのように動きが止まる。そのようにプログラムされた機械のように。

箒のシールドエネルギーは一二〇と少し。バリアーを切り裂くための単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）が使えるのはよくてあと二度。全てはその一撃を当てることが出来るかで決まるだろう。

「箒、離脱！」

「ああ」

敵はこちらの攻撃を避けるとすぐダメージを負うのを気にせず反撃してくるＩＳ。無駄に長い違和感ありまくりの両腕を振り回して接近しながらビーム砲撃を行うのだからうっかり近寄ることもできない。

「ああもうっ、ムカツクわねコイツ！」

もう何度目になるか分からない衝撃砲の砲撃。見えない砲弾は敵の片腕に防がれる。あの両腕はどうやら耐久性に優れているらしく、傷一つついている様子もない。へけれども鈴の支援により箒は射程距離から抜け出すことに成功しており、即席のタッグにしては優れたコンビネーションを発揮していた。

「大変そうですね」

「うっさい！　こいつ倒したらあんたのこと思いっきり殴ってやる・・・・・・！！」

全身を黒いコート、帽子、靴と黒一色の服装をした男、ゴオマが観客席側から話しかけ、鈴の返答には、怖い怖いといって口を歪にかたどる。ハイパーセンサーでより詳細に男の声が聞こえ、姿も見えることがとてつもなく鈴を不快させた。

「落ち着け。今は目の前のあれに集中しろ」

「……そうね」

箒の言葉により心の奥底をクールダウンさせる。そう、彼女らが最優先すべきことは目の前の異形の相手を潰すこと。

「あと、エネルギーはどれくらいだ」

「一八〇ってところね」

かなり削られてはいるが箒よりはだいぶマシな数値であった。これほど差が生まれたのは白式の使い勝手の悪さが原因だろう。

「さて、今の火力でアイツを機能停止（ダウン）させる確率は一桁以下だけど・・・どうする？」

「ゼロでなければ答えは一つだ」

「あっきれた。でもまあ、たまにはこういうのも悪くないわよね」

鈴の答えも同じであった。苦笑しながらも晴れ晴れしい表情を見せて問う。

「――で、どうすんの？」

「ふっ、当たって砕けろ。作戦なんてない」

それに対し最高に嫌な予感をを彷彿とさせる綺麗な笑みをして答える。自信に満ち溢れた回答に思わず顔を顰めた。

「ば、ば、馬鹿じゃないの！？　ねえ！？」

「大丈夫だ。ちゃんと考えた結果だからな」

それが一番問題じゃないのか！、と戦闘中でなければ襟元を掴んで問い詰めたい気分になるが、続けられた言葉で考えを改める。

「凰、あれはきっと機械だ」

その言葉は意味不明である。ＩＳはパワードスーツであり兵器。生きているわけがない。

「ＩＳは元から機械よ」
「いや、そうではなくてな。操縦者のいない無人機だと思っている」
「は？　人が乗らなきゃＩＳは――」

そこまで言いかけて鈴の言葉は止まる。機械的に繰り返される攻撃パターン。異様なまでの箒の斬撃への回避行動。男の方とは違い全く喋りかけてこない搭乗者。攻撃を止めると相手も同時に攻撃を止める謎の行動。無人機であるなら全て当てはまりそうな事象だ。

「ううん、でも無人機なんて有り得ない。もし本当に存在してるのなら・・・世界が変わるわ」

ＩＳは女性が乗り、初めて動かすことが可能となる兵器。それが無人で可能となったのなら女性しか乗れないという事実は崩壊する。その女性しか扱えない部分を機械で補助させればいいだけなのだから。

「仮に、仮によ？　無人機だったとしてそれでなにか勝機に繋がるの？」
「ああ。一つだけ、ある」

幼い頃、篠ノ之束が訓練用の仮想敵として箒に与えたロボット（おもちゃ）を思い出す。あらゆる箒の行動を先読みして剣が全く当たらなかった極悪非道のあれを倒した手段を。機械に最も有効な方法は一つ。先読みできない有り得ない行動をしてやればいい。

その言葉に悪戯を一緒に行った悪ガキのようににやりとする鈴。

「箒、あたしは？」
「ただ、衝撃砲を最大火力で放ってくれればそれでいい」
「了解。じゃあ、早速飛ばすわよ」

攻撃を開始。最大火力（フルバースト）で砲撃されるのを号令にして突っ込む箒。無論、衝撃砲は弾かれる。そして定められたプログラム通りに腕を振り回しながらレーザーを放つ。これこそが箒の狙い。通常、回避という一択しかない場面で玉砕覚悟というリスクしかない有り得ない行動をした。

人工知能が弾き出した答えは不確定要素の排除。動きを止めて照準を定める。そして彼女は剣を前に突くようにして距離を縮めていく。零落白夜を発動させると流星のように目標に降り注いでいく。この能力の真骨頂は対象のエネルギーを消滅させる無効化能力。レーザーは霧のように飛散していき、残るはシールドエネルギーと本体。

勝利を確信した一撃に慢心してしまった彼女の耳に鈴の悲鳴が聞こえる。ハイパーセンサーによる知覚により気付いた頃にはもう遅い。黒い片腕が箒を乱暴に弾く。大したダメージにはならずに済んだが最後の勝機を失ってしまった。

体勢を崩し、放心した彼女にゆっくりと近づく異形を荒々しい咆哮が止めた。何もない中継室の透明な窓ガラスから顕れた黒龍が異形のＩＳに襲い掛かる。細長い体でＩＳに巻きつき、動きを完全に封じた。この龍は五代が喚び出したあの赤い龍と全く同じ外見をした色違いの存在であることに箒は気付く。

――――止めを刺せ。

そんな声が聞こえた。もしかしたら幻聴かもしれない。それでもこの最大のチャンスを逃す手はない。考えるより先に体が動く。龍

に縛られたＩＳは抵抗してレーザーを撃つがあいにくその砲身も固定されて箒のいる場所とは見当違いの方向に発射された。

「――――オオオッ！！」

両手で持つ雪片弐型を右斜め下に下げて、目標に向かい飛翔した。残るエネルギーを全て奪い取るかのように刀身は光り輝き、一回り大きなエネルギーの刃が形成される。

＜【零落白夜】を使用可能。エネルギー転換率９９．９％＞

その一撃は強靭な腕ごと敵ＩＳの肉体を切り裂いた。二つに分割された鉄くずが流星の通った後に残るだけとなる。最後の抵抗なのか僅かに動きビームを叩き込もうとするがそれは一人の人物に阻止された。

≪ＳＴＲＩＫＥ　ＶＥＮＴ≫

龍騎士が放つ黒炎により焼き尽くされる残骸。既に零落白夜の効力でシールドの庇護がないソレは小さな爆発を起こして完全に沈黙した。起動停止したＩＳを見て変身を解き二人の元に向かう五代。

「大丈夫か、篠ノ之、鈴」

五代がきた事と敵を倒し終えた安心感でリラックスした状態で答える。

「ああ」

「ええ、でもちょっと待って、もう一人いるから」

そう言ってこの場にいる招かれざる客に鈴は視線を向けた。

「ボンビヂザ、『クウガ』」

「……！」

男の言葉に反応したのは五代。ゴオマが発した言葉を知っている生物はこの世界でたった一種族の怪物達しかいない。

「変身！」

ディケイドに変身するためのバックルを前に出すと見たことのないベルトが五代の内側から生えるようにして突出した。赤く光る石がある位置にバックルを重ねカードを差し、叫ぶ。

≪ＮＥＲＶＥ　ＣＯＮＮＥＣＴ　ＯＦＦ！　ＫＵ・ＫＵ・ＫＵＵＧＡ！≫

合成音声が鳴るとＤＥＣＡＤＥ、黒いパワードスーツをそのまま赤くした姿の戦士と変化する。

「ボボゼ　グスヅロシバ　ゾ　ゲゲル？」

「ほう、その様子ではかなり我々のことについて知っているみたいですね？　彼女にからでも習いましたか？　そんな怖い顔をしないで下さい。今回のゲゲルの対象は貴方一人ですよ。全く面倒な縛りだ。誰も殺せないのですから…」

そう口では述べるが心底楽しそうに話すゴオマ。流暢に会話するが一挙一動が芝居がかっていて聞く者をイラつかせる。箒と鈴は話についていけなかったが五代から今まで感じたことのないような威圧感に怯み場を静観することにした。日本語を話した目の前の生物

へ五代は静かに日本語で問答を続けていく。

「俺のアークルか？　それともダグバの覚醒が目的か？」

「……全部はさすがに教えられません。今回は貴方へのゲゲルの開催を知らせる幕開け（カーテンコール）。いわば前座です。末端の私が勝手（アドリブ）なことをしたら殺される」

「そうか。じゃあ話は終わりだ」

そう言うと目にも止まらぬスピードで地を駆けてゴオマに向けて殴りつける。それを見て思わず息を呑む箒と鈴。五代が無防備な人間にそんな行動をしたからではない。Ｒｉｄｅｒとなって人間離れした怪力を持つ五代の拳を生身の男が片手で止めているからである。超人のような存在である織斑千冬ですら不可能な芸当を目の前の男が為していた。

「人間体ごときで止められるとは思わなかったよ」

「先ほどから言ってるでんですがね、今回は戦いに来たわけじゃないと」

掴んだ拳を離し、手のひらを振るゴオマ。やれやれと言いたげな雰囲気をだして距離をとる。

「仕方ないですね」

男の姿がいきなり変異する。ホラー映画や特撮で登場しそうな怪人のような禍々しい外見を表出させていく。青白い肌は獣のような茶の肌へ変わり、腕には羽のようなものが生えていた。コウモリ男という表現がピッタリ当てはまるフィクションの世界にしかるはずのない怪物がそこにいた。

「なるべく穏便に済ましたいので逃がしてくれませんか？」

異形と化した男に言葉も出ない二人。一方五代は微塵も動揺しないで要求をただ黙って聞く。

「俺が逃がすと思っているのか…？」

「確かにクウガから逃げるの至難でしょうが……」

そういって、篠ノ之箒に目線を向けると生物の域を超えた速さで間合いを詰めて彼女の動きを封じた。

「しまっ―――」

「人質がいれば別でしょう？」

どうやらあの一瞬で箒の意識をも刈り取ったようであり、ゴオマの実力の高さを裏打ちさせている。近くにいた鈴は連戦による疲労とエネルギー不足で手も足も出ない。五代も無傷で箒を助けることは不可能。

「大人しく私を返してくれるなら無傷で返しますが、返答次第ではこのリントのお嬢さんが五体満足でいられる保障は出来ません」

有無を言わせぬ言葉に五代は従うしかない。変身を解き降参のポーズをとる。

「…分かった」

「いずれ、舞台が整ったら殺しあいましょうクウガ」

そう言って箒を投げ渡すと空へ飛び立っていく。小さな点になっていく怪物を見て悪態をつく五代。クラス対抗戦一回戦はは後味の

悪い結末を残して終了した。

◇

学園の地下深くにあるレベル４権限を持つ一部関係者しか入れない隠された空間（シークレットワールド）に二人の人間がいた。

「未確認生命体グロンギ、か」

「……」

織斑千冬は画面に映されたアリーナの映像を見て呟き、織斑一夏は無言を通す。

「確か、最初に観測されたのは三年前のＧ３システムの発表のときだったな。それと同時に織斑一夏の行方も再び分からなくなった」

「……」

未確認生命体グロンギは三年前、初めてその存在は明らかになるがすぐに緘口令が敷かれ知るのは上層部とその場に居合わせた者のみ。

露骨な質問にも能面のように表情を固めて息一つ吐き出さない。

「ゲゲル、アークル、ダグバ。どうやらかなり深い事情を知っているみたいだな？」

顔を近づけて思い切り近くの壁を殴り尋問のように取り調べる千冬。

「ちなみにあのＩＳは間違いなく無人機と断定された」

世界中が開発を進め、未だに至っていない技術。遠隔操作及びその独立稼動。造り上げた人物は間違いなく天才と呼ぶに相応しい。

「残念ながら大破してその技術は闇の向こう側のブラックボックス行きだそうだが」

「でも、開発者に心当たりはあるだろ？」

初めて一夏が発した言葉は確信じみた発言。千冬はそれを聞き鋭い眼光で射抜く。

「あるにはあるが、証拠は――――ない」

だが、それは限りなく黒に近い白。状況証拠のみしかないが間違いなく彼女が絡んでいるのは間違いない。

「それに、お前も容疑者の一人だ」

織斑一夏も何を目的にしているか不透明だ。海外に亡命してから公の場で白騎士と戦うまでの数年間の空白。グロンギ出現を境に謎の失踪。五代雄介として活動を始めているのを認知されてたのはここ一年ばかりでありそれまでは国連も目下捜索中であったのだ。

そして戦闘映像に映った黒い龍騎や赤いＲｉｄｅｒの姿もあり現

存の彼の戦力は未知数。危険度でいうなら彼女と同等かそれ以上。

「――――とりあえず今言えるのは、俺はあいつ等（グロンギ）とは敵対している、それだけしか言えない」

これ以上疑われることになっても何も話さないという意思表示をする一夏。それを聞き悲しそうに顔を伏せる。

「……残念だ」

「……お互いにね」

世界最高位の座にいた伝説の操縦者であり姉弟の二人はそれからお互い顔を見せ合うことなく地上へ帰っていった。

◇

深夜にて三人の生徒が急遽織斑千冬に呼び出された。篠ノ之箒、セシリア・オルコット、凰鈴音。昼間の事件の当事者である彼女達。内容はいきなり話しかけられ夜中にセシリア、凰と共に誰にも知られないようにアリーナへ来い、と言われただけであり突然の通達であったが、心当たりが無いわけではないので困惑を胸に抱えながらも指定された第三アリーナに向かった。

「よく来たな」

アリーナに着くと観客席の隅に一人座っていた織斑千冬がこちらを見ずに出迎える。足音で待ち人が来たのを判断したのだろう。ゆっくりと腰を上げると三人へ相対する。

「それでどういうご用件なのかしら？　織斑先生」

「分かっているとは思うが昼間のアレに関してだ」

全員の胸中にはやはり、といった思いが浮かび上がっていた。むしろ、外すほうが難しい。すぐさま緘口令が敷かれ、五代もあの怪物については一言も喋らなかった昼間の襲撃事件関連の事柄での招集であることは火をみるより明らかだ。

「だが、その前にオルコットと凰に教えなければいけないことがある」

「……！」

「どういうことですか？」

箒は彼女が教えようとしている秘密にいち早く理解する。千冬は一人の男の秘密を暴露しようとしているのだ。

「五代雄介の本名は織斑一夏。私の弟であり、Ｒｉｄｅｒを開発した科学者だ」

「「……は？」」

突然出てきたビックネームに酸欠した魚のようにだらしなく口を開けて一語が漏れる二人。突然この学園に唯一いる男性がＩＳと両極を誇る兵器の開発者だと言われたのだから当然の反応なのかもしれない。千冬があまりにもストレートに喋ったため箒も些か驚いた。

「嘘、だってあたしはアイツに一年前に指導をうけたのよ！！？」

混乱をいち早く言語に変換して表現したのは鈴。

「約一年前に偽名で世界を巡っていたという通達を国連にした。アイツが中国で戦闘訓練の指導をしたのは長期間失踪による罰則として与えられた強制労働らしい」

愕然とする鈴に説明を終えるとその補足を始めた。

「詳しい経緯は省略するがアイツは二度長期的に行方を眩ましている。最初は国外へ亡命して、二度目はお前達が出会った怪物と同じモノが公に出現したときだ」

五代雄介もとい織斑一夏のほとんど知られていない経歴を喋る千冬。箒も二度目の失踪については全く知らなかった。

「あれの正体は一体…？」

彼女のいった一夏の二度目の失踪にあの化物が関わっているのならばそれについて聞くのは当然。しかし、隠された事実というものは隠されるに値する理由があるものでこれにもそれは存在する。

「グロンギという呼称を待つ未確認生命体。三年前の国連軍用Ｒｉｄｅｒ“Ｇ３システム”の公開試運転時に乱入してきたことを皮切りに世界各地で確認されている化物だ」

比喩でもなんでもない言葉通りの化物という事実に困惑と恐怖の色を隠せない。

「そこにいた未確認生命体1号と名づけられた最初の怪物は織斑一夏によって処理された」
「処理？」
「平たくいえば殺した、という意味だ」

それが本当なら彼は殺人者といえる。彼女等が出会ったゴオマという怪物は確かに異形に変異したがそれでも人の姿をして人とほとんど変わらない生物であった。

「それは本当なんですか・・・？」
「ああ。肉片一つ残らず消滅させたそうだ」
「消滅・・・！？」

千冬が言うのであれば文字通り消滅したのが真実なのだろうと結論づける。それ程強力な一撃を放たなければ勝てない強敵だったのだろうかと勝手な推測が脳内を入り乱れる。
知らない現実のオンパレード。どれも秘匿された機密事項であり、候補生といっても末端にしか過ぎない二人の耳に決して入ることの無い情報。つまり、彼女達が呼び出された理由はこれより重いということ。

「お前達を呼んだ理由だが」

本題にようやく入る。顔を引き締めて一語一句聞き逃さないよう集中させて届いたのは耳に聞きいれたくない内容だった。

「織斑一夏の監視、敵対関係が明確した場合の拘束という無期限任務をしてもらう」

顔に驚きを見せる、納得のいかない怒りを表す、苦虫を噛み潰した表情をして俯くという三者三様の反応をする。知らないが故に驚き、目の当たりにしたのだから怒り、予想していたからこそ憂鬱になった。

「な、何故そんな――――」

「現状、怪物（グロンギ）と最も接点を持つ重要参考人だからだ」

織斑一夏が怪しい点を纏めるとこうなる。グロンギの台頭と共に所在不明。あらゆることが謎というベールに包まれているのに関わらず彼等の言葉を流暢に話し、行動原理、目的すら知っている。空白の期間が多く存在して、グロンギについて完全黙秘。怪しいことこの上ない。

「普段通り過ごして、人類（われわれ）の敵になると判断したときに戦えばいい。それだけだ」

口で簡単そうに言うが高難度の任務（ミッション）だ。親しい人間を疑わなければいけない、それだけでも十代の少女には辛いことなのに戦わなければいけない。おまけに彼は世界最高レベルの強さを誇る人外。その怪物を拘束しろというが今の実力では一撃を入れることすら難しい彼女達には到底不可能。

「…あくまでも心構えだ。上が五月蝿くてな。自由国籍権を持つ一夏にせめてもの牽制をしたつもりなんだろうさ」

本来であれば千冬も一夏を疑いたくはないのが実情だ。だが、自由国籍権により十分な取調べが出来ない以上、完全な黒ではないが、白であることも証明する手段もない。だからこそ業を煮やした上の人間が形式上の監視と繋がりが分かった瞬間敵対するというあまり

意味の無い任務が下ったのだ。
千冬はこの話に乗り気でないことを吐露した。血を分けた唯一の肉親を疑うようなことをしたくはないという優しさが僅かだが伝わる。それにより緊迫した空気が緩む。

「汚い大人の事情に巻き込んで済まないな」
「織斑先生は悪くありませんわ！」
「別に私も構わないわ、ねえ？」
「ああ、そうだな」

詫びる千冬へ言葉を送る三人。そう、彼女は悪くない。状況が悪いのだ。謎の怪人グロンギと無人ＩＳの襲来。態とではないかというぐらい沢山の疑われる要素を持つ織斑一夏。数えればキリが無い。確かに最強の頂にいるが今はただの一教師でありそれらの問題は決して彼女の責任ではない。

「これで話は終わりだ。我が不肖の弟をよろしくな」

その言葉を二つの意味で捉えた三人は力強く頷く。一つは彼が本当に敵だったらそのときは目を覚ましてやれという彼女の想い。もう一つは未来、彼と結ばれたときのお義姉さん（ちふゆ）の言葉として。刹那でお互いの考えを読むといがみ合う。
その光景を見て苦笑する千冬。ため息を吐き、本当に大丈夫だろうかと呆れる彼女の姿はいつの日かの織斑一夏によく似ていた。
少女達が弟（いちか）の闇を取り除いてくれることを切に願いながらアリーナを姉は去っていった。

◆

今日も暗い部屋の中で光る画面を見つめて作業を進める一夏。ひとしきり終えると真剣な表情になり机に置かれた赤い携帯電話を片手に持ち窓を見ながら立つ。盗聴されていないか入念に確認するとある人物に電話する。数少ない織斑一夏を知る者であり、彼の秘密を誰よりも知っている人物へコールが三回鳴ると繋がった。

「俺だ。例の件だけどさっそく釣れたよ」

「――――――」

「分かっている。まさかお前が来れるとは思ってないさ」

織斑一夏の声だけが部屋の中で響き電話の相手の声は聞き取れない。ただ、気さくに話す様子からして旧知の仲であることが分かる。

「――――――」

「成程。とりあえずアイツだけ送ってくるのか」

会話の内容はどうやら何かをこちらに送るというもの。人なのか物なのかは残念ながら不明。

「――――――」

「明日の朝には着くのか。早いな」

どうやらそれは明日にもこのＩＳ学園に到着することが確定して

いるようだ。

「――――」

「ああ。最悪の場合は、な。その辺は任せる」

声のトーンが下がる。彼にとっての最悪の事態。それは彼女らの懸念通りに敵になることという未来であるかもしれないし全くの見当違いかもしれない。分かっているのは聞こえる声には織斑一夏の決意が滲み、その瞳には最悪を受け入れる覚悟があるというだけ。

通話を切ると携帯をすぐ閉じて椅子に腰掛ける。

「今の俺を見たらあの人達はともかく貴方はどう思うんだろうな？」

この世界を人知れず救った英雄達を思い浮かべる。織斑一夏が本来進むはずだった未来を破壊した二つの出会い。最初に出会った男は彼を絶望から救いそして大きく道を誤らせた。もう一つの出会いは人外に成り果てようとした彼を人に留まらせた。今、織斑一夏という世界でたった一つの個体が生存しているのはこの二つの出会いと彼が抱く願望があるからに他ならない。

世界中の誰かの笑顔のために争うことの嫌いな男は自身が正真正銘の化物になるまで戦い続けた。報われない最期だったが彼らしい終わりでもあった。そんな彼が命懸けで閉幕した悪夢の惨劇は再演されようとしている。

「俺は知らない誰かのためには戦えない。でも、安心しくれよ。貴方が救った世界は俺が護って見せるから」

これは彼の夢ではない。一人の男の尊い願いを護る少年の誓い。

夜は安らかに更けていく。

To be continued・・・

序曲・Heroic syndrome sick Bat

昨日あった騒ぎなど忘れ去られたように変わらぬ朝がやってきた。平和で不変な日常を赤い太陽が主張しながら天に昇り光を注ぎながら告げる。一つの演劇（シアター）が開幕したといっても日常の物語（ストーリー）が急激に変化するまでの影響は無い。今は始まってしまった劇の序曲（プロローグ）が緩やかに流れるのを祈るのみ。

この学園に一人しかいない男は誰もいない剣道場で黙々と修練をしていた。体を動かして複雑な感情を全て消去（デリート）するためにただ鍛える。今日の仮想敵は己。結果は引き分けに終わるが自分を打ち破るという思考はいくらか今の一夏に有効だった。

精神を安定させるための修練を終え、部屋に戻ると一人の少女が一夏の自室前で扉を叩いていた。

「オレの部屋を壊す気なのか？」

尋常じゃない様子で叩かれる扉を見兼ねて後ろから尋ねる。サンドバックと化した扉はようやく解放され、破壊されることなく無事本来の役目をし続けることが出来た。

「っ！？」

「そこまで驚くないでくれよ。少し悲しいんだけど」

中にいると勝手に思い込んでいた人物が後ろにいたので驚いたのだが五代の格好を見て納得した。タオルに替えのシャツ、空のペットボトルを持っていたことから朝どこかで体を動かしていたのだと

気付いたからである。

「とりあえず、シャワー浴びるからそこどいてくんない？」

汗でべたついた肉体を早く洗ってサッパリしたい一夏は箒に退くように催促した。

「すまん。お前に用があってな」

「…手短に頼むぞ」

昨日の今日であり、瞼を薄く閉じて聞くことにする主旨を見せる。

「来月の学年別個人トーナメントだが――」

六月末に開催される自主参加の大会。専用機持ちである人間の為に用意されたような試合であり白式を持つ箒も参加するのは間違いない。

「私が優勝したら、お前の知っている真実（すべて）を白状してもらう！」

一夏の瞳を捉え、決して目を逸らさないで指を差しながら言い切った。他人からはどう見ても告白にしか聞こえない宣戦布告。それを聞いて野次を飛ばすモノがいた。

『お～朝からラブコメですかー。馬鹿ヤロー』

「――！！？」

この学園で聞くはずのない男の声が何処からともなく聞こえる。箒は周囲を見渡すがどこにも人影は見当たらない。そして一夏を見るとある一点を見つめていることに気が付きその視線を追うと一匹

の赤い眼をした蝙蝠がそこにいた。

「な、なんだあのヘンテコな蝙蝠は！？」

『貴様、失礼な！　オレは狂気のマァッドサァイエンティィッストッ！　織斑一夏より造られし究極のＲｉｄｅｒを生み出す兵器ィ！』

箒の言葉に反応し、喋りだす蝙蝠。その時点で既に可笑しい。俗にいう厨二病患者に類似した台詞を高いテンションを持続させながら高らかに叫ぶ。思考を停止させるには充分な奇行を熱い魂（ソウル）を滾らせかのように行う。

『通りすがりのスーパーＡＩ、キバットバット?世！　またの名をモモタロスだ！　よく覚えておけ！』

呆然とする箒、頭を抱える一夏、やってやったぜ感を出して羽をパタパタさせて飛び回る蝙蝠。

演劇の序曲（プロローグ）を飾るトップバッターは衝撃的な登場で役者達を混乱させた。

ＥＰＩＳＯＤＥ２　覚醒（ウェイクアップ）！　世界の運命（さだめ）を破壊しろ！

時は流れ六月初旬の休日。織斑一夏はＩＳ学園での約二か月の慌しい月日を経て久方ぶりとなる自らが造りだした成果の結晶が集う研究所（ラボ）にいた。

各国の諜報員が血眼になり、人員、ネット、衛星。あらゆる手段を尽くして世界を探しても見つからなかった秘密基地にわざわざ訪れたのは新たなＲｉｄｅｒの開発の為でもグロンギ対策用の兵器を造る、といったものではなく無理矢理格ゲー対戦に付き合わせられひたすらゲームをするために引き篭もるというなんとも微妙な理由。

研究所のある人物の部屋にてテレビゲームを現在進行形で行っていた。

『なん…だと…！　この局面でコンボＢ－１１なんてアァリエナァイィー！』

コントローラーを投げ出した彼の対戦相手はＲｉｄｅｒの外装をしたままゲームをしていた。その声は先月現れた蝙蝠、キバットバット？世、もとといモモタロスと名乗った正体不明の何かの声と同一のものであった。発言からして同一人物である可能性はほぼ確実だろう。

「なあ、もういいだろ？　俺、飽きたんだけど…」

『イチカァァアア――ッ！　貴様がッ、負けるまで、ゲームは止めない！　次はこれだッ！』

「……はあ」

『ＩＳ／ＶＳ』（インフィニッヴァネネヲトスカイ）で二十一連敗したモモタロスは新たにゲームカセットを部屋の脇の棚に大量にある中から取り出した。タイトルは『ＭＡＳＫＥＤ　ＷＡＲＲＩＯＲ／集結する戦士達』と呼ばれる格ゲー。日曜八時枠に放映されている人気特撮シリーズのクロスオーバー作品であり、子供は勿論、ゲーマーからも高い評価を得ている超名作である。

ストーリーは謎の組織に人体改造された途中で脱走した青年が正義の味方『仮面の戦士』（マスクド・ウォリアー）として怪人を倒していくという非常にシンプルな話なのだが高いドラマ性と若いイケメン俳優が主演が務めたことにより幅広い世代に支持を受けている。当初の企画ではこの番組を作る切欠になったＲｉｄｅｒ、そして開発者への敬意の意味で“仮面ライダー”という名前にする予定だったが当時はＲｉｄｅｒへの風当たりも強かったためあえなく名前変更にしたという裏事情があったりするのだが当の本人である織斑一夏が知る機会は恐らくない。

『行くぞ。戦いの準備は万全か？』

「……」

『ハッ――恐怖の余り声も出ないか、雑種――――ッ！』

まともな会話が望めないと判断した一夏は相手（バカ）のテンションが下がるまで無視することを決めた。

キャラ選択画面で１Ｐモモタロスは第一作の主人公Ｆｉｒｓｔ、２Ｐ一夏は二作目の主人公Ｖｉｃｔｏｒｙを選択。フィールドは荒野。ファインティングポーズを構える使用キャラを戦闘開始まで眺める。数秒、ゲーム開始を告げる女性の声と共にコントローラーを掴む指先が素早く動き出す。

『ハッハー！　人誅の時間だァ！』
「……」
『うぇ！？　くっ…』
「……」
『ちくせう！　もう一回だ！』
「……」
『我が名が最強であることを証明せよ！』
「……」
『馬鹿な！　傷一つないだと！？』
「……」
『イメージするのは常に最強の自分――――』
「……」
『何度でも蘇るさ！』
「……」
『ぶるぁぁぁぁぁぁぁぁ！！』
「……」
『……』
「……フッ」

結果は一夏の圧勝。三十連敗を喫して本日の通算負け数は三桁に上る。モモタロスはコントローラーを手にして固まっており、一夏は晴れやかな笑顔をしていた。

『真っ白に燃え尽きたよ……パトラッシュ、オレなんだかすごく眠いんだ』
「お前は機械だから眠れないだろ」

矛盾点を一夏はすぐに指摘するが返事はない。
拗ねた子供のようでまるで人そのものに錯覚してしまうレベル。

モモタロスは人工知能に擬似人格を搭載した限りなく人に近い感情、行動をとるアンドロイドだ。おまけに人のように経験から人格を形成する学習機能を持ち合わせている規格外仕様（オーバーテクノロジー）だが厨二病患者という残念な結果に成長した。

主にキバットバット？世という新たに造られた後期ＲｉｄｅｒＳｅｒｉｅｓの体で行動しているがモモタロスは本来、無人ＲｉｄｅｒＳｅｒｉｅｓの為に造られた個体であり、彼の本体である専用Ｒｉｄｅｒの潜在能力（スペック）は専用機以上である。

『やっぱ相棒とゲームした方が楽しいな～。どっかの科学者とやるとすっげぇつまんねーわー』

「……お前をアイツに預けたのは失敗だったなとつくづく思うよ」

露骨な皮肉とも言えない低次元な悪口を開発者に向ける最高傑作（モモタロス）に思わずここにいないもう一人の研究所（ラボ）のメンバーへ毒づく一夏。

『その辺はまあ置いといて、そろそろ本題に入りますか』

「やっとか。…全く今回は無いのかと思ったよ」

くだらない時間に半日使ってしまった一夏はようやく有意義な情報を得られることになった。

『おいおい。相棒の腕は知ってるだろ？』

「アイツの腕は確かなのは分かってるさ。それで肝心の抽出したデータはどこだ」

『ほらよ。ＰＡＳＳロックがやっと終わった出来立てホヤホヤのメモリーだ』

半日かけてロックの解除をしたソレを抜け殻になったキバットバット？世から抜き出すと一夏にそのまま渡す。

「じゃあ、早速見てみるか。俺は部屋に戻る。いいか、くれぐれも学園で余計なことはするなよ」
『へいへい。了解です、科学者（ドクター）』

扉を閉めて、データ解析のためにＰＣのある部屋に向かう一夏。それを確認するとキバットバット?世の体に自身のＡＩを流し込む。
完全に移植を終えると羽ばたきながら先行き不安となる言葉を残して部屋から出て行った。

『フッフッフッ……甘いぜ一夏。オレの登場シーンはなあ、強烈でダイナミックにするんだよ。ちょうどあおつらえ向きのイベントもあることだしなあ！　久々に右腕が疼くぜぇぇええ！』

嫌な予感しか湧かないが、モモタロスは楽しそうに笑い声をあげて計画の準備を進めていく。

◇

空が赤紫色となり太陽が地平線に沈もうとしている日暮れ時。襲撃騒動により千冬から任務を下された少女三人は寮の部屋で茶菓子と愚痴を肴にガールズトークに勤しんでいた。

ふと、箒は壁にあるカレンダーで学年別個人トーナメントが開催される一週間の日程となる日にちを確認する。ソレを見て鈴とセシリアも釣られるようにしてカレンダーの日付に目線が向く。

「そう言えばもうすぐね。次から次って本当面倒臭いわねー」

「わたくしは活躍の場が出来て嬉しいですが」

「またアレが続けて起こったら確かに面倒だな」

嫌そうな顔をして半目になりテーブルに頬をつける鈴。セシリアは同調しなかったが箒は頷き返す。

クラス対抗戦（リーグマッチ）の後処理で関係者として聴取、書類に纏めたりして非常にストレスが溜まる毎日であり、箒も過去のトラウマが刺激され憂鬱になっていた。

（まあ、なんにしてもあんなことを言ったのだから勝たなくてわな）

一夏に宣言した告白に勘違いされそうな宣言を思い出す。そして割り込んできた蝙蝠（じゃまもの）もついでに浮かび上がった。湯のみに注がれた緑茶を少し飲むとソレについて考える。

（そういえば、結局あのヘンテコなナマモノのことはよくわからなかったな）

あの時、頭を抱えた一夏が両手で箒の肩を抱き、「二人だけの秘密にしてくれ」と真剣な表情で間近に見つめられ思わず「分かった」と箒は答えてしまった。

返事を確認するや否やモモタロスと名乗った蝙蝠の羽を掴むと部屋の中に何一つ詳しい事情を聞くことなくそのまま入っていってしまったのだった。

勘違いしそうな台詞を吐く天然タラシの言葉を反芻しながら夢心

地にフラフラと自室にその日は戻っていったというのがことのあらましである。

「あの怪物と一緒にいたＩＳって一体なんだったんだと思う？」

再び悦に入りそうになる箒を鈴の疑問を問う声が急速に現実に引き戻していく。考えた所で推測の域を超えることはないのだがそれでも気になってしまうのは仕方ないことだ。

無人ＩＳ。世界を大きく変えるかもしれない可能性を持った機体。そんなものを簡単に造り上げ実戦で使用可能なレベルに仕上げる天才の心当たりは箒には一人しかいなかった。

あの世界を嘲笑うかのような天才ならそんなものを造り上げるのはまさしく児戯の如く可能であるがそうなると不可解な点がある。

グロンギと徒党を組む理由である。あのゴオマという怪物は一夏の命を狙っている。そして彼女は織斑千冬、一夏、篠ノ之箒だけを人間として識別しているのにそんな大切な対象の危機に敵側として関わっていることだ。

「さあな。…辛気臭い話は一旦中断してそろそろ夕飯にしないか？」

「そうですわね。では食堂に行きましょうか？」

会話がきな臭くなる前に終えた三人は食堂に行くために廊下を談笑しながら歩く。

他の生徒達も同様に部屋から出てきて夕飯を食べに同じ方向に向かっていた。

女子しかいないという特殊な環境から女性徒達は羞恥心が異様に薄い。肌を多く露出して下着を着けないというう若き少女達による目の毒になる光景。

それを指摘できるのは健全な男子で尚且つ羞恥心や自らの欲望に打ち勝った勇者だけである。

この天国に存在することを許された唯一の男は男子ではあるが鈍感で天然なので例外として除外される。

「あら、五代さん。こんばんは」

「何処行ってたのよ、アンタ」

廊下でバッタリ出くわした一夏を見かけて挨拶を交わす。

「ちょっと、野暮用があってね……」

半日以上モモタロスとゲーム三昧であったのだがそこは適当にごまかす。

「ふーん。そっか」

特に気になっていたことでもないので軽く聞き流す鈴。

「お。五代君だ。やっほー」

「やー、だいだい」

少し立ち止まっていただけで続々と生徒達が一夏に挨拶してくる。

「その愛称は決定だったりするのかな？」

ダボダボのパジャマのデカいナイトキャップが印象的な少女が余った袖を振り回して変わったニックネームをつけて話しかけたので思わず聞き返す。

「決定なのだよー。そんなことよりさあ、私とかなりんと一緒に夕飯しようよ～」

場を生温い空気に変えていく少女。一夏にひっつき他の子がやったら辺りが騒がしくなる行為もなあなあになっていた。

「残念だけど雄介は夕飯食べないわよ」

「えー？　りんりんなんでー？」

「そ、その呼び方はやめてよ！」

小学生の頃、その呼び名で散々からかわれた鈴は声を荒げるが彼女は変わらない笑みで本当の表情を隠すのみ。

「まあ、鈴。落ち着きなよ。誘ってもらって悪いけどオレ基本一日一食しか食べないからさ。遠慮しとくよ」

「そっかー。ざんねんだけどーしかたないねー」

あまり残念そうに見えない様子で間延びした声を出す。

「ところで、そのかなりんって子はどこかに行っちゃったぞ？」

「おわー。ほんとだーいないー」

水浴びをして髪を濡らし、ラフな格好をした少女は少し湿った服が肌を透かしている事実に気づき、自分の腕で大切な場所が見えないように隠しながら寮のある方面へ消えていく。

「あー……待って～」

亀のようにのろまな速さで追いかけていく少女。

「じゃあ、オレは職員室行くから」

一夏はそれを見送ると足早に去っていった。

「私達もいこうか」

「そうね」

「ええ」

少女達は翌朝やってくる波乱が待ち受けているのを知らずに夜を楽しそうに過ごす。

◇

「……転校生、ですか」

「御丁寧にあの騒ぎの後で送りだしたんだ。裏があるのは当然だろう」

職員室に一夏がやってきたのは明日やってくる転校生についてである。モモタロスに渡された情報の中にあり既に知っていたが改めて千冬に渡された二人の資料に目を一通り通す。

「このデュノア社の子は俺が狙いでしょう」

「ハニートラップか。確かにここまで露骨な指示が書かれているからな。お前という磐石な地盤を欲しがっているのが良く分かる」

デュノアから送られた文書内容を思い出して苦々しくする。
「この二人目は記憶が正しければドイツの黒ウサギ隊の隊長で合ってますよね？　織斑先生」
「私の教え子だ」
「…気持ち悪いくらいに狙いが両極端に別れてますね」

フランスは一夏、つまりＲｉｄｅｒが狙い。対してドイツは千冬、こちらは軍の為に優秀な人材と開発者への強固なパイプの取得。

同時期に異なる二つの思惑が重なるのは偶然で片付けていいのかという疑念が出るが最終的にはそれを受身の姿勢で待つしかないのが実情だ。

「デュノアは俺が何とか対処しますので、片方はよろしくお願いします」
「やれやれ。また一悶着ありそうだな」
「ありそうじゃなくて、確実に起こるでしょうよ」

二人の姉弟は将来厄介事の起こる未来（ビジョン）を幻視して大きなため息をつく。が、あえなくその予想は悪い意味で裏切られることになる。

二番目の物語の幕開けは明日。

二人の役者がこの物語に加わる。

二つの思惑を乗せて。

そして二項目の異常事態（イレギュラー）が起こる。

過去と現在の邂逅が今、垣間見えようとしていた。

序曲・Heroic syndrome sick Bat（後書き）

爆睡中です。
活動報告でも書きましたが初期の頃と文の形が統一出来なくなり今回の改訂を致しました。
作者の力量不足が原因です。
読んでいる途中で消えてしまった方は本当に申し訳ありませんでした。

話を書くことでしか読者の皆さんに誠意を見せられないのでこんな作品ですが完結までどうか応援よろしくお願いします。

テーマソング・令嬢と軍人の入場

「やっぱりハヅキ社製のがいいなぁ」
「え？　そう？　ハヅキのってデザインだけって感じがするけど」
「そのデザインがいいの！」
「私はデュノア社が出してるハイブリッドがいいかなぁ。デザインも性能もアソコかなりいいじゃない？」
「あー、あれねー。確かにいいけど私には手出せないよ」

週明けの今日の朝。子供である学生は学業に、大人は社会の歯車となるという現実（リアル）を突きつけられる嫌な時間。
忘れた課題を始業の鐘（チャイム）が鳴るまでに仕上げるという人間は教室にはおらず、クラスメイトとの談笑を楽しんだりしているものの、カタログを手に持ち活発に意見交換している。問題児は多いが超進学校という側面を持つこの学園の生徒の姿勢は普通の高校生とは違うというのが分かる一幕。
そんな中、不穏な会話をする女生徒が数人。一つの机を囲みこの学園に最近流れた“噂”について話をしていた。

「ねえ、聞いた？」
「聞いた、聞いた」

ここにいるのは既に噂の概要を知っている者だけ。この学園の生徒で今、この噂を知らない者の方が珍しい程流されているある噂について情報交換を彼女達は行う。

「それホントなの？」
「ホントじゃなかったらここまで大事にならないわよ」
「でも、今月の学年別トーナメントで優勝したら五代君と――――」
そこまで言おうとした瞬間、周りの少女達が慌ててその先を喋らせないように塞ぐ。目と鼻の先にその人物が接近していたからだ。
「？　オレがどうしんたんだ？」
「ねえねえ、あの噂ってほんと――――もがっ！」
五代の名を出した哀れな生徒Ａがもみくちゃにされている間に一人の生徒が本人から噂の真相を聞き出そうとする。完全にノーマークだった彼女が話しかけ、取り押さえられるのに三秒も掛からなかった。
暗殺者（アサシン）しか持ち得ない最高ランクの気配遮断を行使して唇を背後から掌で隠して昏倒させるとそのまま輪の外に押し出した。プロフェッショナルの仕事。チームワーク、俊敏、技術。どれを見ても一級品。
無駄すぎる技術の使用方法。欲望に忠実な生徒達はその性能（ポテンシャル）を最大限発揮させていた。
「噂？」
「う、うん！？　なんのことかな！？」
一夏が少し尋ねただけで目線をを泳がせ、口笛を吹き。声が上ずった。残念ながら顔芸に関してはお粗末な出来で案の定すぐに怪しまれる。
そんな時、救いの女神となる存在が現れ、切羽詰った彼女達は神に感謝した。

「あ、山ちゃん！　もう授業が始まる時間だ！」
「ええ、そうですけど……って、や、山ちゃん？」
「早く始めよう山ぴー」
「や、山ぴー？？」

話題を強引にずらすために副担任を弄繰り回す。すると少女達は次々と便乗していき一夏の疑問の声は打ち消された。
入学してすぐ副担任である彼女は生徒達に慕われていた。天然で弄り易い気質。憧れがすぐ傍にいるこのクラス間で生徒に近い彼女が慕われない理由が無い。
マスコットキャラのように次々と愛称が増えて八つとなったがこれから先も増えていくだろう。
要するにこの学園にいる間ここに生徒達に弄られまくるというだけなのだが。

「あのー、教師をあだ名で呼ぶのはちょっと……」
「えー、いいじゃんいいじゃん」
「マヤマヤは真面目っ子だなあ？」
「ま、マヤマヤって……」
「もー、じゃあ前のヤマヤに」
「……それは止めて下さい！」

眼鏡の奥で小動物のように愛くるしい瞳が涙をうかべながらも語尾を強くして明確な拒絶の意志を示す。普段どんなに弄られても困ってもあまり反論しない山田にしては珍しかった。

「と、とにかくですね。ちゃんと先生と言って下さい。分かりましたか？　分かりましたよね皆さん？」
「「「は、はーい…」」」

あまりにも強く言う副担任に迫られたクラス中から生返事が返ってくる。それを聞くと安心したような笑顔を見せる山田はそのまま定位置に戻った。

「諸君、おはよう」
「おはようございます」

黒いスーツとタイトスカートに身を纏った世界最強の教師、織斑千冬が教室に入ってくると騒がしかった教室内は瞬く間も無く静かになり一語一句聞こえなくなった。己にも人にも厳しい彼女の罰則を身を持って体感している彼女達は鬼教官の下、いつか送り出される戦場（じっせん）のために今日も真面目に授業を受ける。

「今日から本格的な実戦訓練を開始する。訓練機ではあるがＩＳを使用しての授業になるので各人気を引き締めるように。各人のＩＳスーツが届くまでは学校指定のものを使うので忘れないようにな。忘れたものは代わりに学校指定の水着で訓練を受けてもらう。それもないものは、まあ下着で構わんだろう」

山田副担任なら確実に二倍以上の時間をかけて喋る連絡事項を口上でスラスラと述べていく千冬。

彼女の発言から分かるようにＩＳスーツは実際の戦闘にはほとんど役に立つことのない無用の長物だ。自分用のスーツを造り、他との差別化を図るという尤もらしい名目こそあるがそれはＩＳという兵器の問題であって操縦者や他のオプションで個性があっても大した意味はない。

極論だが普段着や制服で換装しても戦闘には全く問題はないのだ。

それでも各国や企業は限られたＩＳ操縦者という強力な駒とのコネクトを手にしたいので要らない物（オプション）であっても開発に熱を注いでいる。いつの世も結局は人のエゴが世の中を動かしているのだ。

「では山田先生、ホームルームを」
「は、はいっ」

連絡事項を言い終えた千冬は資料を手にした山田副担任と交代する。慌てて資料をめくり、必要な書類を探す。彼女が見つけた資料は昨夜、一夏と千冬が見た書類と同じモノ。

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！　しかも二名です！」
「え……」
「「「えええええええっ！！？」」」

転校生が来る事に驚くがその理由は転校生が来るという事ではない。その事実が知られていなかったことに驚いていたのだ。通常、転校生が来るという情報どこかしらの情報網にかかり事前に流れ出るものだがそれが無かった。
ただの学校ではそれで終わるがここはＩＳ学園。危険性のない機密情報ぐらいは簡単に手に入れることが可能な生徒が大勢存在する場所だ。
それが出来なかった理由は簡単で、ここに来ることが三日前に急遽決まったからである。職員である人間も知ったのが昨日。混乱しているのはなにも生徒だけではなかった。

（二人の専用機持ちが偶然同じ日、同じクラスに急遽転校なんて馬鹿げてる。ＥＵ自体がグルになってるのか……？）

泥沼になって中断した思考を復活させて一夏が考えていると、教室の扉が静かに開く。

「失礼します」
「……」

クラスに二人の転校生が入ってくる光景を見て盛り上がったざわめきが沈静化される。

二人はゆっくりと黒板の中心まで歩きその動きを止めた。観客へ挨拶をしようとする舞台の主役（ダブルキャスト）のように。

「シャルロット・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことが多いかと思いますが、皆さんよろしくお願いします」

対比的な容姿をした転校生の片割れである少女、シャルロットは人懐こそうな顔で微笑みながら一礼する。

事情を知っている一夏とＩＳ関連に疎い箒を除いたクラス全員がその名前に呆気にとられた。デュノアといえばフランスに本社を置くＩＳシェア第三位とＲｉｄｅｒシェア第二位を誇る大企業。

フランスからやって来た転校生。言わなくても彼女の素性はハッキリと輪郭を帯びていく。

「デ、デュノア……？」

戸惑いながら誰かが呟く。小さな囁きを聞いた少女は聞こえた声の方に顔を向けた。

「ええ。僕はデュノア社の縁者ですので本国から我が社のＩＳの性能を――――」

礼儀正しく高貴な出の上流階級の人間を彷彿とさせる立ち振る舞

いに整った顔立ち。首元まで伸びた金髪に白い肌。皆が思い浮かべた印象は『令嬢』。セシリアとはまた違ったタイプの子女といった感じである。

「きゃ……」
「はい？」
「きゃあああああ――――っ！」

一人の歓声を台風の目にその叫びは伝染されていき拡大（アウトブレイク）する。歓喜という病に教室という名の狭い世界の住人は侵し尽くされた。

「デュノア！　超お嬢様！！」
「しかもうちのクラス！」
「美形！　男装が似合う宝塚系の！」
「ああ、この感情が……恋！」

世界的企業と縁ある少女と同じクラス。普通の学校なら羨望と嫉妬が入り混じる視線が多少なりとも突き刺さるが幸いにもこのクラスではそんな無粋な行いをする輩は一人もいなかったが代わりに何人かの百合っ気がある少女達から舐めまわされるような熱っぽい視線を受けて背筋を寒くしたりするシャルロットであった。

ちなみに織斑一夏が入学した時、彼を見るために来た生徒達でお祭り騒ぎになりスケジュールを大いに狂わせる事態になったことで学習した職員達は厳重に生徒をこのクラスに行かせないために細心の注意を払っているので廊下に野次馬は今のところ一人もいない。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

辟易としながら遠くを見て独り言のように注意する千冬。

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから～！」

もう一人の転校生を見ながら生徒に訴える副担任。一方の少女は腕を組みながら目を瞑り関せずを貫くかの如く佇む。

腰近くまでに長く伸ばした白銀の髪はただ切るのが面倒だからそのままにしているというスタンスを男である一夏にも感じさせた。加えて肉体の重心。千冬や箒と言った者なら分かるが戦う者のそれであり、日常でも無意識に出している彼女はＩＳなしでもかなりの実力者であることが窺い知れる。

『軍人』。彼女の初印象にその言葉は奇麗に嵌る。無機質な銃器のような気配がより顕著にそれを助長させていた。

「……」

赤く染まった片方の瞳孔は絶対零度に冷めた温度で教室をつまらなそうに見渡す。すぐに興味を失ったような表情をすると千冬に視線を変えた。羨望や尊敬の感情はない。上官の命令をひたすら待つ一兵士として無感情に見つめる。

「挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

打って変わって、千冬の命令に素直に従い敬礼する転校生ラウラ。やけに素直に従い敬礼する彼女にハテナマークが浮かぶ一同。千冬はこめかみを押さえて面倒そうな顔をした。

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

軍式挨拶をして答える彼女は自分の所属自体隠すこともしない。諜報潜入には向いていないタイプであり、戦闘に特化した兵であることがよく分かる。
それを見て可能性の幾つかを潰す一夏。軍人としての動きが無意識的に出てしまっている時点で諜報員としては失格なので見た瞬間から0に限りなく近かったのだが彼女の様子からその疑念は完全に消え去った。

「ラウラ・ボーディッヒだ」
「……」

クラスメイトは続く言葉を待ち受けて沈黙を通すが一向に次の言葉は出ない。一分も経っていないはずだが永遠のように長く時を感じる場。

「あ、あの、以上……ですか？」
「以上だ」

空気に耐え切れなくなった山田がフォローしようと笑顔で訊くが五文字でその目論見は失敗。泣きそうな顔をする副担任を余所目に一夏を凝視する。

「！　貴様は――――」

そういって一夏の席に近寄っていくラウラ。なにかを言おうとした瞬間、異変は起きた。

「あれ？　音楽が聞こえる」
「山田先生～。これ何なんですか？」
「お、織斑先生！」

「私も知らん」

教室に設置されたスピーカーから音楽が聞こえた。朝流すようなＢＧＭではなく、どちらかというと悪党や敵が出現するときのサントラとして劇中で流れそうな曲。

生徒だけでなく、教師である二人も何故流れたのか分からない。一人、こんなことをやってのける馬鹿に心当たりがありまくる男子がいた。そして、彼の予想は当たっていた。

『なんだかんだと聞かれたら……答えてあげるが世の情け』

スピーカーからでなく教室の何処かからその声は聞こえる。男の声であり、それを聞いた一夏は頭を抱える。

『世界の破壊をふせぐため、世界の平和を守るため』

混乱する教室内。一夏と千冬はこの所業を行っている犯人の行方を静かに捜す。

『愛と真実の正義を貫くハードボイルドな孤高の戦士』

今回の主役である転校生二人の行動は困惑、次いで警戒。箒もここでようやくこの声の主の正体に気付く。

『キバットバット?世！　真名をモモタロス！』

クラスの関心を奪い去った犯人である赤い蝙蝠が名を名乗り颯爽と現れた。

『世界を巡るＲｉｄｅｒのオレには』

二人と一匹の登場するときの口上を改悪してシメの言葉を言おうとする。自分に酔ったモモタロスは鬼神の接近に気付かない。

『ホワイトホール　白い明日がぁあああああっ！！？』

最後の口上を言い終える前に背後から掴まれそのまま床に叩き落される。逃げ出さないように足で踏みつけてモモタロスの動きを封じた千冬は一夏に尋ねた。

「おい、これはなんだ？　五代」

「……織斑博士が造ったロボットです。ご迷惑かけました」

自分が造ったロボだと正直に告げて千冬に平謝りする。束とはまた違った意味で関わったらかなり面倒だと一夏の様子を見て認識する千冬。

『助けてくれよ科学者（ドクター）。マジでイカれる。やばいって』

「……」

「うわあ、無視された。無視されたぜ？　何だ？　何コイツ？　コミュニケーション文化のない星から来た異星人とかじゃないのか？　これだからエリートは！」

完全無視する一夏に彼が全て悪いかのように罵倒するモモタロス。華麗に登場するはずがキメのシーンを潰すというどこぞの映画版電脳世界の敵がしたような真似をされ苛立ちをぶつける。完全な八つ当たりだった。

「……モモタロス、君の部屋を全て初期化してもいいかな？　」

『すいませんでした！　助けてください、サー』

この初期化というのはモモタロスの趣味の品、ゲームや漫画類である。以前本当に部屋を初期化（カラッポに）されたことがあるので従順な下僕に素早くジョブチェンジした。
千冬に足をどけてもらうと一夏の顔の辺りまで羽を動かし飛ぶ。
「……すごーい。人間みたい！」
「天才ってなんでも出来るのねー」
モモタロスと一夏の寸劇を見て感嘆の声が漏れる。人のように理不尽な怒りの感情を出し、自立した行動を完璧にとるロボット。虚構（フィクション）ではなく実際に目にして目を丸くする教室。
千冬だけは好奇や興味ではなく鋭い視線をモモタロスに向けていた。
「あー……ではＨＲを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でＩＳ模擬戦闘を行う。　解散！」
手を叩き行動を促す千冬。教室で女子が着替えるのもあり別行動をする必要がある一夏は千冬とモモタロスと一緒に教室を出ていった。
「ではこれが本社から送られた契約内容の詳細だ。よく読んどけ」
「了解」
廊下をしばらく進み、人目があまり着かない場所で一つのフランス語で書かれた書類を一夏に千冬が渡す。それはデュノアからの強制に限りなく近い契約書。
渡し終えると千冬はグラウンドへ何もなかったかのように歩み始めた。

『ケッ、全く面倒くせぇことするな』
「本当にな。まさか国連もグルだとは思わなかったよ」
モモタロスが嫌そうに言葉を口にすると同調しながら気だるそうにぼやき書類を職員室に保管しに行く一夏。現実として突きつけられた無理難題をどう対処しようか悩みながら彼は歩いていく。

デュノアから織斑一夏への通告。

デュノア社経営陣の親族であるシャルロット・デュノアが無事卒業するまでの間、護衛すること。
これを拒否した場合、我が社及びＥＵに所属する国はＲｉｄｅｒに関する全ての事業を全面的に契約破棄する。
シャルロット・デュノアの身に何らかの不祥事が起きた場合、制限段階（リミット・フェイズ）後におけるＲｉｄｅｒの機密、もしくは研究所の所在にについて提示せよ。　これが出来ない場合、国連から然るべき処置が行われるのでくれぐれも注意されたし。

―――以上、デュノアからの契約内容要約。

三重奏・乙女達は以心伝心？

「では午前の実習はここまでだ。午後は今日使った訓練機の整備を行うので、各自格納庫で班別に集合すること。専用機持ちは訓練機と自機の両方を見るように。では解散！」

千冬の雄雄しい言葉で午前の合同演習が終わろうとしているが一夏の姿はない。例の契約の正式な手続きをするためである。内容的にはシャルロット・デュノアの三年間護衛というシンプルな内容であるが正式な文書を本人が作成していかなければならないため午前の授業は公欠になった。

そのことで二組の五代講師との訓練を楽しみにしていた生徒の何人かは不満の声を上げたが彼女等はドイツ仕込みの基礎体力作りのためのトレーニングをプレゼントされ泣き笑いしながら午前を終えており、今は幽鬼のように生気のない状態でゆっくり格納庫へ向かっている。

ＩＳをカートに乗せて運び息切れしている生徒達に連絡事項を伝えた二人の教師はそのまま引き上げていく。

生徒達も汗ばんだ体を拭くために格納庫を後にした。

着替え終えた箒、セシリア、鈴はすぐに　屋上へダッシュした。理由は三人とも同じで一つ余分にある弁当箱を持っていることから一緒に昼食を食べるという口実で二人きりになろうとしているのがよく分かる。

「「「あ」」」

そして、屋上へ向かう途中でバッタリと出会った三人。
相手の弁当箱が二つあるのを見つけると嫌な雰囲気が流れた。
「どうしたんですの？　そんなに急いで二人とも」
「セシリアこそどうしたのよ？　屋上になんか用でもあるの…？」
牽制しあう鈴とセシリア。普段は仲の良い友達だが今現在は抜け駆けをしようとしていたので敵意剥きだしである。
そのまま屋上に着くが現状はさらに悪化するのみ。
美しく配置された花弁や石畳に円テーブルがある西洋風の庭園が彼女達の心境を良くすることはなかった。
「わたくしは今朝うっかり沢山料理を作ってしまいましてね。捨てるの勿体無いですから五代さんに食べて頂こうとお昼を朝お誘いしましたの」
「奇遇だな。私も全く同じだ」
「へ～、偶然ってあるのね。あたしもなんだけど」
全員、昼に一夏を誘っていたのだ。せめて一日早ければ二人きりで食べられたのであろうが後悔先立たず。
織斑一夏が珍しく場所を指定してきたのはその為かと今更その考えに気付く。
怒りでＩＳが少し展開しているのはご愛嬌だ。
昼ギリギリまで続きそうだった不毛な争いは屋上への扉を開けたことで唐突に終わりを迎える。
「……どういうことだ」
「ん？」
箒が呆然となって屋上入り口を見る。そこにはシャルロット・デ

ュノアと談笑する織斑一夏の姿。セシリアと鈴もその光景を見て唖然としていた。
ちなみにいつも多くの生徒で賑わう庭園は転校生を見に食堂へほとんどの生徒が行ったためこの場はほぼ貸切になっている。

「天気がいいから屋上で食べるって話だったろう？」
「そうではなくてだな……！」

一夏ではなくその隣にいるシャルロットに視線をやる。目のあったシャルロットは合点がいった表情をして三人の少女に話した。

「ああ、雄介はね。今日から僕のボディーガードになってもらうんだよ」
「ボ、ボディーガードだと？」
「うん。一応僕はデュノアの社長令嬢だからね。身代金や政治的目的で誘拐されそうになったことが何回かあるんだよ。ここＩＳ学園は世界で一番安全な場所でしょ？　本来はただ編入するだけだったんだけどこの前の無人ＩＳの襲撃で神経質になっててね」

箒口令がひかれていても情報というのはいとも簡単に流れるものだ。
ＩＳシェア第三位を誇るデュノアには筒抜けとなっているのも当然といえる。娘を送るので先の事件でデュノアが神経質になっているという表向きの（・・・・）設定に彼女達が疑うことはなかった。

「だから五代さんに護衛の依頼をしたと？」
「デュノアはどちらかというとＲｉｄｅｒ寄りの企業だからね。そちら側の人間に頼んだんだよ。雄介の強さは言うまでもないだろうし」

筋の通った話ではある。
五代雄介の正体が『織斑一夏』であるのを知っている三人にはより信憑性を持たせていた。彼が護衛につけば正しく百人力。デュノアが直々に依頼したのも頷ける。

「オレも常に護衛出来る訳じゃないし。専用機を持つ三人と交流させたかったんだよ」

一夏の思惑をそこで理解する。一夏がいないときでも傍に専用機持ちがいるだけで大分違う。そして、特殊な環境でいた彼女に友達を作る切欠を与えたかったのだろう。
代表候補生二人に、あの天才の実妹。ここにいる専用機持ちはどれも普通とは違う『特別』だから。
鈴は一夏の言葉に微妙に納得してない表情を見せながらもシャルロットに右手を出した。
世の人はこれをツンデレと呼ぶ。

「あたしは凰　鈴音。中国の代表候補生で二組代表よ。宜しくね」
「う、うん。よろしくね！　鈴！」

最初、意味が分からなかったシャルロットも少し顔を赤くして顔を背ける鈴の真意に気付いて手を取った。
続けてセシリア、箒も自己紹介する。

「私は篠ノ之　箒だ。一組代表をしている」
「同じく一組副代表のセシリア・オルコットですわ。イギリスの代表候補生をしていますの。今後ともよろしくお願いします」
「箒もセシリアもこれからよろしくね！」

無愛想だがどこか気恥ずかしげそうに名乗る箒と慣れた手つきで

ブロンドの縦ロールの髪をかきあげながら挨拶するセシリア。
奇麗な笑みを見せて感謝する金髪の少女を見て二人きりになることは出来なかったがこの新しい仲間と出会えて良かったなと三人は思うのであった。

「では、皆で弁当を分けて食べるか。大勢で食べると美味いからな」
「ふふ、そうですわね」
「しょうがないわね。私も出すわよ」

そういって一夏のために作ってきた昼食をテーブルの上に広げる。
重箱に入った卵焼き、から揚げなどの家庭的なおかず、酢豚やエビチリといった中華、バスケットに入ったサンドイッチを持参したのは順に箒、鈴、セシリア。
ちなみにセシリアの料理の腕は哀れにもチェルシー・ブランケットが偶然それを食したことにより多少改善されているので人体に影響はないレベルにまでになっていたりする。
逆に一夏は全く料理をしたことが無いので彼の腕前はかなり悪い。

「うわあ、すごいいっぱいだけどこれ全部食べれるの？」
『大丈夫だ、問題ない』

返事をしたのは奇天烈蝙蝠。いつでもどこでもあなたの傍へ、そんなキャッチフレーズが似合うほど神出鬼没の俗世に浸かりすぎているロボが先ほどまで明らかにいなかったはずだがいつの間にか視界の範囲内で空を飛んでいた。
シャルロットの疑問だがモモタロスの言うとおり問題は無い。一夏がここにある料理の八割を胃の中へ吸収するに決まっているのだから。

「え？　何これ？　喋ってる！？」

唯一この存在を知らなかった鈴だけは驚いているが、他のメンバーは少し疲れた顔をしていた。
あの一瞬出会っただけで倦怠感が凄まじかったのだ。少し前の女の友情が育まれた青春の一コマが急激に色褪せていく。

『ふーん。教えてやろうツンデレ中華娘（チャイニーズガール）。俺は狂気の――――グハッ！？』

「あたしはツンデレじゃないっ！　何なのよコレ！？」

「相手にするな」

「ええ。鈴さん。相手にしない方がいいですわよ」

いきなりツンデレ呼ばわりしてきた失礼な蝙蝠に黄金の左ストレートをクリティカルヒットさせる鈴。本人は気付いていないが顔を真っ赤にして否定していることが若干ツンデレの気があることを自覚している証拠だ。
セシリアと箒は我関せず。サンドイッチとおにぎりを頬張りながら鈴に忠告する。

『効いたぜ…お前のパンチ。きっとお前なら世界を……めざ…せ……る…』

そう行って羽ばたきを弱めて墜落するモモタロス。

「あ…え……？」

鈴は何をしたらいいか全く分からないといった様子だ。
カオスを提供するのに御馴染みのモモタロスの暴走を止める一夏（ストッパー）は動き出す。

「ごめん鈴。これ織斑博士が造った人工知能付きロボットだから」
『あー空気読めねーなー、博士(ドクター)』
（（お前が言うな！！））

すぐ復活して現在進行形で一番空気の読めない発言をしているモモタロスに毒づくメンバー。何故、こんなモノを一夏が造り出してしまったんだろうと本当に疑問に持った箒とセシリア。
鈴もこのやり取りでモモタロスが面倒だと理解する。

「とりあえず邪魔だからどっか行ってくれないかな？」
『べ、別に寂しくてきた訳じゃないんだからねっ！　雄介のことなんてなんとも思っていないんだからっ！』
「や、やっ止めてよー！」

どこぞのバーローの少年が持つ蝶ネクタイ型変声機や黒いサングラスをかけた未来のアンドロイドばりに正確な鈴の声真似をするモモタロス。ツンデレ幼馴染テの代表格ともいうべきテンプレ台詞を喋るがその完成度は恐ろしく高い。
実は織斑一夏ではなくモモタロス自身がキバットバット三世を改造して加えた機能の一つ。悪用しようと思えばいくらでも出来る高性能ＡＩが持つ機能は彼が彼である限りいつまでも平和な使用方法で扱われることだろう。
一方、鈴の心のＨＰ(ライフ)はゼロになりそうだ。自分の声で受けたあまりの羞恥に涙目となっている。
彼女の想いが爆発して殴りこまれた一撃は標的が声を出すこともさせないまま吹き飛ばす。右ストレートを奇麗に喰らい宙を飛ぶモモタロス。そのまま放物線を描き屋上の人間の視界から消失(ロスト)した。

『やーなかんじー！』

下から某悪の組織がやられたときの捨てゼリフが聞こえた。それにしてもこの蝙蝠、ノリノリである。
それを聞いて壊れていないことを確認すると一夏は酢豚を食べ、サンドイッチを丸呑みした。

「あれ、大丈夫なの雄介？」
「ま、大丈夫じゃないかな。あれで結構頑丈に出来てるから」

さすがに壊してしまったかもしれないと少しおろおろしている鈴であったが一夏の一言でほっと胸をなでおろす。
食事を何もなかったかのように再開する一同。
鈴は一心不乱に食べ物に齧り付き自棄食いをする。
五代がいるおかげで僅かな時間の間に既にテーブルに置かれた半分近い食品が消えていた。

「篠ノ之、オルコット食欲無いのか？」

箒はおにぎりをセシリアはサンドイッチをちびちびと食べるだけでから揚げや酢豚といったメインディッシュに箸をつけるのを避けていた。

「！　こ、これは、だな。ええと……そう、新しいダイエット中なのだ！　故に心配ない」
「え、ええ！　最近女子の間で流行ってるんですの！」

今朝は料理の味見で多量にカロリーを摂取し、冷蔵庫にこの日のために練習した失敗作の山があるのであまり昼食を食べたくないのだ。
空腹自体は健在でよく噛むことで脳に満腹であると電気信号を伝達させて誤魔化そうとする。

「中途半端に飯抜くと太っちまうぞ」

二人の腰周りを軽く一瞥して一夏が宣告した。同時に口の動きが止まり、下手くそな出来のブリキ人形のようにキレの悪い首を動かして一夏の方に視線を見やる。

ちなみにこれは事実で習慣にすると飢餓状態であると体が解釈してより脂肪を蓄えやすい体質になる。我慢して断食した結果がそんな風になるのだからダイエットは正しい知識を持って臨まなければ後悔するものになるのだ。

ダイエットしづらくリバウンドしやすいという体は女子にとってはすごく辛いものだろう。

五代が小難しく人体の仕組みについて軽く説明すると普通に食事を摂り始める二人。放課後、よりカロリーを消費するのにいつも以上に苛烈な運動（トレーニング）を執り行うことが見積もれる。

「そういえば、シャルロットさんの部屋割りはやはりドイツの転校生の方と同室なのかしら？」

「あーアレと同じ部屋かー。ご愁傷様」

セシリアがなにげなく質問した。二人揃って編入して同じクラスなのだからそれは確定的だろう。

午前のラウラの様子を知っている鈴も彼女とルームメイトになるといづらいだろうなと思い同情する。

それにシャルロットは申し訳なさそうに答えた。

「……僕、雄介と同室なんだ」

空気がピシリと固まる。三人は立ち上がり一夏に詰め寄る。

「だ、だ、男女が同室するなど不埒だぞっ、五代！」
「そうよ！　だったらブリュンヒルデでもいいじゃない！！」
「五代さん、詳しく説明してくださいまし！！」

同棲、男女が同じ部屋に住むこと。
現代ではルームシェアで異性同士が住むのは珍しくも無いが彼女達にとってはかなり重要な問題である。
シャルロットは美人だ。そこに年頃の男子が一緒に住むのだから取られてしまうかもしれない不安も少女達には少なからずあるのだろう。
一夏はそれにそっけなく返して少女達をさらに怒らせる。
こうして賑やかに昼は過ぎていった。

◇

「じゃあ、改めてよろしくね、織斑博士」
「ああ、こちらこそな。デュノア」

夜、自室で夕食を終えたシャルロットと過ごす一夏。食堂ではこの同棲が学園中に広まり、包囲網を組まれたが箒達専用機持ちの助けを得てなんとか帰還してきたので少し疲労感が出ていた。
インスタントの安いコーヒーを一夏がコップに入れてシャルロッ

トに渡したが口に合わないようだったのでテーブルに置いてあった適当な茶菓子を彼女は食べている。

「彼女達とはいい友達になれそうだよ。本当にありがとう、雄介」

心からの感謝をコーヒーを飲む一夏に頭を下げて示した。

「俺はただ場を提供しただけで感謝するのは筋違いだ」

「優しいんだね」

「護衛をより円滑にするためだ。専用機持ちが近くにいるだけで全く違うからな」

「ふふっ、そっか」

そんな彼女の言葉を否定する一夏。自分は別に感謝されることはしていないと。ただ、打算と合理的判断で行っただけだと。

照れているのだと分析したシャルロットは優しげな笑みで一夏を見つめる。咄嗟にデュノアから言い渡された指令を想起して彼女は物憂げな表情を作ってしまうがコーヒーを喫する一夏に察知される前に顔をすぐに取り繕う。

「シャワーの順番だがデュノアが先で問題ないか？」

「いいよ。なんかゴメンね」

「別に構わないさ」

他愛も無い男女の会話。

日常を彩る青春の一ページを嘘で塗り固められた演技をしている二人の役者。

「そういえば雄介達はいつも放課後ＩＳの訓練しているって聞いたけど、そうなの？」

「ああ。ウチの一組代表のＩＳ稼働時間は他の代表と比べると圧倒的に少ないからな」

少女の方は稚拙な役者であったため自身の仮面が剥がれているのも一夏が全てを知っている役者であることを認識できていない。

彼女は駒。煮ても焼いても何の痛手にもならない使い勝手のいい醜い演出家の操り人形。

織斑一夏を陥れるため、自分達の利益のために仕掛けられたローリスク、ハイリターンの罠の肝。

「僕も加わっていいかな？　せっかく友達になったんだから少しでも力になりたいと思ってるんだけど……」

「そうだな。護衛のついでだ。相手役を頼む」

「うん。任せて」

現実から目を背ける少女はいずれやってくる決断の日に余計己を苦しめるだけだと理解しながらこの甘美な日常がいつまでも続く未来を夢見る。

それを壊してしまうのはシャルロット自身の手によるものだというのに。

今はまだ偽りの友情ごっこからなる安息に彼女は身を委ねるだけ。

レント・歯車は廻る

一人の人間が世界を変えることは出来る。ＩＳを造り現行兵器の衰退、女尊男卑という新たな現実（ルール）に世界を塗り替えた篠ノ之束はそれを如実に示す存在だ。

では、一人の人間が世界を動かすことが出来るか？答えは否。国を動かす大統領や大企業の社長であっても他人という名の膨大な手足、駒があって始めて世界は動かせる。それが無ければ権力には何の意味もない。

個人というのは集団と戦うにはあまりにも無力。打倒するにはこちらも徒党を組むという手段が最善だ。そして織斑一夏には今、膨大な駒が必要である。

理由は勿論、グロンギを殲滅するため。

その駒を動かす鍵となるのは国連。世界で最も強大な軍事力と膨大な人員を持つ組織。

世界各国にランダムに現れる正体不明の機体に怪人。それに対抗するには織斑一夏という個体はあまりにも矮小すぎた。

そのためにＲｉｄｅｒという兵器を大量開発した。人脈を広げそのコネでモンド・グロッソに出場してその有用性を世界に知らしめた。先進国に売り込みＲｉｄｅｒを育成する施設を複数造り上げるまでになった。

全ての下準備を終え、グロンギとクウガがかつて眠り、争った地へ。全てから逃げ出した故郷の土に彼は足を踏み入れた。

ようやく後手に回っていた戦いに先手をうつことが出来る。

無力であった過去の己を、安易な力を求めた愚かな心と決別して

壊れた少年は終わらせるためにやってきた。

思惑通り自身を餌に接触。これからだ、そう思った矢先に起きたのがデュノア社からの通達であった。ＩＳ、Ｒｉｄｅｒという二つのパワードスーツにおいてトップ３内に入るシェアを誇るこの大企業の影響力は凄まじく高い。一国の常任理事国に匹敵するレベルであり、もはや企業と言うより独立した国家といっても差し支えない。

この地位をより磐石とさせるために彼等が得た最も簡単な解はより優れた兵器を発信すること。即ち、織斑一夏という最高の人材を手に入れることを画策していた。

篠ノ之束がターゲットにならなかったのはＩＳという兵器の不透明さが原因である。女性しか使えないという欠点に兵器現存数の固定化。それに比べＲｉｄｅｒは誰にでも使え量産可能であり何よりＩＳという逆風がある中Ｒｉｄｅｒは数あるパワードスーツの一つから見事ＩＳに匹敵する可能性を見出した兵器なのだ。

言うなれば先行投資。どんなものでもそうだ。莫大な富を得られるのは一番最初に目をつけ確保した者だけ。デュノア社はそこに至る可能性が最も高いのがＲｉｄｅｒであると結論を出したのだ。

元よりＩＳに関しては他の先進国に遅れ気味であったこともこれを後押しし、デュノア社は織斑一夏を確保する強引な策を引き出す。

シャルロット・デュノア。彼女を使い篭絡するというハニートラップだ。使い捨てできる血族で容姿も悪くなくＩＳに適正がある。そういう意味では彼女は最高の人材であった。シャルロット本人にはＩＳ学園に潜入して織斑一夏の弱点（ウイークポイント）に為り得る交渉材料を内密に探れ、としか言わないところもミソだ。恋愛でも同情でもして血縁として取り込むことが出来ればいいが上手くいく可能性ほぼゼロだろう。

本命は不祥事を故意に起こさせること。本人を一人にさせた所を適当な人間に金を握らせ襲わせてもいいし護衛を理由に強姦された

と事実を捏造しても構わない。

イチャモンをつけられたらＲｉｄｅｒという事業から撤退するといって脅せばいいだけ。これは暗に軍事バランスを壊して紛争地帯の何処かを焚きつけて戦争ごっこを仕掛けてやるといってるのと同義。デュノアの撤退は世界を揺るがす混乱を招くのは必至だ。

一見馬鹿げた策に見えるが外交や取引も秀でている織斑一夏がそこまで予測出来るだろうということすら考えてのことだ。まだグロンギが滅んでいない今、無用な混乱で長年の計画が頓挫するわけにはいかない。おまけにデュノアの高い発言権は国際的地位の高さ、つまり国連との密接な関係を意味する。下手に刺激すれば経済をパニックに陥れることも戦争すら起こすことも可能だ。仮にも人類を害する怪物を殺すための兵器を造った彼がそれを発端にして世界大戦を引き起こすという結果だけは避けたいという心中は何も言わなくても分かることだろう。

Ｒｉｄｅｒに関する門外不出（アンノウン）の一部でも独占できればＲｉｄｅｒに関してはトップに上り詰めることも可能である。つまりこの策は他社、他国が知り得ないＲｉｄｅｒについての技術を織斑一夏から引き出しデュノアが独占するというものである。

デュノアの一手は正に絶妙であった。デュノアの影響力がこれほど高くなければ、怪物との抗争が始まる直前の今の時期でなければ確実に一蹴されていた。虎穴に入らずんば虎子を得ず。一世一代の社運を賭けた博打を出来レース同然にしたデュノア社の手腕はさすがここまで上り詰めたことがあると言わざるを得ない。

が、唯一にして最大の穴がこの作戦にはある。シャルロット・デュノアが織斑一夏側に寝返った場合。これが起きたら策は見事に破綻する。

ＩＳを軽んじるあまりＩＳ学園についての資料に書かれた特記事項まで策の立案者達は目を通すことは無かった。一人でもその存在

に気付けばこの策の欠陥に気付けた筈なのに。

———特記事項二一、これがシャルロット・デュノアを籠から解き放つ希望の鍵になる。

◆

「午後はやっぱり皆実習するの？」

「やるに決まってますわ！　ですよね。箒さん、鈴さん」

「当たり前じゃない！」

「鍛錬に勤しむのは武芸者として基本中の基本だ」

二人の転校生がやってきてから五日目の今日。午前の理論学習を終え昼食を取るいつものメンバーだったがそこに一人と一匹の姿がない。

言うまでもなく五代雄介、もとい織斑一夏の姿と愛すべき馬鹿モモタロスの姿である。彼は時折この学園からいなくなることがある。当然疑問は出るが千冬からＲｉｄｅｒ関連の仕事でＩＳ学園の人間は関知出来ないと言われれば彼女達は何も言えない。彼女達が介入出来るのはＩＳ学園のルールが適用される狭いフィールド内だけ。

そこから飛び出た彼の行動を縛ることは出来ないのだ。

「今日は雄介もいないしねー」

「ええ。織斑先生も忙しいみたいですから私達だけで練習出来ますわ」

食堂で寂しさと嬉しさがブレンドされた声音で話す二人。その割合は３：７。伸び伸びと実習が出来る喜びの方が思い人と共に過ごす時間より強く渇望していたのだろう。五代雄介と強く関わることが出来ないその他大勢の皆さんは贅沢な！　と思っていたりする。

「雄介って特訓になると怖いよね」

「「「そうだな（ね）（ですわね）」」」

「……息ピッタリだね」

本人がいないことで本音が出やすくなっている三人はシャルロットの言葉に反射的に肯定する言葉をハモらせた。

特にセシリアと箒はうんうんと首を何度も縦に振っている。その様子を見て少し苦笑する発言者。

シャルロットは織斑一夏を篭絡するか弱みになるものを探せという命を受けている。そのため一夏がいない今、彼女達と共にいることで少しでも情報を引き出そうとしなければと己の心に言い訳をして楽しいひと時を過ごす。デュノア社からの重圧を一心に向けられる彼女の精神はあまりにもそれから耐えるにはか細いものだった。妾の娘であっても、ＩＳに適正があっても彼女は普通の社会で生きる一人の少女でしかない。だからこそ黄金よりも尊く価値のあるこの日々は何物にも代えられない幸せに浸かりながらいつか迎えてしまう終わりが訪れることに何よりも恐怖を感じていた。

「もうすぐ学年別トーナメントなのだ。ふざけてる暇はないだろう」

箒の言葉を神妙に受け取る。ここにいる全員は専用機持ち。即ち、無様な成績を残すことは許されない。訓練機持ちは自らをアピールする場だが専用機持ちは己の力を誇示する場なのである

「学年別トーナメントって言えば変な噂が流れてるって知ってる？」

「変な噂、ですか？」

鈴の噂という言葉に何のことか分からないと首を傾げるセシリア。同様に残りの二人も知らない様子で首を振るだけで情報を口に出さない。

「なんか、専用機持ちに対して噂が行き届かないようにしてるみたいなのよね～。そういうの幾つか心当たりあるんじゃない？」

そういえば、と全員がここ最近の出来事を振り返る。専用機持ちの彼女達が来た瞬間、露骨に話題を変えていたクラスメイトや上級生がいたことを記憶の隅から穿り返す。箒は転校初日も『噂』に関する話を一夏に聞かれそうになって慌てていたことを思い出していた。

キーワードは『学年別トーナメント』『噂』『専用機持ち』『五代雄介』

「一体なん――――」

「本当！　学年別トーナメントで優勝したら五代さんと交際出来るって！」

「…成程ね」

一人の顔も知らない少女の言葉で鈴の中で全てが繋がった。『噂』の内容は『学年別トーナメント』で優勝すれば『五代雄介』と交際できるというもの。専用機を持ってる人間がこれを知れば当然強力なライバルになる。僅かでも訓練機持ちが優勝する可能性を上げる為に士気を高めてしまう情報を『専用機持ち』に行かないように操作していたということ。

「……ふふ、どううういうことかしら？」

「私も是非聞きたいなあ？」

「ヒッ！」

情報を漏らしてしまった少女がいた団体にＩＳを展開して詰め寄る専用機持ち達三人。彼女達は後に語る。あの時の彼女達のオーラを前にしたとき、死を覚悟した、と。

「「「な、なんのことか――――」」」

全員白を切ろうとしたとき、弾丸が全身を僅かに掠めた。刀剣を持った鬼神がそこにいた。濃密な殺気が膨大に注ぎ込まれた。

【知ってること全部話せ、殺すぞ】

誰も言葉を発してはいない。幻聴だ。恐怖が生み出した想像だ。だが彼女達の目を見れば素直に洗いざらい話す意志を示さなければ大量虐殺の終末（ラグナロク）が待っている。

そう予感せずにはいられなかった。

「は、発案者は、知らないんです！　いつのまにか、が、学園全体に広がってて…」

「…で？」

「い、一組の代表候補生が優勝したら告白を受諾してくれるようにお願いしたって話からこんな騒ぎに…」

冷気の篭った殺気が女生徒の軍団から殺気を発していた三人の内一人に注がれる。さっきまで恐ろしい殺気を放っていた侍少女は冷や汗が出始めた。これから演習を彼女達は行うのだ。

他の訓練機持ちはとてもいい笑顔をしていた。主にセシリアと鈴が。

「じゃ、アリーナ行こうか♪」

「今回は集団戦をイメージしたものにしましょう♪」

公開リンチは確定事項となった。箒は最後の希望であるシャルロットに藁を掴む思いで視線を向ける。彼女だけが頼りだった。

「……ゴメンね」

思わず走って逃げ出す箒。しかし無常にも右手をセシリアに、左手は鈴に拘束される。ISを展開した二人に拘束された今、彼女に抗う術は残されてはいない。

「い、いやだ…。まだ、しにたくないぃいいいいっ」

絶望の未来へ彼女は引きずられながら向かう。

二人の看守は不気味な笑い声を漏らし公開処刑場(アリーナ)を目指す。

残された食堂の生徒にはそんな彼女の悲鳴がいつまでも耳から離れなかった。

◇

専用機持ちというのは自然に浮いてしまう。だからこそクラスの枠を超えて彼女達は共にアリーナで練習に励む。故に一つの専用機に対して三機が銃弾や砲弾の弾幕を浴びせている光景は決していじめではない。これが原因で人がいなくなっているのではない。稼働時間が極端に少ない彼女の為に心を鬼にして訓練をしているのだ。鈴とセシリアはきっとそう思っているのだろう。

力尽きボロボロになってアリーナの中心で悲哀を叫ぶ少女に全生徒が涙した。彼女はそれでも訓練をするしかない。専用機持ちとは大いなる責任が伴うのだ。

少女にはその事実が分かるはずがなかった。あの時の宣言が誰か見られていたなんて、その会話が原因で地獄行き（ゴー・トゥ・ヘル）への片道切符が握られているなんていうことを知覚出来ることは不可能だった。

少女は思う。

———あのときの私に言ってやりたい。

———迂闊なことをするなと。

———軽率なことをするなと。

———余計なことを口走るなと。

――――もっと会話をするときに注意を払えと。

――――恋のライバルは、専用機持ち以外にもずっと身近にたくさんいて、いつでも一夏（五代）を陥落させようと手ぐすねひいているのだと……！

◇

土曜の午後は生徒達には自由時間として割り当てられているがアリーナが全開放されているためかなりの数の生徒はＩＳ実習を行うために集まっていた。訓練という名の制裁リンチの流れ弾で被害者が続出したのと鈴とセシリアの近寄ったら蒸発して消えてしまいそうな禍々しい妖気を感じて野次馬で来た大勢の人間は他のアリーナで退避していた。

苛烈な制裁（こうげき）から命からがら生還した彼女は魂が抜けていたような状態だったので肉体に戻し無理矢理意識を覚醒させる。

とりあえず戦闘続行不可能になった箒に冷酷無比な攻撃を続けた三人の少女がレクチャーを開始する。

「どうだったかな？　箒」

爽やかに天使のスマイルを放つ金髪の悪魔。篠ノ之箒は知っている。鈴やセシリアに比べれば弾幕はやや弱かったが群を抜いて彼女の射撃が自身に的確に当てていたことを。

「ああ。シャルロットの命中精度の高さには脱帽したよ」

「一応は訓練だし。本当にゴメンね？」

皮肉を言えば申し訳なさそうに頭を下げて謝るシャルロット。その真摯とし想いはよく伝わり罪悪感に駆られるのだが一夏と同じ部屋に住んでいる事実が引っかかり素直に謝れない箒。

有体に言えば嫉妬しているのだ。一夏と同じ部屋で暮らしているこの少女に。

そっけなく彼女が謝罪に対して返事をすると他の二人からのダメ出しに耳を傾ける。

「いいですか。篠ノ之さん。あなたは防御体勢の時に左半身が斜め上後方に下がってしまっています。地上戦ならそれでもいいのですがＩＳの性質上貴女の体勢は稼動出力を０．７３％程の――――」

ＩＳの理論を実践に当てはめたときに箒が間違っている行動を講義するセシリア。残念ながら講義を受けた生徒が理解できたのは口頭の部分だけで後は若干脳筋の節がある彼女には未知の言語に成り果てた。それ以上にセシリアの話は抽象的部分が多過ぎて他の人が聞いても完全に理解して学習するという行為は放棄していただろう。

（要するに体勢が悪いという事だな）

自身の理解力の無さに多少落胆しながらもセシリアの話を勝手に自己完結して放棄は次は鈴に聞く。

「うーん。なんていうの？　感覚よ感覚。小難しいこと考えないで沢山手合わせしてれば身体が反射的に動くようになってくるわよ」
「習うより慣れろ、ということか」
「そうそう。分かってるじゃない箒！」

お互い根本的に通じるなにか（ツンデレ）があるのを本能的に理解しているのか衝突するのも多いが分かりあうことも多い。
分かりやすく教えてくれるシャルロットに戦闘について質問して回答に詰まっていたときも鈴は理解して答えたのだ。
ちなみにこんな内容だ。

『こう、ずばーっとやってから、がきんっ！となったときどうすればいい？』
『……え、えーと。箒、それはどういう状況なのかな？』
『シャルロットでも分からないのか……』
『いや、そうじゃなくて……』
『箒、そういうときはああやって、こうして、がんっ！ってやるのよ』
『成程！　さすがだな！』
『ふふん！　伊達に専用機持ちやってないわよ』
『ううっ～。わけがわからないよ』

双子のような超能力じみた意思疎通を可能とする箒と鈴。結果としては教えるものとしてはシャルロットは優秀であったが鈴の方が箒には向いていた。ということだが専用機持ち三人から彼女が得るものはとても大きかったので別段問題はない。分かりやすいか分かりにくいか。違いとすればそれだけである。

そうして議題は篠ノ之箒の専用機『白式－椿－』の考察に移る。

この機体は数あるＩＳの中でも謎が多すぎるのだ。この機体は後付(イコ)武装(ライザ)が出来ない。この理由は第一形態の段階で単一仕様能力(ワンオフ・アビリティー)が使用可能となっているため拡張領域(パスロット)の空きが全て埋められているため…だと思われていた。

だが違う。調査をした結果、ＩＳ一機に丸々使えるほどの拡張領域が空いているにも関わらず量子変換(インストール)が出来ないように何者かの手によって細工をされていることが判明したのだ。

理由は束のみぞ知る。聞きたくても本人は絶賛行方不明中。結局話は袋小路の不毛なもので終わった。

真面目な訓練をその後再開し、シャルロットから借りた銃での銃撃戦や瞬時加速(イグニッション・ブースト)からのコンボの増設、レクチャーを聞いて軽い組み手をしてアリーナ閉鎖のギリギリまでひたすら演習をしていた。

閉鎖時間が迫り練習を終えた四人は更衣室に向かう。四人の少女が談笑をしながら着替える。着替え終え制服姿になると汗を拭くために用意しておいたタオルがないことに気付いた。

「アリーナにタオルを忘れてたみたいだ。すまないが先に帰っててくれ」

訓練で疲れた皆を待たせるのも悪いと感じ、箒は先にいくように告げた。

「分かりましたわ」

「りょ～か～い」

「…僕、待ってようか？」

「いや、大丈夫だ。先に行って私の分の席をとっといてくれ」

了解の旨をセシリアと鈴から出る。シャルロットが待つように行

ったがすぐ食堂に向かうのでそのように告げると手を振って二人と一緒に帰っていった。

「おい」

落ちていたオレンジのタオルを何事も無く拾い帰ろうとしたとき、アリーナの観客席から声を飛ばす者がいた。もう一人の転校生、眼帯をつけた銀髪の美少女ラウラ・ボーデヴィッヒ。腕を組み、目を伏せていた少女は一言呟くと鋭い眼光で箒を射抜く。

今、この広いアリーナ内には二人だけしかおらず静寂がより緊迫感を強調させる。

「……なんだ」

箒が高圧的な態度で質問してくるクラスメイトに苛立ちを込めながら返事を返す。それを聞きラウラは無言でＩＳを展開してアリーナにいる箒の前に舞い降りた。

黒が基調の装甲は彼女の銀髪をより映えさせ、こんな雰囲気でなければ同姓であっても思わず見惚れていただろう。

「篠ノ之箒。あの男に関して聞きたいことがある。話せ」

一触即発の場で感情の篭っていない高圧的な声音で頼みではなく命令を告げる。あの男というのは間違いなく今この場にいないＩＳ学園に唯一在籍している男で間違いない。

「断る。少なくともそのような態度のお前に話すことはない」

「難しいことではない。こちらの質問に対して適切に答えてくれればそれでいい。まあ、一応手土産もある。織斑一夏について貴様が知りえない情報も前金として渡そう」

箒はラウラの台詞から五代雄介が織斑一夏であることを知っていることを理解した。
だが、篠ノ之箒は織斑一夏が幼い頃いなくなってしまってから連絡すら出来ず、第二回ＩＳ世界大会『モンド・グロッソ』決勝戦に関するニュースで生きていることを知り、会ったのはＩＳ学園に入学してからだ。そんな彼女が知りえる情報などたかが知れている。
そんな織斑一夏と自分の関係性を知っていて何を聞きたいのだろうと純粋に彼女は疑問を持ったしラウラの言う情報も気になった。

「……いいだろう。ただし、そちらから話せ」

答えは了承。後ろから何か言いたそうに皆しているが彼女は知りたかった。自分の知らない織斑一夏を。

「あの男はどういうわけか戸籍を複数持っている。行方を知られず世界を巡れたのはそれが大きいのだろう。残念ながら五代雄介という名しか私の権限では知ることが出来なかった」
「それだけか…？」

落胆。どんなものかと思えばただ戸籍を複数持っているということだけ。偽名のことはもう知っていたので特に知りたいものではない。

「そこで私は五代雄介という人物について調べたのだが…興味深い事実が分かった。五代雄介という戸籍はは実在した故人の戸籍らしくてな。生前、冒険家として世界中を放浪としてたのだが織斑一夏が失踪していた空白の期間に当てはまる時期に……イチカという名の子供と行動を共にしていたそうだ」

これは確かに彼女は知らない。織斑一夏が失踪してからの情報。

「五代雄介が死亡してからの足取りについての詳細は不明だったのだがそのわずか半年という短い期間で様々な国でパイプを作り『モンド・グロッソ』に出場してＲｉｄｅｒを世に広めることになった。資金も人脈もほとんどないに等しい子供だったはずの人間が後ろ盾を作る交渉を成功させることもＩＳに拮抗する力量を持つ兵器を持ち教官と引き分けるまでになったのにはなにか秘密（タネ）があるはずだ。その秘密こそが私が求める『答え』に繋がると思い教官に尋ねても何もおっしゃってくださらなかった。本人に直接問いただそうとしたが何故か避けられているようなのでな。」

「話が長い。何を私から聞きたい」

確かに疑問点はある。年端もいかない少年が何の庇護もなく公的組織を持ってしても僅かな目撃情報しか手に入れられなかった。そもそも数年の歳月で個人が開発したＲｉｄｅｒという精密な兵器を実用化出来るようにしたことさえも不可解だ。

どうやら彼女が知っているのはここまでだったようなので話を切り、本丸について話せと急かした。

「だからこそ貴様に聞く。あの男は生を受けたその瞬間から常識という枠に収まらない天才であったのか。それとも後天的にそのような場所に至ったのか、至ったのならどのような経緯でそこまで上り詰めたのか…それを私は知りたい。」

それこそ少女は知りたかった。別人に変容した織斑一夏の根幹を。誰よりも真実を欲し、だからこそ安易にその答えを本人から告げられるのを恐れた。聞いてしまったら大切ななにかを壊してしまう。

そんな確信めいた予感が警鐘していたから。

「確かに一夏は凡庸だった。剣術に才はあったが千冬さんとは比べようはない差があった。何処にでもいる活発な少年。私の幼馴染はそんな奴だった」

あんなに器用な人間じゃなかったと箒は思いながら搾り取るように言葉を紡ぐ。朴念仁だけど、嘘がつけない頼りがいのある初恋の相手。相手が何を考えているか見通し、人と心の距離を置き、普段から演技をするそんな人間じゃなかった。

そんな葛藤を言葉には出さないが表面化されるがラウラはそんな箒を気にも留めずその答えを機械的に再認する。

「つまり、織斑一夏という人間は教官のような才気はなく、篠ノ之束と同等の暴力的な才覚もない凡庸な人間であったということか？」

「ああ。今の一夏と昔の一夏は別人だ。もう一つ付け加えるならボーデヴィッヒ。一夏からは今のままではお前の答えは多分……得られない」

「どういうことだ？」

「それはお前自身で確かめろ。ボーデヴィッヒ」

彼女が求めているのは強さ。だが強さは境地に至った人間だけが知り得る千差万別、無数にある答え。箒自身も自身が至る答えは知る由もない。しかしながら少女は迷い無く言えることがある。

今のままのラウラ・ボーデヴィッヒでは一夏の強さの根幹を成すであろうす一を理解することはないだろう。

『夢』という純粋で穢れ無き想いを。

「篠ノ之箒、か。覚えておいてやる」

極上の獲物を見つけた狩人の眼で箒のまっすぐな視線を見返すと

ＩＳの展開を解除して出口であるゲートへ去っていく。
太陽は赤く輝き地平線の境目に迫る。少女もタオルを片手にゆっくりとアリーナから退場する。銀髪の少女が残した新たな謎は箒の心にしこりを残した。

ミュージアム・Ｒｉｄｅｒの街

ＩＳ学園以外にも実質的な治外法権となっている土地が日本にもう一つだけある。長野に隣接する県にあった寂れた港町を突貫的に開発し、急速に発展した実験都市。昭和のような懐かしさを思わせる町並みに最新鋭の技術が結集しているアベコベな世界。Ｒｉｄｅｒを養成するための施設が存在する場所。同時に怪人を、怪異を引きずり込む迎撃都市でもある。

つまるところ町興しのための再開発計画に織斑一夏が目を付けたため劇的な変化を遂げたのだ。それが『風都』と呼ばれるこの場所の実態。

土曜日の今日ＩＳ学園で専用機持ち達が苛烈な訓練をしていた同日、そんな顔を持つ街に二人の兄妹がいた。

「来たぜー！　Ｒｉｄｅｒの街！　憧れの『聖地』！」
「恥ずかしいから止めてよバカ兄！」

街の大通りを歩きながら楽しそうにはしゃぐ兄とそれを諌める妹。性は五反田。名を兄が弾、その妹が蘭。目立つ赤毛をした今年高校一年になる少年と受験を控える中学三年の少女は街を見回っていた。最もそれ以上に同じような目的で来た観光客の熱気は凄かったので二人の喧騒は全く目立つことが無かった。

さて、この場所は『聖地』というもう一つの呼び名がある。とある有名特撮作品の原典Ｒｉｄｅｒが集う街はそういったファンにとっては魅力的な街であり連日のように巡礼に来ているのだ。特に四番目の戦士を演じた役者が現役のＲｉｄｅｒであったことからます

ますこの場所を神聖化するファンが急増している。
兄の五反田弾はこの特撮シリーズのファンであり妹は出演する俳優のファンであった。そんな彼等の祖父が持つ知り合いの伝手で今年新設されたＲｉｄｅｒ養成施設へ見学にいけることになり二人は今この場にいるのである。

「痛ッ！　蘭、ソイツは無理な相談だ……あの『風都』に来たんだぜ？　一作目からのファンである俺にとってはパラダイス！　興奮を抑えることなど出来ん！」
「だから街中でいちいち叫ばないでよ！」

兄の頭蓋を粉砕でもするかのようにフルスイングで拳を放つ蘭。凶悪な一撃は弾を名前の通り弾丸のように吹き飛ばした。頭を抑えて、意識が朦朧としながらも妹へのからかいを止めることはしない兄は虚空を指差して一言、魔法の言葉を発する。

「あ、結城　丈二」
「嘘ッ！　あ、あのずっと前から私ファンだったん……あ、あれいない？」
「そんな簡単に有名人に会えるわけ無いだろ～　ＨＡＨＡＨＡ」
「～ッ！　お兄のばかあああああ！」

有名人の名を挙げてすぐ信じてしまう純真な妹を見て心が温まった彼は妹の限界突破の一撃によりしばらく妹をからかって遊ぶのは自重しようと誓いながらアスファルトの大地とキスをした。兄の威厳という欠片ほどもないちっぽけな誇りでなんとか意識を失わず立ち上がると目的地である『天ノ川学園』への歩みを進めると同時に様々な観光名所を風都のシンボルである風車からの風に誘われるように巡る。
一般公開される午後三時まであと六時間。午前九時の出来事であ

った。初めていった遊園地に来た子供のように楽しそうに二人は駆け出していく。

「とりあえずここだよな、風都タワー」

「ふうとくんのストラップお母さん達へのお土産で買おうかな～」

最初に訪れたのはこの街で最も高い建築物である風都タワー。風力発電を目的に建造された塔でありこの街が開発される以前から存在した多くの住人に愛されている象徴。塔の一部は開放されており中にはふうとくんストラップを始めとした様々な地域色溢れたお土産がある売店や展望台がある。

近くにある特撮作品の記念会館やテレビ風都を見ている内に時計の針は十二時を示そうとしていた。

「そろそろ近くの店で昼飯でも食うか？」

「お兄、ちょっと待って。行きたい店があるんだ」

「行きたい店？　美味しいのか？」

「不味い店になんかわざわざ行かないわよ」

「そりゃそうだ」

そう言うと蘭に服の裾を掴まれて風都の中心から離れていく弾。歩いていく距離に比例していくように寂しくなっていく街中。しばらく歩き人の姿も見えなくなった路地裏のような場所に来てようやく足を止めることが出来た。

「着いたわよ、お兄！」

現れたのはお世辞にも奇麗とは言えない外見の古ぼけた和風の店。達筆で天道食堂と書かれた看板を見て弾は古すぎて趣があるように感じてしまい思わず財布の中身を見る。高級料亭であったら彼の青

春はしばらく寒い寒い冬になってしまう危険性があるからだ。

「なあ妹よ。お兄ちゃん、金はそんなにないぞ？」

弾の祖父は蘭を溺愛しているがお金に関しては別である。旅費もお土産を少し買う程度の余裕しかなくうっかり豪遊すれば帰れなくなってしまうためそんな冴えない台詞が出てしまう。

「大丈夫よ。ここは安くて美味しくて愛がある素晴らしい食堂だから」

そんな自信たっぷりな蘭の言葉を聞き、意を決して店内に入っていく弾。

数十分後。笑顔の蘭と泣き崩れた弾が店の外に出てきた。

「俺、忘れないよ。おばあちゃんの言葉…」

「美味しかったな～」

天道食堂。ある名物おばあちゃんが店を切り盛りする隠れた名店。この店を訪れた人間は大切な何かを思い出して帰って行く。そして素晴らしい言葉を客に残していく。「おばあちゃんがいっていた…」そんな風にここの思い出を来た人間は語るのである。

そんな人生の教訓を刻み込んだ一行は最後にある企業へ向かった。

「おおーっ！　俺もあれくらい有名なＲｉｄｅｒ関連の企業で働きてーなー」

「お兄の頭じゃ無理よ」

「…そうだなー」

Ｒｉｄｅｒ関連の大企業の支社を見て感嘆して妹に現実を突き立

てられ落ち込む弾。哀愁を漂わせながら携帯で写メを撮りその場を立ち去る。その時、バイクに跨り『スマートブレイン社』に入っていく青年と一瞬交錯する。数秒、もしこの人物を注視していたら二人はヘルメットから僅かに見えたその瞳からとある有名人によく似ていたのが分かっただろう。残念ながらそれに気付くことは無く目的地の養成施設へ二人は向かう。

◆

「久しぶり、ゴローさん」

「……その名前で呼ばれるのは久々ですよ。もう貴方位しか私の名前を知る人はいないんでしょうね、博士」

応接間を開けて旧知の仲のように話しかけたのは織斑一夏。彼は今日、風都に来ていた。目の前にいる人物に会いにきたのが目的ではない。両者は一言で表現できない複雑な経緯があったりする年齢を超えた友人であるのだがそれは今は関係なくただの業務連絡をするだけ。

一重の細い眼差しをした胡散臭い笑みを浮かべる長身のゴローと呼ばれた青年は少なくとも一夏と出会わなければこんな上等な場所で穏やかに会話するような人間ではなかったことは確かだ。

「昔話もいいんだけどさ、今回は用事が用事だから省かせてもらう。こちらから話しかけておいてすまないんだが」
「ええ。構いません」

そう言って部屋の中央にいる赤い皮のソファーに座るように青年は促す。隅に置いてあるサイフォン式のコーヒーメーカーから香ばしい液体が注がれていたティーカップを慣れた手つきで取り出して一夏に渡す。
品種はブルーマウンテンでありその中でも特Ａランクの最高級品である。一口、珈琲を飲むと本題を一夏が切り出した。

「……例の装置は？」
「使用者を七人、未使用品もなんとか確保しました」

あるＵＳＢメモリを厳重に保管された金庫から丁寧に取り出して机の上に置いた。
それは一人の天才が造り出した地球という概念を具現化させた結晶。

「……確かにガイアメモリだ。これは彼が以前造っていたもの流出品で合っているか？」
「いえ、以前のものとは全く違う構造で出来ているとのことです」
「量産前の試作品を一般人に使わせて性能の最終確認といった所か……早期に元を潰さなければ面倒な事態になるな」

ガイアメモリ。織斑一夏でも篠ノ之束でもない知られざる天才が造り出した装置。後期Ｒｉｄｅｒ　Ｓｅｒｉｅｓにも組み込まれている兵器。
同時に強大な力を誰もが手軽に簡単に振るえてしまう凶器。並大抵の使用者はその力に簡単に溺れ、麻薬のような中毒性に憑かれ暴

虐の限りを尽くしてしまう。
元々はある組織が全く別の目的で運用しようとしていた使い方を誤れば命すら危うい危険な代物。しかし、高いリスクには見返りとなる相応の力が手に入る。
よってガイアメモリを用いたＲｉｄｅｒが存在している。その内の二人はこの風都に新世代のＲｉｄｅｒとして、いた。

「これが風都でしか流通していないというのは？」
「事実です。ブローカーから得た証言ですので信憑性は高いかと」
事前に与えられた情報を一つ一つ確認していく一夏。それに淡々と青年は答えていく。その様は主君に忠実な執事を彷彿とさせる。実際、彼は織斑一夏に関する事務全般を処理する秘書に近い存在でもある。

「おやっさんは？」
「相変わらず街中をパトロールしていますよ。仕事熱心な方ですからね」
「もう一人は……聞くまでもないか」
「そういう性分の人ですから」

仕事熱心な所長に苦笑し、仕事中毒の青年に呆れ顔を顰めさせる一夏。そんな様子を見てにこやかに笑う青年。
そんな中、部屋に置かれた内部回線の電話からコール音が鳴る。四度目のコールが始まったとき青年が手に持ち音が止んだ。

「――――」
「ええ。そうですか。分かりました」

ガチャリと一昔前の電話機のようなレトロな音と共に青年と見え

ない相手との会話が終わる。静かに一夏に向き直り告げた。

「彼が到着したそうです」

「分かった。じゃ、失礼するよゴローさん、いや乾巧さん」

「貴方の名前の一つであったこの役を精一杯演じさせてもらいますよ。このスマートブレイン社、日本支社の経営者という役をね」

風都に今年起業したＲｉｄｅｒシェア第一位の企業『スマートブレイン社』の日本支社がＲｉｄｅｒ養成施設がある土地と同じ場所に今年置かれた。Ｒｉｄｅｒに関して現時点で日本のトップクラスを誇るこの会社は海外で居住していた若き日本人が社長に就任したことで業界で話題となっていた。小さな話題だったがある事実を知るものには衝撃的な出来事である。

乾巧という名を男が持っていたこと。その名を織斑一夏から譲り受けたこと。問題はそれではない。その事実は――――

「……ありがとう。それじゃあ用事を済ませ次第戻るよ、ＩＳ学園に」

――――この世界の根幹を揺るがす。

乾巧に背を向けながら片手を振り部屋から出て行く一夏。その後ろ姿は力強いものだったが今にも消え入りそうな弱弱しい光を放っているようように乾には見えた。

世界の全てを一人の人間が知りえることは無い。彼が知っている真実は極僅かの事象のみ。それでも彼が知る真実はとびっきり残酷で不幸な形であった。

◆

天ノ川学園。Ｒｉｄｅｒを養成するために建設された施設。既に米国、欧州、アジア合わせて四ヵ所に存在しており入学試験の倍率は何処も最低一万倍以上はあり、そこに入ることが出来るのはエリート中のエリートだけである。今回五校目の建設となるのだが当然今、見学をしている五反田弾も受験をしたのだが落ちた。募集人数は三百。受験者総数は六百万人強。倍率は約二万でありただの中学生でしかない彼が落ちるのは当然であった。

施設は全寮制であり、基本生徒は風都の外に出ることを許されない。講義や実践演習も常識の範囲外であり、ここから輩出される人材は様々な分野の職から歓迎されるため単にＲｉｄｅｒになるためだけに入ってきた人間が全てというわけではない。それでも大半の人間はＲｉｄｅｒになるかそれに関連した職に就く。

教育ではなく、軍事的内容を主にしているこの天ノ川学園は通常の教育機関とは異なる場所であるため一般人は入ることを許されない場所となっている。

しかしながら例外もあり年に数度だけ、一般の見学が人数制限がされているが可能となっている。閉鎖的場所である為、そのように一般に定期的に開放することで学園のイメージが悪化するのを防ぐのが主な理由だ。ちなみに天ノ川学園の見学許可証はネットで転売すれば百万近い値が瞬く間につく。

そんな幸運のチケットを運よく手に入れた二人は校内の案内を学園の生徒から受けていた。

「では、こちらがアリーナです」

学園内の授業風景や寮見学を終えた所で闘技用アリーナに案内される。見学席には他に案内を受けていた見学者がちらほら同じようにおり食い入るような目でアリーナを見ていた。そこにあるのはＲｉｄｅｒであった。何十ものＲｉｄｅｒブランクが戦いあう光景があった。訓練とはいえ生で行われる戦闘に弾が興奮したのは言うまでもない。そんな兄を冷ややかな目をして見ていた蘭だったがアリーナを見てあることに気付く。

「すいません。あの奥にいるＲｉｄｅｒって他のと大分形が違いませんか？」

そう指差した所にいたのは二人のＲｉｄｅｒ。中世の西洋甲冑のような姿をした黒騎士と赤いラインを全身に奔らせた機械的なフォルムの巨大な金の瞳をした戦士。奥で戦闘をすることなく他のＲｉｄｅｒ達を見て二人で話しているように見える。それを見て忘れていたことを思い出した顔をして返事をした。

「ああ…この学園には定期的に特別仕様のＲｉｄｅｒが来るんですよ」

「特別仕様？」

「ええ。ある一定のレベルになるとＩＳでいう専用機持ちのような固有機体が個人に与えられるんですがあそこにいる二人がその実例なんです」

「へー。どのくらい強いんですか？」

「そうですね…戦いようによってはＩＳ相手にも勝利出来る程度と

いうくらいの強さらしいです」
「すご……」
ＩＳという規格外はほぼ全人類が認知している。それと同等の戦闘力を誇るというのは驚愕に十分値する事柄だ。
「うおおおお！　ヤベー！」
弾の方は身を乗り出しアリーナに夢中になっており話などは全く聞いてなどいないが妹の蘭はそんな子供のような兄を空気のように無視して案内係の生徒と話を続ける。
「まあ。実際見てみるのが早いでしょうね」
「え？」
そういうとブザーが場内に鳴り響き戦闘をしていたＲｉｄｅｒ達が一斉に動きを止めた。全員の動きが止まるとアナウンスが流れる。
『これより特別訓練を開始します。訓練内容はスマートブレイン社より派遣されたＲｉｄｅｒとの戦闘です。時間制限はなし。生徒の皆さんが試合続行不能になるか派遣されたＲｉｄｅｒを戦闘不能になればそこで本日の訓練は終了です』
低い男性の声をしたアナウンスが指示をする。
『カウントが始まります。ゼロになった瞬間、戦闘を開始してください』
そういうとアリーナの電子掲示板に巨大な数字が映しだされた。

【3】

その数字が出た瞬間、スマートブレイン社から派遣されたＲｉｄｅｒの一人がアリーナの中心に歩き出す。もう片方がゆっくり闘技場から離れていくことを見ると今回の戦闘は一人で行うようだ。その様子にブランクたちは何も指示をされていないにも関わらず道を自ら空けていく。

【2】

次々と武器を呼び出し構えるブランク達を異に介することなく黒騎士は堂々と歩いていく。

【1】

静寂。誰も動くことなくただ足音が聞こえるだけ。圧倒的弱者である彼等はただ時を待つ。強者である人間は敵が来るのを待つだけ。

【0】

宴の始めを知らせるブザーは戦いという銘柄の美酒を解禁した。白い群れが中心へ歩む黒騎士へ襲い掛かる。一人で勝てぬなら二人

で。二人で勝てぬなら五人で。それでも勝てぬなら全員で。最も簡単に得られる強さとは徒党を組むこと。それは真理。制限段階（リミット・フェイズ）という壁を越えた人間が化物であると彼等は既に知っているからである。
慢心も油断も無く彼等は化物共に挑む。

「おぉおおおおおおっ！」

彼等の渾身の一撃がなんなく避けられていく。長年鍛えていた生粋の武術の申し子の体術が捌かれる。仲間を巻き添えにした銃弾の雨が効かない。答えは簡単。圧倒的に経験が足らないからだ。命懸けの闘争を行ったことがないからだ。他者の命を奪ったことなど無いからだ。
いくら強力な一撃でも教科書どおりの振りでは役に立たない。対人間用の武術が人外に通用するはずが無い。

≪ＴＲＩＣＫ　ＶＥＮＴ≫
「が…あああああああ！」

バイザーにカードを差し込み起きたのは実体を持った分身。一人であるという固定概念から怯んだ人間の意識を容赦なく刈り取っていく。
才能は努力をあざ笑う。才能を超えるのは拷問に等しい修練を積んでも無理かもしれない厚く高い壁。ここにいるのはどれも凡人より確実に優れた人間だ。才はある。ただ、足りないだけ。相対する相手との差を埋め合わす何かが。
それを理解することなく一人、また一人と脱落していく。

「ッ…ハッ、ハア」

開始から十五分。圧倒的な数を誇った白の見習い戦士達はその数を三分の一以下には減らしていた。たった一人の人間を相手にこの結果は制限段階を超えたものとの技量の差、機体の性能の差、何より才覚の差を明確に示すものであった。

だが、十五分耐えることが出来た彼等にも充分な才覚はある。耐え切らなかった人間にもだ。これはその才覚を伸ばすための荒療治。いわば試練。そうやって新たな制限段階という壁を越える人間が芽吹いていく。

『本日の訓練は終了です。アリーナから全員退出して下さい』

二十三分。最後の一人が全力で振るった一太刀は真っ向から受け止められそこで力尽きて倒れた。黒い騎士のＲｉｄｅｒはその姿を一瞥すると変身を解くことなくアリーナから退出していった。

観客席からこの光景を見ていた見学者達の反応は多種多様であり口を開けて呆然とする者や生のＲｉｄｅｒ同士の戦闘に興奮するもの。いずれもＲｉｄｅｒに対して好意的なものであったがただ一人だけ異質な感情を持っていた者がいた。

「……お兄？」

観客席から身を乗り出したままいつまでも動かない弾を見て気になった蘭が話しかけるが無言。ただ硬直して俯いている。

「聞いてるの！？」

「うおっ！　……スマンスマン。ちょっと興奮しちゃって」

「全く…」

飽きれたように能天気に笑う弾を見る蘭。兄の特撮好きも困ったもんだと心中で思いながら案内係に連れられアリーナを後にする。

そうして天ノ川学園の見学も終わり、二人の兄妹の風都観光もとうとう残り少なくなった。

彼女は気付かなかった。彼が試合を観戦している中、爪痕がくっきり残るほど強く拳を握り締めていたことを。圧倒的な強さを持って立ち去っていく男を見て悔しそうに表情を歪めていたことを。自分があそこで戦えない事実に苛立っていたことを。

五反田弾。彼は架空ではなく現実の存在『Ｒｉｄｅｒ』に憧れていた。そして、彼の願いは叶う。この後に起きる事件との遭遇によって一人の少年の物語（ストーリー）がもうすぐこじ開けられようとしていた。

「楽しかったね、風都」
「……ああ、そうだなー」
「有名人には会えなかったけどねー」
「……いくらこの街でも、簡単には会えないさ」
「……」
「……」

楽しい日帰りの観光に来ていたはずの二人は夕闇に包まれた風都の街並みをぎこちない会話をしながら気まずい雰囲気で帰路を辿る。どこか上の空になった弾と懸命に先ほどから意思疎通を行おうとしている蘭であったがこのように何度も途中で会話が頓挫されてしまっていた。

無言の中彼女は風都での行動を振り返る。うざったいくらいハイテンションであった兄、弾がこのような状態になった原因を。

彼等二人は世間一般から見れば非常に仲の良い兄妹だ。しかし、血の繋がった二人であってもお互いが何を思い行動しているか分かるわけではない。むしろ、近すぎる距離が視界を狭め曇らせていくものだ。五反田蘭が五反田弾の心情を解くための未知の公式を彼女は懸命に探すがそれを見つけることは叶わなかった。

一方、五反田弾はどうしようもない感情を持て余していた。この場に来れた幸せではない。苛立ち、後悔といった負の感情でもない。硝子のように透明で伽藍堂のように空虚な純情な想いを再認しているだけ。

かつて液晶の向こう側で見た世界最強と引き分けた黒い外装と赤

い眼をした戦士。多くの男を惹きつけた希望に五反田弾という少年もまた憧れていた。そして衝撃を覚えた。あの場にいたのが己と歳の変わらない少年であった事実に。それから五反田弾は変わった。録にしていなかった勉強をがむしゃらに励み、Ｒｉｄｅｒに関する情報をかき集めた。たまたま見つけたＲｉｄｅｒを題材にした特撮作品を隠れ蓑にして家族にも知られぬようＲｉｄｅｒという存在を求めた。自分自身の熱意が冷めぬように誰にもこの想いを彼自身が知らせることはなかった。家族や幼馴染の少女にも。

海外のＲｉｄｅｒ養成施設に進学をしようと決めていた彼は日本にＲｉｄｅｒ養成施設が設置されるという情報を手にしたとき運命を感じた。周りには軽い気持ちで受けると告げ、より勉学に没頭するようになった。それでも彼に待っていたのは非常な通達であった。当たり前のことであったのだ。たかだか数年努力した凡人が分厚い門の先に広がる光景を見ることなどおこがましい。彼が隠れ蓑にした特撮オタクという顔は心地よく彼の熱意を冷ましていく。いつの日か故郷へ帰った幼馴染がＩＳの専用機持ちになった知らせもよりそれを助長させ、五反田弾が抱いた夢と熱意は誰にも知られることなく消えていく筈だった。

切欠は幼馴染との再会であった。久々に見た男勝りの勝気で素直じゃない少女は弾の贔屓目ではなく奇麗になっていた。月日がこれ程人を変えるのかと弾はながらも蘭と共に驚き昔話を交えながらお互いの近況を話し込んだ。怠情で退屈な日々を過ごす彼と対照的に充実な毎日を過ごす彼女。それは挫折をした弾にとって眩しすぎた。僅かな辛さと痛みを心に感じながら話を進めると幼馴染の少女が楽しそうに乙女の顔をして語る一人の男の話が奥底に眠っていた色褪せていた夢と再び向き合うことになる。

本来ならこの風都に彼は来ようともしなかったであろう。しかし、彼の中にあった未練と後悔が背中を押し訪れることになった。無駄に空元気に振る舞っていたがＲｉｄｅｒを直視してもう目を背ける

ことが彼には出来なかった。圧倒的な強さを見せる覇者（チャンピオン）に、それに挑む挑戦者（チャレンジャー）にすらなれずここで傍観することしか出来ない自分が歯痒くたまらなく惨めであった。その悔しさが彼に夢を思い出させた。

Ｒｉｄｅｒになりたいという渇望を。

「この街に来れてよかった……」

今まで能動的に受け答えしていた弾は足を止め、風都タワーを見上げながら誰に言うまでも無く呟いた。夕日に照らされた黄金色の塔に真っ直ぐな瞳で視界に捉える。

「オレはっ、Ｒｉｄｅｒにぃ…なる！　絶対にだ！！」

深呼吸して限界まで空気を肺に溜め込み叫ぶ。今まで誰にも見せることの無かった夢を高らかにＲｉｄｅｒの街風都で雄たけびのような声音で誓った。

これでもう五反田弾は二度と逃げることも出来ず逃げ出すことは許されない。

「……だから街中で騒がないでよ」

「ハハッ悪いな蘭」

険悪でもぎこちなくもない自然体になったただの兄妹がいた。鼻をさすり、憑き物が落ちたような笑みを浮かべ笑う兄と子供のような兄を見る妹。

「だいたい天ノ川落ちたお兄がＲｉｄｅｒになるなんて無謀よ」

「なーに、わざわざ学園に通わなくたってＲｉｄｅｒになる道なんていくらでも見つかるって」

そう、他にもいくつかの道は確かに存在する。しかしこのＲｉｄｅｒ養成施設に入ることが最もハードルの低い壁であったのもまた事実。彼が歩むのはより困難な道であり報われることがないかもしれない努力をし続けなければいけない苦行。

「……そっか」

「おう！」

（全く心配ばっかさせるんだから……馬鹿兄）

すっかり元に戻った兄の姿を見て心で悪態をつく蘭であったが表情は綻んでいた。少年が胸中何を想っていたのか少女が知る術は無いが弾が抱えていたわだかまりと決着をつけたことは明白であった。だから少女が直接尋ねることは無い。

Ｒｉｄｅｒの街で過ごした非日常から少し騒がしい日常へ戻ろうとしたとき異変は起きた。

轟音、数秒遅れた後悲鳴が耳を劈く。二人の心は警鐘を鳴らす。あの声がする何か良くないことが起きた場所へ向かっては行けない、と。

「な、何？　事故？」

「……」

少女は困惑する。少年は目を細めただ静かに声がする方角を見据える。

「…少し様子を見てくるから待っててくれ」

「わ、私も行くっ」

「駄目だ」

「な、なんで…」

「ここで大人しくしてろ、いいな蘭」

「ちょっと、お兄っ！」

そう妹に言い捨てて走り出す。

弾は恐らく交通事故の類ではないと推測した。今も絶え間なく聞こえる悲鳴、まるで怪獣が暴れているような物が破壊音や金属音がするのは明らかに異常事態。

希望的観測ならただの事故。最悪の想定はＲｉｄｅｒを狙う、もしは反感を持つ人間達によるテロ。走り続けながら徐々に距離を詰めていくと逃げ出す人々が目に付いた。怯えの入った目で一心不乱でことの震源地から離れようとしていた。ここでただの事故であるという可能性は限りなくゼロになった。

「何があったんですか！？」

「邪魔だ！　退け糞餓鬼っ！」

この街に同じように観光に来たのであろう観光地のお土産を持った若い男の肩に手をかけ話しかけるがすぐその手は振り払われ罵声と唾を浴びせられる。他にも何人か声をかけるが無視をするか同じように罵詈雑言で罵られるだけであった。

仕方なく人々が逃げ出すなにかがある中心地に向かう。中心に向かうほど人の流れは大きくなるが様々な声を聞き現場について推測できるワードを掴むことが出来た。

「化物…？」

人々はどうやら兵器でも武装集団でもなく『化物』から逃げていることが分かった。しかし弾には分からない。その化物と呼ばれた何かから何故あんな必死に逃げているのかを。その答えは人が全くいないあの轟音が聞こえた場所であろうところに到着したことで判明し、絶句する。

「なんだ…これ……」

そこにはＲｉｄｅｒブランクが数人がかりで異形に立ち向かう姿があった。そう、まるで創作（フィクション）の中から飛び出たような現実（ファンタジー）がそこにあった。五反田弾は本能的に恐怖を異形の化物に抱く。そして、納得した。こんなものと相対すれば裸足になってでも逃げ出したくなる。

「くっ……全然効果がねぇ。メモリブレイクどころか攻撃そのものが効いてないっ！」

手に持ったシンプルなフォルムをしたロングソードで斬りかかりながら一人が声を荒げる。その太刀はたやすく避けられ空高く異形の化物は跳躍した。彼が逃避した特撮作品の変身ヒーローに酷似しているバッタを擬人化させたような姿。褪せた緑のマフラーをつけた茶色の肌をした化物はブランク達を翻弄していく。

「ゾンデギゾバ、ヅラサン」

意味の分からない言葉を大地に降り立った化物が呟く。それには落胆の響きがあり事実そうなのだろう。文字通り手も足も彼らには出なかった。見るからに疲弊したブランクを見て気だるそうに構えを解いた。

「ギンゼギベ　クウガ　グ　ジョグギギダ　ヅブサセギ　リントン　ゲンギ」

否、それは処刑人の執行猶予の終了の合図。一人に掴みかかるとより初回よりも高く跳び上がった化物。その高さを換算すると二十

メートル強。掴みあげられた戦士は抵抗を試みるが逃げ出すことは不可能。

「ギベ」

「くっ、そおおおおおおおおおおおおおおぉぉぉぉっ」

ゴミのように地面に向け掴んだ戦士を投げ捨て、その軌道をなぞる様に堕ちていく化物。いくらパワードスーツとはいえＲｉｄｅｒにはＩＳのような絶対防御のような補助装置はなく、その身を守るのは外殻の鎧のみ。Ｒｉｄｅｒの中でもあらゆる点で最低ラインの規格。空中で静止しようとすれば化物に押し潰され、このまま墜落してもやはりただでは済まない。

どちらをとっても戦線離脱という道を回避できない彼が下した決断は迎撃。今いる彼らの防衛戦を、応援のＲｉｄｅｒによる殲滅戦に少しでも役立つよう彼は自己犠牲を伴う迎撃で化物に一矢報いようとした。

「ゴラゲダヂゾ　バレデギダボドパ　パヂジョグ」

左肩を刃で貫かれた化物がゆっくりと残った二人へと歩む。落下の到達点に着く直前、咄嗟にロングソードを出し衝撃の時に起きたエネルギーを利用してノーダメージであった化物の左肩を貫くことに成功していた。着地点には墜落の際の衝撃で変形したアスファルトの地面に最後の攻撃の代償としてＲｉｄｅｒ　Ｓｅｒｉｅｓが破壊されて粒子化して消えていく光景が見え、完全に粒子化現象が終わると天ノ川学園の青い制服が見えぐったりとした様子の少年の姿が現れた。かろうじて息をしているが今この場放置していてはいつ殺されるか分からない。

残された二人はそれが分かってるからこそより苛烈に果敢に勝てるはずの無い化物に挑む。この街の人間を護る為。決死の覚悟で一

矢報いた仲間の意志を無駄にしない為。三人の未熟な戦士の有り様は愚かだ。それでも正義（ヒーロー）の味方と呼ぶに相応しい在り様に違いないものであった。

「…が……っ……」

倒れ、動けなくなった人間が一人から三人に増え、状況は最悪。場を支配しているのは生理的嫌悪感を抱かせる化物。

これは起きているのは子供向け番組の一幕ではない。だから主人公なんて存在はいないし悪が打ち倒されハッピーエンドが必ずやってくるご都合主義もない。非力な戦士達が何処の何かも知れない化物に今その人生を閉じられそうになっている絶望的な光景を誰かが助けてくれるとは限らないのだ。

弾はその一部始終を見て逃げ出すことも乱入することもせずただ物陰でじっとしていることしか出来なかった。臆病風に吹かれて逃げ出すことを恥じたのか恐怖で足が竦んでうごけなかっただけなのか彼自身にも分からない。

「ゴラゲン　ギボヂゾ　ロサグ」

「あ、が――――――」

一人の頭をおもむろに掴み片手で持ち上げる。指一本彼に動かす気力はなく、静まった瓦礫が散開する街の片隅で頭蓋の骨が軋む嫌な音がよく響いていく。そのまま握り潰してしまいそうな勢いであったが化物は足を屈める。跳び上がり墜落死させる算段であることに気がつき弾は思わず叫ぶ。

「止めろっ！」

その言葉のおかげか化物は弾に注意を向け掴んだ手を離した。当

然、彼には対抗手段も策もない。無鉄砲の特攻でしかない。出来るのは時間を稼ぐことだけ。幸いここはＲｉｄｅｒの街。応援は絶対に来るのは確かである。

（学園で見たあれなら…！）

浮かぶのは圧倒的強さを見せた黒騎士のＲｉｄｅｒ。特別仕様であり数多のＲｉｄｅｒを倒しＩＳと互角の戦闘能力を持つ彼が到着すればこの化物と伯仲するであろう。唯一の希望に縋り震える膝を抱え野球ボールと変わらない大きさをした瓦礫を投げつけた。

「ギビダギボバ　リント　…！」

「バーカ、バーカ！　死ねバッタ怪人もどき！」

それまで気を引き続けることが弾の勝利条件。簡単に投擲した瓦礫は避けられたが挑発には成功した。証拠に濃密な殺気が肌にねっとりと纏わりつくのを弾は感じていた。

死、死、死。イメージがくっきりと彼の脳内に浮かぶ。空から落ちて水風船のようにバラバラに散った血肉の欠片になって死んだ自分。首の骨がボキリと折られる自分。吹き飛ばされ派手に脳髄を撒き散らす自分。羽虫のように手足を千切られ苦痛の中発狂する自分。無限に湧いて出る死の可能性が弾の内部を埋め尽くしていく。

「は、ははっ。あはははははは」

死が後ろから迫っている。今の彼は恐怖で心を支配され恐怖を感じないよう精神が拒絶して恐怖を感じられないトランス状態。正気ではない。こんな状態にならなければただの人間である平凡な日常しか知らない一般人五反田弾は耐えられなかった。

右足を前に出して左足を出す。一歩進めば以前の一歩よりより早

く片方の足を前に置く。心臓が高鳴る。鼓動が過去聞いたことの無い音量で体を媒体にして体内から聞こえてきていた。

「こっちだ、こっち」

そう後ろを向いて手を叩きゆっくり歩いて近づく化物を囃し立てる。楽しげに自殺志願者のような振る舞いを自然に行う。建物と建物の間をくぐりある方向へ進んでいく弾。

（スマートブレイン社と天ノ川学園が近くにあるはずだ…！）

一筋の希望が理性を呼び起こし正気を取り戻していく。無力な自分が他者を救える。ヒーローになれる。そう弾が思い始めた瞬間、命懸けの追いかけっこは唐突に終わった。

「へ？」

足が急に力を失くし崩れ落ちた弾。呼吸が異常に荒れ言葉を発することすら困難な状態に陥った。原因はスタミナ切れ。極度の緊張状態での長距離移動は想像以上の体力を弾から奪っていた。

（な、なんで…）

しかし弾には理解出来ない。疲労が脳内麻薬の分泌により誤魔化されていて今、臨界点を越えたことを。足が痙攣し、過呼吸になり無様に這い蹲っていながら彼はもがいた。

終われないのだ。夢を再び目指すと志したばかりだというのに死ぬ訳にはいかなかった。

（嫌だ、オレはなるって決めたんだ）

怪物の足音が聞こえる度に誰かの顔が走馬灯のように鮮明に描かれる。両親の顔が浮かんだ。同級生の顔が浮かんだ。幼馴染の顔が浮かんだ。取り残した妹の顔が浮かんだ。世界最強と戦うＲｉｄｅｒの映像が、浮かんだ。

―――お前、このままじゃ死ぬぜ？
「ああ、そうだなー」

呼吸が整い、思考がクリアとなっていくのを弾は感じていた。心が死んでしまう事実を受け入れてしまったのか今の彼は絶望も未練も感じなかった。

―――なんだ諦めちったのか？
「まさか、生きたいに決まってるだろ」

そう、まず生きる。生きていればＲｉｄｅｒになるチャンスなどいくらでもあるが死んでしまえばそこでおしまいだ。分かっているからこそ正直な感想を述べる。

―――そいつは良かった。助かりたいか？
「当たり前だ」

ふざけた問いに当然イエスと弾は答えた。

――――オーケィ。なら悪魔と相乗りする勇気、あるか？

「悪魔？　オレはなあＲｉｄｅｒになるまで死なねえって決めたばっかなんだよおおおおおおおお」

その欲望を口にする。願いとは、夢とは結局は人の内から湧く欲求。剥き出しの欲望は願いを叶える呪文となった。

『それじゃあ、変身させてやるよ。…キバっていくぜ！』

その言葉と右手の痛みと共に『仮面ライダー』という存在に為り得る器がまた一人世界に誕生した。

短剣符・ようこそ、そしてさよなら

――石ノ森　章太郎とは、一九三八年日本で生まれた偉大な萬画家である。その作品数は漫画家史上最多の出版記録を誇り代表作として『サイボーグ００９』、『人造人間キカイダー』、現代においては今も尚シリーズ化されている特撮作品『仮面ライダー』の原作者として知られている。

『ガブッ！』
「痛ぇ！」

急に右手を尖った何かで刺された痛みに襲われた弾はそのまま腹ばいの体勢から叫びと共に半回転して仰向けになった。右手には鉄の塊でも身につけたような重さがあり弾に見えたのは赤い眼の蝙蝠のような存在の姿。それに呆然とする暇もなく、腰の辺りから妙な怪音波をイメージさせるメロディが聞こえながら鎖が現れベルトへと変化していた。

『何、死ぬよりはマシだろ？』
「は？　何だよ、おま――」
『悪いがお喋りしてる暇はねぇ！　行くぜ行くぜ行くぜぇ！　――変身！』
「頼むから状況確認くらいさせろよっ！」

弾のツッコミが蝙蝠もどきに届くことはなく宙を飛び回る姿を彼は目にする。その間、彼の腰に出現した血の様に赤いベルトの中央の空洞部分に蝙蝠もどきが欠けたパズルのピースのように奇麗に嵌ると弾の全身を流動的な銀細工のような金属の殻が包んでいく。ベルトに嵌めこまれた最後の欠片が持つ赤い両目が一際輝くと蛹から抜けた蝶のように弾の意志を無視して、説明も録にせず言葉通り彼を本当に“変身”させた。

そこにいるのは無力な一般人ではない。Ｒｉｄｅｒ。彼は憧れた存在へと昇華した。ゆっくりと立ち上がったその全身は黄色い縦長の複眼をした頭部をして肉体は赤の鎧を胴に纏い所々銀の装飾をされており、特に右足には重々しい拘束具を思わせるデザインが為されている。その姿は月が主役となる夜が舞台になっていることもあり見た者は“吸血鬼（ヴァンパイア）”、そう呼ぶであろう。

名をキバ。人工知能が認証した人間のみが変身出来る選定を司るＲｉｄｅｒ。モモタロスが認めればどんな人物であってもキバの能力を扱う事が出来るが逆に言うならば彼が認めなければどれ程優秀であっても変身することは許されない。

肉体から疲労は消え、高揚感を弾は抑えられなかったがその熱を冷ましたのは未だ消えぬ脅威。現実が彼を夢心地から連れ戻す。

『ほら、早く前みて集中しろ』

「ギベ！」

突然の奇跡（ミラクル）に驚愕を、幸運を弾が噛み締め味わう前に腰に張り付いた蝙蝠もどきから叱咤を受ける。慌てて彼が前を見ると小動物を狩るハンターのように余裕たっぷりの佇まいで弾を追いかけていた化物（しにがみ）がつい先ほど行われた戦闘以上の速さでこちらに跳躍してきていた。化物は迷いなく遊び心を抜いた重い蹴りを放つ。それを弾はなんとか避けるが対象を失った一撃は地面を砕きクレーターのよう

な半球のへこみと周囲の大地を僅かに揺らした。

「うおっ！　……こ、怖ぇ～」

『……へぇ、やるじゃねえか』

あまりの威力に心底当たらなくて良かったと思う弾。一方、ほっとする弾にモモタロスは感心をしていた。弾が避けたということに。高速で駆動してこちらに向かってくる化物を危険だと判断して当たらないように自らの意志で三人のＲｉｄｅｒが手足も出なかった怪物の一撃を回避することが出来たのだ。

基本的にＲｉｄｅｒは搭乗訓練をしなければほとんど扱えない。何故なら超人的な動きをするのに今までの常識、経験で阻害されるからだ。そのため常人では出来ないような運動能力や優れた知識でそれを理解出来る優秀な人物でなければ扱うのに一苦労する。そのために格段に性能の低いブランクというＲｉｄｅｒから誰もが始め自身の認識のズレ、空白を埋めていく作業からスタートするのだが五反田弾には全くなく自然体で受け入れていた。普段の彼では無理であっただろう。不可能を現実にしたのは生命の危機。肉体の性能をはるかに凌駕する行動を脳が脊髄に伝達し強靭な外殻を手に入れ初めて可能となった偶然でしかない。

それでも体力の限界を超え、最高とはお世辞にも言えないコンディションの彼がそれを成功させたというのは蝙蝠もどき――――モモタロスの琴線に触れた。

『気絶でもした後に行動最適化（スタイル・アプトミゼーション）しようと思ってたんだがなー。まさかあの状態から制限されているといえキバをここまで使いこなすとは思わなかった。巻き込まれ系主人公が実在するとは……ううむ、これだけの逸材ならナビゲーションだけの方がいいか？　どうせ消化イベは確定だし操作（コントロール）無しでも機体の耐久性から死ぬことはないだろうから……』

「お…い……結局、オレ、はっ、どう…すりゃ、いい！」
「ブゾ、ボグゲビグ　ガダサバギ…！」

必死でバッタ怪人と命名した化物の突きや蹴りを避けていく弾を尻目に自分の世界を作り演算（シュミレート）を始めるモモタロス。自身が超人的な視覚、体裁きをしていることに気付かぬ彼はコンクリートの壁をアスファルトの地面を容易く壊す攻撃から必死で逃れる。思い込み、勘違いというものは恐ろしく今彼自身がその化物と思っているものと同じ高みにいることに全く理解していない。本気の一撃が掠りもしない事実に化物は苛立ちを着々と募らせていく。

「情報をくれ！　プリーズミー！」
「説明しよう。話は長くなるがことの始まりは――」
「簡潔に分かりやすく！」

大声でヤケクソ気味に声を腹から出すとようやく気付いたモモタロスがこちらと会話をようやく成立させた。しかし、卒業式で聞く校長の演説のような長さを予感させる文頭だったため素早く中断させて尚且つ釘を刺す。

『ドキッ☆　化物たちのＤＥＡＴＨ　ＧＡＭＥ、死人が出るよ！を邪魔したから殺されそうになった馬鹿がお前。Ｄｏ　ｙｏｕ　ｕｎｄａｓｔａｎｄ？』
「ムカツク！　無駄に流暢な英語が！　ちょっと上手いこと言ったなって感じの言葉が！　何よりその説明で大体理解できちまった俺がすげぇムカツクぅ！」

頭の悪い例え話と頭の悪い人間の嘆きが死が満ちていた空間で非常にミスマッチしていたが化物の追撃により微妙な空気はすぐに拡散される。

『悪ぃ悪ぃ。んーとな、結論を言うとお前はアレを殺せねえんだわ。絶対に』
「はぁ！？　ちょっと待て！　どういう……」

モモタロスの言葉に衝撃を受け動きを止めた所にここが好機と言わんばかりに拳のラッシュ、蹴りを放たれていく。会話を中断して慌てて敵の攻撃の間合いから遠ざかる弾。

『コイツはグロンギっつー正真正銘、天然の化物。超人的な怪力、運動能力、耐久性で、』

ほら、肩見てみろとモモタロスに促されるといつの間に名も知らぬＲｉｄｅｒが決死の思いで与えた肩の傷が無くなっていたことに気付く。人間であれば完治するのに一月はかかるであろう痛々しい跡は見当たらず健全そのものだ。数十分程度で修復したその回復力が目の前の異形が化物であることを弾に再認識させた。

『攻撃で肉が抉れてもすぐ治っちまうバグキャラ。おまけに質量兵器は対軍、対国並のモノじゃなきゃ効果は無い癖に知能は人間以上ときた。完全にお手上げだ』

その説明に彼はぞっとする。対軍、対国並の兵器といったらＩＳや核兵器レベルじゃなければ太刀打ちは出来ないということは弾の乏しい知識からでも分かることだった。対して彼は訓練もしていないただの素人。今更ながら自分の命がまだ繋ぎとめられている事、自身の行動に彼は肝を冷やす。

『つまりお前がするのは足止めだ。アレを倒せる奴がもう少ししたら来るからな』

「天ノ川にいたあの西洋甲冑みたいなＲｉｄｅｒか？」

ＩＳレベルの戦闘能力を持つ特別仕様のＲｉｄｅｒ。その絶対数は決して多くは無い。少なくとも弾が知っているのは指で数える程だがそのどれもが天才という域に留まらない鬼才。制限段階を超えるというのはそういう人種だ。ＩＳが選ばれた女性にしか扱えない聖剣ならＲｉｄｅｒは人類に与えられた誰もが扱える拳銃。価値は担い手の腕次第。天ノ川にいた黒騎士は間違いなくこの街にいるＲｉｄｅｒの中では最高水準の担い手に間違いないのは確か。

『いや、違うけどな。……そいつはきてのお楽しみだ』

「精々期待して待ってるよ、助けがくるのを」

吸血鬼（キバ）と化物（グロンギ）による一夜限りの舞踏会がこうして始まった。武器は己の体だと誇示するかのように風切る音と共に鋭い一撃が命を刈り取ろうとする。一方の吸血鬼である弾は一撃一撃をただ後方に下がりながら確実に捉え回避する。ずぶの素人である弾が攻撃してもたいした意味は無いし、そもそも格闘においてビギナーズラックを期待してはいけない。培われた技術と経験と才能の集大成が猛威を振るう場では非経験者などサンドバックになるだけだ。おまけにこれはなんでもありの死合い。油断すれば簡単に無意味に死ぬ。弾はこのように解釈していた。

『……そんなことよりさ、いい加減早く戦えよ、何の為に変身したんだよ』

「何のためって、」

先ほどのふざけた態度から一転してつまらなそうに告げられた声に生きる為だという言葉は出なかった。五反田弾が望んだのはＲｉｄｅｒになるためだ。Ｒｉｄｅｒとは兵器、戦うための存在。この

ように必死で逃げ惑う情けないものでは決して無い。勇敢に戦う画面の向こうのヒーローのような存在。

（そうだ。そうだよ、俺は――――！）

「強さが欲しいんだ。自分の意志を貫けるぐらい強く、大切な人を守れるくらい強く、なるんだ」

決意をしたばかりで忘れてしまいそうになっていた自分を彼は反省した。彼はＲｉｄｅｒになりたかった。子供ながら感じていた世の理不尽を糾弾できる程度の力が欲しかったからだ。別に世界が悪いわけではない。ただ、世界が正しさだけで出来ていることではないことを弾は知ったからだ。

世界を変革するほどの力を手にしたなら己を貫ける、そう思ったからこそ五反田弾はＲｉｄｅｒに憧れた。たったそれだけのことだ。

拳を強く握り逃げに徹したスタイルを捨ててグロンギの顔面に向けて右手を振り抜く。驚きに声が出なかったのは誰か。弾をその気にさせたモモタロスか、宙を舞い吹き飛んだ化物か、吹き飛ばした張本人か。

『名前は？』

「……え？」

なんとなく今の状況で聞く質問じゃない気がして弾は思わず聞き返す。

『お前の名前。聞いてなかっただろ？』

そういえば、と思い返していくと無我夢中で確かに名前を聞いてないのを彼は気付く。なんだかんだあったがＲｉｄｅｒにしてくれた命の恩人であるのだ。名前を名乗るくらいはしとくべきだろうと

思い蝙蝠にはっきりと自分の名前を彼は伝えた。

「弾。五反田弾だ」

『弾、か。俺の名前は……モモタロスだ』

聞こうと思ったら相手側から律儀に教えてくれたことに驚く。先の問いかけのときもそうだが最初のふざけた態度はただの演技であったのだろうかと思うほど人が違う。だがそんな驚きよりも彼が口に出したのは全く関係ない感想。

「変な名前だな」

『結構気に入ってるんだ。馬鹿にすんな』

「悪ぃ」

わりと本気のトーンで怒られて謝る弾。一方のモモタロスも何かこだわりがあるのか過敏に反応する。二人の様子はまるで昔から顔馴染みの悪友同士のようだった。

『さてと、足止めの必要はこれで必要なくなっちまったな』

「もしかして……倒しちまったのか？」

『んなわけあるか、あんなんで死ぬなら苦労しねえよ』

モモタロスの言葉に淡い希望を抱きながら吹き飛ばしたグロンギがいるであろう方角を見つめるがあっさり否定されてしまった。

「じゃあ、なんで」

『決まってるだろう。俺達で倒すんだ』

弾は怪訝に思った。矛盾しているのだ。モモタロスは不可能であると断言していたのに先ほど言った答えと真逆なことを言っている。

「さっき無理だって――」
『確かに殺せねえけどな。無力化は出来る』
「さきにいえよ」

その答えで脱力した。ただ、危険が伴うため本人に戦う意思がなければ無力化は出来ないのだ。それが解消されたからこそモモタロスは弾に伝える。言葉遊びもいいとこだがそうでければ唯の一般人である弾を今だ戦場に置かせることはしない。キバでいることがグロンギと戦うことが最も安全な方法であったのだ。万が一の場合でもキバの装甲は弾を護る鎧となるし逃げ出すことを選べばモモタロスは戦うことを強要しなかったであろう。いくつもの選択肢の中彼は戦うことを選び認められたのだ。

『どうした？　テンションひっくいぞ、弾？』
「それはお前もだろ。キャラは安定させろよモモタロス」
『あちゃー、痛いとこ突かれたな。お、どうやら奴さんも準備万端みたいだし改めて…キバっていくぜ！』

獣がいた。理性的な仮面が外れて剥き出しの野生で襲い掛かるグロンギ。言葉にできない唸り声と共に足技を繰り出していく。対する弾は全てを避けようとはせずある一撃は受け止め、またあるときは反撃の一打をかましていく。格闘、死合いという段階からただの殺し合いに堕ちた。今、グロンギにあるのは屈辱を与えた相手を八つ裂きにしてやりたいという想いだけだ。

「ズザベスバ…！　ズザベスバ、ズザベスバっ！」

洗練された技能や精彩な動きは見る影も無くもはや技ではなくただ怒りを撒き散らして暴れる畜生でしかない。同じ単語を繰り返し

攻撃を続けるが弾にダメージを与えるどころかさらに窮地にたたされていた。

「おーい、動きが雑だぞ？　そんなだと――」

勢いよくラリアットのように腕を振りかざした攻撃を難なく避けて弾は足を引っ掛けた。勢いあまり無様に転げ腹ばいの体勢となるグロンギ。

「転んじゃうぞ？」

後ろから余裕の声音で告げる弾。奇しくもこれは先ほど追い詰められていた弾と追い詰めたグロンギの構図をそのまま配役を逆転して再現する形になった。もし、彼が人間態であったら顔を真っ赤にして恥辱の表情をしたであろう。追い詰めていた獲物に逆に追い詰められることになったのだから。

「右腰にあるホルダーにある赤いフエッスルを俺の口に挿せ」

「こうか？」

『よし、いくぜぇ！　ＷＡＫＥ　ＵＰ！』

右手でホルダーにあった赤く細長い笛のような形状をしているものを口の部分に挿し込んだ。モモタロスが叫ぶと同時にベルトから外れそうしてキバの力を拘束する枷が一部だけだが開放される。

「うぇ！？　体が勝手に動くぞ！！？」

「行動最適化（スタイル・アプトミゼーション）中だ。つまりお前の体は今俺が支配している！」

「ふざけんな！　って言っても拒否権はねえんだろうな……ああ、もう！　やってやるよ！」

「ハッ、よく分かってんじゃねえか」

ゲームでいうなら弾は操作キャラでモモタロスはプレイヤーだ。コントローラーを握ったプレイヤー（モモタロス）から弾が抗う術はない。口で文句は言うが諦めて大人しくされるがままにする。

モモタロスの操作（コントロール）を受けキバは両手を広げ体の重心を落とす。鳥の囀りのような笛の音と共に周囲を旋回する蝙蝠の動きにあわせて腕を交差させて溜めを作る。右足を頭に届くほど高く振り上げ拘束され封印処理が施された右足をモモタロスの管理下の元で限定解除し紅い両羽が顕現した。地に着いた片足の力だけで上空に跳び上がる。洞窟の天井にぶら下がる蝙蝠のように足を空に向け三日月を背景に逆さとなるキバ。

ようやく立ち上がり見上げるグロンギの視界から月とキバが重なったとき引力で曳かれあうように化物に向けて落下していく。グロンギは避けきれず強烈な一撃となり激突する。地面にはクレーターの代わりにモモタロス――キバットバットを模したキバの紋章が大きく刻まれていた。

「バビ……ゾ、ギダっ！」

『ゴギゲベゲジョ！』

「ゴラゲ…！」

虹色の光に包み込まれもがいているグロンギ。どうやら光によって動きが制限されているらしく恨めしそうにキバを睨んでいる。彼らの言語らしきもので罵声を受けるとモモタロスが聞いたことの無い言葉を発していた。投げかけられと言葉はどうやらお気に召す回答ではなかったらしくさらに怒気を強めていた。

「そいつの言葉分かるのか？」

『まあな。っと……おい、弾。本命の登場だ』

モモタロスがいきなりそんなことをエンジン音が耳につく。
『ゾサ、ビボゲスザソ？　ギビガリン　ガギゴドガ』
「バンザド？　……ラガバ！」
一台のバイクがこちらに近づいていた。赤と金のラインが特徴的なバイクであったがそれ以上に搭乗者に弾は目がついた。いや、目を離す事が出来なかった。
「Ｒｉｄｅｒ……！」
搭乗していたＲｉｄｅｒはかつてあの世界最強と引き分けた一つの完成形にあまりにも似ていた。それもそのはずだ。搭乗者は同一人物でありこのＲｉｄｅｒは世界最強と引き分けたフォームの劣化版なのだから。
「モモタロス」
『なんだ博士（ドクター）』
「後で覚えておけよ」
声の質から弾と大した歳の変わらない少年であることが分かる。モモタロスに苦々しげに小言を呟くと赤いＲｉｄｅｒは跳躍して空中で回転すると動けなくなったグロンギに向かい蹴りを放った。
「クウガァァァァァァァァッ！」
Ｒｉｄｅｒの蹴りがあたった部分が発光し奇妙な紋様が浮かび上がるとグロンギの肉体は爆散し、肉片一つ残すことなく消滅した。消え去る直前までグロンギが残した断末魔が響き、弾の心に嫌に反

◆

「さて、五反田弾だったか。あんたには二つの選択肢がある」

そういって赤いＲｉｄｅｒは人差し指を弾に向ける。キバへの変身を解きグロンギが消滅した現場であり状況説明を彼から聞くことになった。まず彼があの織斑一夏であること。モモタロスは彼が造ったＲｉｄｅｒの一つであること。グロンギの存在は公に出来ないという事。ここまでのことは何処の誰にも話してはいけないということ。そこまで話し終えて彼は問いをした。

「全てを忘れて平穏な日常へ戻るか、平穏を捨てて茨の道に進むか。こっちが巻き込んだんだ。選択する自由くらいは尊重するよ」

「勿論」

当然、前者を五反田弾は選ばない。折角掴んだチャンス。これを逃せばきっと後悔する。それが分かってるから彼は、

「Ｒｉｄｅｒになるさ。やるに決まってる」

「いっとくけどもうキバは使えないぞ？　あれは特例だ」

「ああ」
「またあんな危険な目に遭ってもいいのか？」
「ああ」
「……」

一夏は理解した。弾の迷いのない瞳を見て。ぶれることのない意志を感じて。このような人間が『仮面ライダー』になっていくのだと。『仮面ライダー』はその力を持っているからそう呼ばれるのではなく確固たる信念を抱いた者がただそう呼ばれていくだけなのだと。そして、自分にはやはり『仮面ライダー』という名は重過ぎる。彼はそう感じずにはいられなかった。

沈黙からしばらくして変身を解く一夏。弾から見た変身が織斑一夏は端正なモデルのような顔立ちをしており、茶のパーカーブルゾンと黒のレザーパンツというシンプルな服装も何処かのファッション誌にでも載っていそうだなと彼は率直に思った。一夏はというとパーカーのポケットからメカニケルで奇抜なデザインの携帯を取り出し何処かに電話をした。

「ああ、終わりましたよ。確認済みです、ええ。キバの搭乗者と現在接触中です。それでですね……はい、データと戦果を見て妥当だと判断したんですが……資料ですか？　そうですね。後でそちらに送っときます。では」
『誰と連絡してたんだ？』

電話を終えた一夏にモモタロスが質問する。

「天ノ川の理事だ。さて、急で悪いんだけど五反田弾。あんたには次の月曜から天ノ川学園に転校してもらう」
「え、ちょ」
「ちなみに拒否権は無い。学園の関係者がやってくるから詳しいこ

とはそっちに聞いてくれ」

そう言って電話番号とメールアドレスを走り書きしたメモを弾に書いて渡すともういう事は無い、とでもいった様子で弾に背を向けてバイクに向かう。そのまま跨り黒のヘルメットを被るとそのままエンジンをならして走っていき徐々に影が小さくなっていった。

『また会おうぜ！　弾！』
「おう！　またな！」

モモタロスもそれを追うように飛んでいき弾に別れの言葉を残して去っていった。弾はそれに親指を立ててサムズアップする。完全に一台と一匹の影が見えなくなっていくと携帯を取り出して妹に連絡した。コールして一回ですぐ繋がり妹の大声が弾の耳にダメージを与えた。

『お兄！　無事なの！　生きてる？』
「無事じゃなきゃ電話なんかしないさ」

よく聞けば妹の声が上ずっていることがわかった。兄を心配してかと思うと弾は少しこそばゆかった。照れ隠しに少し澄ました調子で己の無事を彼は伝えた。

『よかったー』
「心配させて悪かったな」
『だって帰れなくなっちゃうじゃん。お兄が死んだら』
「そっちの心配かよ！」

こんな調子で会話を続けながら弾は蘭の元に向かう。こうして長いようで短かった夜の一幕が閉じて弾の新たな物語は始まり、日常

に別れを告げた。

アドリブ・笑顔を忘れてしまった君に

橙色の灯りに照らされた長い長いトンネルを一台のバイクが走る。搭乗者は織斑一夏。後ろに後続して飛んでいる蝙蝠と共に風都からＩＳ学園に戻るために土曜の夜の高速道路を走行していた。重心を傾けて少しずつ緩やかなカーブを描いて進行方向をずらしていく。黒いヘルメットが鈍く光を反射させ、暗い出口を目指しギアをさらにあげた。

『で、到着するのになんであんなに時間がかかったんだ？　そろそろ教えろよ。今なら余計な視線も聞き耳をする機械（オモチャ）もないだろ？』

衛星で空から映されることはなく隠し付けられた盗聴器もない今、情報の漏洩はない。彼は外界から隔絶された瞬間的な閉鎖空間の中、秘密の談話を己が作り出した人工知能と交わす。

織斑一夏は素を晒して、モモタロスは道化を辞めて顔を合わせることなく話を進めた。

グロンギと交戦しているＲｉｄｅｒを見つけたモモタロスからの緊急信号が届いて彼は駆けつけたが出現地の近辺にいたにも関わらず彼の到着の遅さは尋常ではなかった。妄執に近い執着を抱いている一夏ならいの一番に駆けつけ被害を最小限に抑えるために肉一片を残すことなく殲滅するはずであるから。そんな彼が五反田弾が戦闘を終えるまでにやってくることがなかったのは異常、といえた。

「――――また、“発作”が起きた」

そういってヘルメットで覆われた後頭部を左腕でさする。
勇み足を踏み止まらした正体は強烈な頭痛。
原因は過去決して彼が得るべきではないものを手に取った罰。呪いといっても過言ではない代物。同時に力の根源。彼をあたかも天才であるかのように振舞わせる代償の痛みは織斑一夏が『織斑一夏』という存在から乖離した最大の要因であった。

『は、なるほどな。ま、“自分”だけは見失うなよ？　さもなきゃ――』
「分かってる。モモタロス、いや■■に余計な手間は取らせないようにするさ」

モモタロスが言おうとした続きを意図的に止める。肝心の中身を飛ばして結論だけを伝える一夏の言葉にほんの少し言葉を濁して同じようにぼかして結論を述べた。

『……頼むぜ、ホント。俺“本来の存在意義”とはいえ、さすがに胸糞悪ぃからな』

会話が途切れると出口がもう目の前に迫っていた。トンネルを抜けると世界は開かれ、英知の灯火が照らし星を陰らせた現代の街並みが目につく。夜を支配していた月と星は煌びやかな下界にかき消され近代化の恩恵と寂しさを感じさせる。
日本の雨季特有の湿った生温い風に当てられながらアクセルをもう一度踏む一夏。時刻は今、零時を過ぎて日付は変更される。世界は今日もありとあらゆる存在を許容して廻っていた。

◆

深夜二時七分三十一秒。ＩＳ学園に一台のバイクが到着していた。男は簡易的作業の受付を終えた搭乗者は同行するロボットと共に寝食をする寮の部屋へ向かう。

「化物退治は無事済んだようだな」

人間の生理的欲求の一つ、睡眠をとる為に足早に歩を進めていた彼へ出会い頭に激励の言葉をかけた人物がいた。暗がりから現れたのはスーツ姿の女性、彼の姉にあたる人物。

「はは、なんでもご存知ですね。織斑先生」

「何、親切な知り合いから連絡があってたまたま知っただけだ」

愛想笑いをして『五代雄介』という役を演じて返事を返す一夏。だがこの仮面がゆっくりと剥がれ落ちていく感覚を確かに味わっていた。原因は言うまでもない。それに千冬も気付いているからこそ薄く唇を伸ばすだけであえて言及はせず彼の舞台の上に立つ。

彼の内心は苦虫を奥歯で噛み潰した気分である。僅か数時間前にＲｉｄｅｒ側で起きたイレギュラーな襲撃を彼女が知るのは別段驚く要素はない。ＩＳ世界最強という地位に着いた人間のコネクションはあらゆる業界の重鎮と繋がっているのだと予想がつくからだ。

問題は一つ。

「それは何時ごろの話ですか？」

襲撃があったのは逢魔が時。太陽と月が入れ替わる夕暮れに予兆のない災害は突発的に起きた。

なら、襲撃を知るにはどんなに早くても夜でなくてはならない。

「今日の昼にいきなり電話が来たよ。日曜朝八時から起こる安っぽい勧善懲悪の事件（イベント）が起こるという旨の犯行予告（あんない）がな。全くアレは何を考えているんだか……」

「それはオレにも、分かりませんよ」

やはりというべきかこの襲撃は計画的なものであった。そして織斑千冬に風都に襲撃があると伝えた親切な誰かさんについても予想がつく。だが、すぐにロジックは矛盾に行き詰る。襲撃犯の一味と関わりを電話の主が持っているのはもはや疑う余地すらない。わざわざ襲撃することを何故彼女は伝えた？

愉快犯といえばそれでお終いだが恐らくない。よ悪戯だと一蹴して静観を決め込む可能性の高い千冬より一夏にした方が何倍も面白い劇になったであろうと容易に予想がつくから。『白騎士事件』ですら死者も怪我人も出さずに済ませた天才にしては雑すぎる遊びだ。故に彼女の行動原理は確固たる理由が存在する。そう一夏は考察した。だからこそ肝心の行動原理の原動力が解らない事に彼は悩んでいた。

「まあ、元気そうで何よりだ。

———あまり、生き急ぐなよ、一夏」

姉として、教師としての本心であろう。僅かに見せた憂う表情をすぐにニヒルな笑みに変えると宝塚の花形のように華麗に去っていく。

一夏は心でそれは無理な相談だ、と返すとお姫様が待っている部屋への帰路に着く。

『シリアスシーンは終わったか、おい』

完全に千冬に声と気配が察知されない距離になったところで小声で話しかけるモモタロス。前回の教室での一件で少し彼女のことが苦手になっているのだろう。会話中も気取られぬよう細心の注意を払っていた。最も千冬は気付いていたが。

「さっきまではお前もシリアスしてたじゃないか」

小馬鹿にしたニュアンスで思ったままを伝える一夏。

彼は仕事（ビジネス）と家族（ちふゆ）に素を見せることはしない。見せれば決定的な綻びを生んでしまうから。以前、彼女に晒したのは所詮は過去の残照であり今の織斑一夏を構成する重要な骨組みではない。

箒や鈴、シャルロット、弾にあっさりと素を晒してしてしまったのは親しみを持ちやすいようにという打算的意味合いだ。しかし、本当は同年代の仲間が『友達』が欲しいという幼い欲求からきたものかもしれない。

『いや、それはアレだ。そう、最近ネットでレンタルした凡用人型決戦兵器に出てくる二重スパイっぽい真似事が最近のマイブームなんだよ』

「相変わらず嘘が下手だな」

誤魔化しになっていない意味不明な言い訳から始まったちょっとした漫才をしてる内に寮の部屋に着き扉の鍵を開錠して部屋に入る。モモタロスが「違う、オレは嘘なんかついてない！　信じてくれよ！」などと戯言を抜かしていたが一夏は無視してリビングへ進む。

物語に緩急は必要だがいきなりぶち壊してはいけない。感動も意味深な伏線もすべてこうやって台無しにしてしまう。
明りが漏れ、ガサガサと物を探る音がする部屋に入ると一夏の私物が入っているダンボールを漁るシャルロットの背がまず目についた。次いで、パスワード入力画面のまま放置されたプライベート用のノートPC。IS学園、風都に関する大した意味も価値もない面倒な手続き書類と着替え。モモタロスの漫画、ゲームといった娯楽品。最後に机に置いてあった写真立てを見て再びシャルロットにピントを戻す。

「……。はあっ……」

彼女の疲労と哀愁が聞く者全てに伝わる特大のため息が漏れる。夏休みの宿題を最後の一日でやろうとして終わりそうにない悲壮感に似ていた。一夏が帰って来た事に気付かないくらい沈みながらそびえ立つダンボールの山からの発掘をしていた。

「ううっ、全然見つからない……」

思わず弱音が零れた。風都に出張にいった今がチャンスだとばかりに探したのはいいがとてもじゃないがデュノア社の利益になりそうな情報源やアイテムは見つからない。シャルロットは途方にくれもう今日は諦めようと思ったところで天の声が聞こえる。

『なに探してるんだ？』
「んーとね、本当は嫌なんだけどオリムラ博士がいないうちに研究成果とか、デュノアに役立ちそうな情報を探してるんだ」
『そいつは面倒だなあ、つうか生活空間に機密情報放置するか、常識的に考えて』
「オリムラ博士みたいな天才肌は大抵、自身のこと以外はどうでも

いい社会不適合型で小難しいことには無頓着だろうってプロファイリングのお墨付きがあるから大丈夫だと思うよ」

質問をする側が恐縮してしまいそうなほど彼女の口から滑らかに言葉が零れ落ちていく。あまりにも素直に面白いように質問に律儀に返すのを好機と見たのか会話を続行する蝙蝠。シャルロットもモモタロスもとても生き生きしていた。これから先の未来を知らぬ者と思い浮かべてほくそ笑む物と違いはあるが。

傍観者になった社会不適合型人間の烙印を押された一人の男はさっさと声をかけようと思っていたが彼女の余計な一言のおかげで額の青筋が現れながらも自分の首を真綿で絞める愚行をする少女をただ静観していた。

「でも見つからないの」

『まあどっかにあると思うならまだ抜けがあるんじゃねえのか？』

可笑しいのを堪えてモモタロスは疑問系で答える。

彼女の自爆を狙っているのだ。

絶望のゴールへと悪魔がゆっくりと誘う。

「そんなわけないよ。僕、部屋の隅から隅まで全部探したよ。キッチン、リビング、シャワールーム、ベッド、天井裏、床下。部屋中全部！」

打って響くように次々と答えていく。まだ一人しかいないはずの状況で会話をしていることに疑問を持たない。

彼女の後ろにいる悪魔と鬼に気づかない。

『ＰＣや荷物も調べたのか』

「勿論したけど……ＰＣのロックは解読できそうにない暗号だし。

ダメ元で荷物を漁っても関係ないただの私物だけなんだもん」

口を膨らませて女の子座りで拗ねる姿はとても可愛らしいが背景で台無しとなっている。

ここで彼女はようやく自分が背後にいる誰かと会話していることに手遅れながら意識が向いた。

『そりゃ骨折り損のくたびれ儲けだなー』

「うん……」

『そんなお嬢様（プリンセス）に朗報。とっても簡単な解決法を提供するＺＥ☆』

「え！？　なになに！　お…し……えて」

振り向くまでは幸福であった。

そして、絶望が彼女のゴールになった。

『本人に聞けばいいんじゃなイカ！』

聞いて天国、見て地獄。ことわざ的意味ではなく物理的な意味で。

古典的な誘導尋問に引っかかり全て吐（ゲロッて）いてしまった犯人（ホシ）。

彼女は思った。救いがあればいいなぁと。

仁王立ちして無表情の彼を見て顔を引き攣らせながら漠然とまず思った。

「……」

「……」

『ねえねえ、聞かないの？　本人いるんだ聞こうぜ、なあ？　シャルロットさんよお』

互いに無言。シャルロット・デュノアは目撃され、目的もばれてしまいいた堪れなくて。織斑一夏は彼女の返答を待っているため。

共通しているのはどちらもモモタロスの言葉に一切耳を傾けていないこと。

『無視すんなよ、傷つくんだからな！　博士もそう思うだろ』

「……」

『ゑ？　無視？　くそっどいつもこいつも僕を馬鹿にしやがって！　馬鹿にしやがって！　馬鹿にしやがって！！』

「煩い。とりあえずデュノア、これ無視して話進めていくからな？」

「あ、うん。わかった」

シャルロットの言葉と共に彼女のいる方向に足を動かす。

一瞬身体を彼女は硬直させるが一夏はそのまま通り過ぎていく。

大きめのペットボトルに入った紅茶を冷蔵庫から取り出してガラスのコップ二つに注ぐと彼女に手渡す。

喚く飛行物体を諌めると本題を直接ぶつけた。

「デュノアが何を言われたのかも何を思ってるのかも俺は知らないけどな。デュノア社が何を企んでいるかくらいは俺にも分かるさ。そのために近づいてきたんだろ？」

「やっぱり分かってたんだ。そんな気はしたんだよね。……僕のこと、どのくらい知ってるの？」

顔を俯かせ表情は窺い知れないが諦めに似た思いをコップの中で波打つ液体が伝えていた。

「――一般に公式できない類の血縁者ってぐらいだけだ」

暗に彼女の略歴を網羅済みということを告げる。

「そっか。じゃあ不幸話で同情票は期待できないね」

なんて自虐して乾いた笑いをただ繋げていく。誰も茶々を入れようとすることはない。どうしようもなく哀れなヒロインがいた。同情も慰めも望まないただ、救われたいと願う少女が、一人。

「ああ。同情なんかじゃ気を引かれはしない。不幸話なんて誰もが一つや二つ持ってるもんさ」

凰鈴音という少女は家庭が壊れる瞬間を目にした。
セシリア・オルコットは両親を幼い内に喪失した。
篠ノ之箒という少女はＩＳのせいで家族と幼馴染と引き離されてしまった。
そして、織斑一夏もまた同じように不幸な過去がある。

「厳しいね。でも、きっと正しいことなんだよね。不幸を知らない人の方が珍しいことなんだろうけど、僕はもうどうでもよくなっちゃった」
「……」
「ああ。なんだか話したら楽になったよ。今まで僕の都合に付き合ってくれてありがとう、オリムラ博士」

頭を深々と下げようとしたところで何かが彼女の行動に待ったをかけた。

『いいのか、それで』
「え……？」
『お前の人生だろ？　何諦めてるんだよ。親が何だっていうんだ。自分で考えて行動してみろよ、シャルロット・デュノア！』
「モ、モモタロス……？」

戸惑いの表情を浮かべるシャルロット。
当然だ。機械で出来た心の無い物が当たり前のように怒り、叱咤しているのだから。
プロミラングされているとは思えない魂が篭った言霊をぶつけた。
人間よりも人間らしい感情が止めどなく爆発されていく。

「そこまでにしておけ」

シャルロットの顔に近づきながら言葉を吐き続けていた『彼』を一夏が再度諌める。

「ど、どうしたの？　モモタロス変だよ、博士？」
「コイツは俺が造った兵器（モノ）だ。当然、生みの親である俺の事も知っている」
「えっと……」
「分かりやすくいえば織斑の姉弟は捨て子だったって話だ。ちょっとした不幸話だよ」
「あ……」

少し調べれば簡単に分かることだ。これほど世界的有名な子供を輩出した親について一切の情報が驚くほどない。両親の話がまるで禁句のようにないという事実から推測だけでも彼らに親がいない事実は浮き彫りになる。
事前に知っていたことを思い出した彼女は罪悪感で思わず顔を背ける。

「謝るなよデュノア。何年もたった一人の家族から行方を眩ましたやつだ。俺も結局そんな最低な人間と同類なんだからよ。そんなことよりデュノアはこれからどうするんだ？」

彼女が謝ると思ったのであろう。
先に言うだけいって弁解の余地を塞ぐと今後の身の振り方を尋ねる。

「どうって……もうここにいる意味も無くなっちゃったしフランスに戻ってデュノアのＩＳ事業が自然消滅するまで細々とテストパイロットしてるしかないんじゃないかな」
『おいおい、それでいいのか？』

クールダウンしたモモタロスが問うと彼女は微笑む。理矢理自分の気持ちを押さえ込んだ痛々しいそれはシャルロットの諦観を写す鏡でった。

「良いか悪いってことの価値は分からないし、そもそも選ぶ権利も僕にはないから」

本当はもっと違う意味、タイミングで教えるつもりだったことであった。
苛立った。腹が立った。こんな短絡的であったのかと自分でも驚く理由で自身の計画を崩してしまうことに驚いたが彼に後悔の念だけは塵一つ無い。

「だったら、ここにいろ……モモタロス。特記事項二一復唱」
「え？」
『特記事項二一、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする』

これが織斑一夏の逆転の一手。
本来なら専用機との友好をもう一段階深めさせて情に訴えるとい

う卑劣な手段でこちらに引き込むつもりであった。
シャルロットに反逆する意志がなければこれは全く意味をなさないからだ。
今コレを提示したのは早計だ。浅慮だ。愚策であるのは間違いない。まだまだ青いな、と一夏は痛感したが捨てたくない心だなとも同時に実感した。

「――つまり、三年間の自由は学園(ここ)が保障してくれているるわけだ。なに、いくあてが無かったらこっちで就職先を斡旋してやる。Ｒｉｄｅｒ産業は発展途上中だからな」

だから、今だけはこの哀れな灰かぶり(シンデレラ)を魔法の言葉で救ってやることに決めた。

「ありがとう、モモタロス……そして『一夏』」
『おうよ』
「……」

屈託の無い、取り繕わない少女の本当の笑顔があった。シャルロットが淡い恋心を抱いた瞬間でもあった。少年は彼女の変わった心境に気が付くことなく、ただ眩しすぎる笑みに一人の人間を重ね合わせる。

――五代さん。ほんの少しだけ貴方に近づけた。そんな気がしたよ。

テーブルに置かれた一枚の写真立て。そこには一人の青年と子供が写っていた。

面倒くさそうに嫌々な表情をする可愛げのない少年と楽しそうに笑い少年の肩を抑えてサムズアップする青年が写る写真。
写っている人間の名は少年が織斑一夏であり青年は五代雄介という名の男だ。かつて『ライダー』と呼ばれた青年。かつて『クウガ』と呼ばれた戦士。
誰かの笑顔を護るために戦った英雄が写された最期の写真である。
彼はもういない。
だがこの世界にはまだ、彼の意思を受け継いでる者がいる。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9979s/

Rider Series

2011年12月17日01時59分発行